魔法の合成師

Sumire

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法の合成師

【Ｎコード】
Ｎ１３８５Ｗ

【作者名】
Ｓｕｍｉｒｅ

【あらすじ】
ある日、不思議な女性に魔法の世界に連れて行かれた森嶋聡一。
その世界で魔法を手に入れる。
手に入れた魔法は合成魔法。
この魔法は二つの魔法を合成することにより、新たなひとつの魔法を作りだすというもので・・

act1　肝試し

カタカタカタカタカタ・・
少女はパソコンで何か文章を書いている。
「ハァー」
少女は溜め息をつくとパソコンをシャットダウンした。
玄関にむかい、靴を履く。
外に出ると少女は、ゆっくりと歩き始める。
向かった先は学校だ。
しかし、今日は日曜日で夕方だ。
それでも少女は学校に入る。
正面玄関は鍵がかけられるため、金曜日に鍵を開けっぱなしにしておいた一階の窓から校舎内に入る。
少女は行き先が決まっているかのように階段をのぼる。
そして最上階の屋上につながる扉の前まで来る。
その扉を開き、屋上に出る。
少女が学校に入ったときとは違い、少し雨が降っている。
それでも少女は屋上に出て、落下防止用の柵の前まで行く。
雨は、さらに強さを増してくる。
少女は柵を乗り越え、その先にある、とても狭い足場に立ちつくしている。
しばらく立ちつくした後、少女は笑みを浮かべ屋上から飛びおりる・・・

☆　☆　☆

「なぁ、聡一(そういち)今日、肝試しに行かないか？」
季節は真夏。夏といえばコレ！と言わんばかりに浩介が言う。
「別にいいけど、二人で行っても楽しくないだろう。」

「あぁ、それなら女子数名確保してあるから。」
「ふーん。じゃあ、何時にどこ行けばいいの？」
「八時に町はずれの墓場で。」
「了解。」
朝っぱらから肝試しの話するか？と思いながらも一応、行くと答えた聡一だが、肝試しが好きなわけではない。なぜなら霊を信じていないからだ。そしていたとしても怖いとは思わない。そもそも、死んだ人には、もう会えないという考えが間違いだとしたら霊は存在してもおかしくないわけだ。「信じていない」理由は、自分で見たことがないだけであって、
その存在を自分で確認したら、すぐに信じるだろう。

チャイムが鳴り、先生が教室に入ってくる。
生徒たちは席につく。
「最初に、皆に言わなくてはいけないことがある。」
担任は、とても真剣で周囲の空気を重くさせるような表情をしている。
「誰か、なんかしたのか？」
「おいおい、なんだよ・・」
少し教室がざわつく。
「静かに。これは、本当に重大な問題だ。だから、これから緊急の全校集会を行う。
詳しいことは集会で話されるが、皆には先に言っておく。三組の高梨柚月（たかなしゆづき）が自殺した。」
「自殺？」
「マジかよ・・」
また教室がざわつく。
「静かに。体育館に行くから廊下に並べ。」
生徒たちは静かに廊下に並ぶ。列を乱さずに体育館へ向かう。

体育館に全校生徒がそろうと、校長が壇上に上がり、自殺について説明を始める。

校長の話は、とても長かった。三十分・・いや、一時間経っただろうか・・
話の最中には、柚月と仲の良かった思われる女子たちの泣く声が聞こえる。
校長の説明は、とても詳しく、あまりにも生々しい話だったので、中学生の前で言うような話か？と思った。

自殺の詳しい状況については、今日の朝、出勤してきた教員が柚月の死体を発見した。
うつ伏せになるように倒れており、頭からは考えられないほど大量の血が流れており、
すぐに警察と救急車を呼んだということだ。
その後、病院に運ばれたが死亡が確認された。というような感じだ。
自殺した理由は調査中とのこと。

集会が終わり全校生徒は教室に戻る。
「今日は、もう下校だ。」
担任が言う。すぐに帰る準備をし、帰りのホームルームが行われ、下校する。
聡一は、浩介といつも一緒に帰っている。
「なぁ、俺、高梨ってやつの顔わかんないんだけど。」
少し柚月に悪いと思いながらも聡一は浩介に聞く
「俺も、わかんないんだけどさ、結構かわいかったらしいぜ。」
「ふーん。でもさ、まさか同学年で自殺をするやつが出るとわな。」
「あぁ、俺も驚いた。いじめとかでもあったのか？」
「さぁな。」
「そっか・・」

「でもさ、今日の肝試しは続行だからな。他の奴らもいいって言ってたし。」
なんて不謹慎なやつなんだ・・でも、まぁ仕方のないことなのかな。
同じ学校の同学年とはいえ、顔も覚えてないし、一度も話したことのないやつだからな。
「どうした?」
「え?あぁ、わかった。」
思わず黙り込んでしまっていたらしい。なんとか誤魔化せたからいいけど。

☆　☆　☆

時刻は午後七時三十分。
肝試しをするのに、指定された場所に行くには今から行かないと間に合わない。
あまり、行く気にはなれなかったが、約束してしまったから仕方なく行くことにする。
自転車を出し、少し急いで墓場へ向かう。
墓場の入り口に着くと、もうすでに五、六人の人が集まっていた。
「よし、これで全員そろったな。じゃあ行くか。」
浩介を先頭に全員でゆっくりと進む。
墓場は、とても暗く懐中電灯の明かりだけでは、前がよく見えない。
どんどん奥へ進み、一番奥にある祠まで来る。
その祠は、とても小さく何が祀られているのかもわからない。
突然、強い風が吹き始め、木々がざわめく。
「ねぇ、あれなに?」
一人の女子が祠の横に立っている大きな柳の木を指差す。
「うわっ、なんだよ!」
その方向を見た浩介は驚きのあまり声を出してしまう。
浩介の声を聞いた他のメンバーも、柳の木を見る。

柳の木の後ろには白い光が見える。そんなに遠くないはずなのに、とても遠くで光ってるように感じた。

肝試しに来たメンバーは、「さすがにヤバい」と言って、その場を逃げるように立ち去る。

聡一は、祠の前に残り、光の正体を確かめることにした。

ａｃｔ１　肝試し（後書き）

話の進行が遅いかもしれません。
更新も毎日はできないと思いますが
よろしくお願いします。

act2　不思議な女性

その光は、少しずつ近づいてくる。聡一は覚悟を決め、口の中に溜まった唾液をのみ込む。
「へー、君は逃げないんだ。」
光のほうから女性の声が聞こえる。
「え？」
声のする方に立っていたのは、一人の女性だった。
その女性は、高校生くらいで長い黒髪を後ろで一つに束ねている。暗いので顔は、よく見えない。
「だから、普通こんな時間に墓場に一人でいる人なんて見たら怖くなんない？」
「いや・・普通、霊的なものって、なんていうか・・とにかく、俺から見たら、あなたは怖くありませんよ？」
「そう？じゃあ、一応、自己紹介。私は幽崎美羽（ゆうざきみはね）　君は？」
「森嶋聡一（もりしまそういち）です・・」
「聡一君ね。じゃあ君に頼みがあるんだけど。」
「・・・」
待て待て、まだ会ってから五分も経ってないよな？
それなのに、いきなり頼みごとって・・
「何、黙ってんの？まぁ、いいや。一応、言っておくね。この世界を守るために私と戦ってくれない？」
「は？」
なんだよ、ただの電波さんかよ・・相手にするだけ無駄かもな。
「まぁ、正確には、この世界ともう一つある世界なんだけど・・」
「その話、聞く価値ありますか？」
「死にたくないんだったら聞いた方がいいと思うよ？」
おいおい、同学年のやつが自殺した日の夜に「死にたくない」とか言われたらな・・

当然、俺は死にたくない。だから一応、聞いてみることにする。
「わかりました・・あくまでも死にたくないから聞くんですよ?」
「それでもいいよ。多分、全然、信じれないと思うけど最後まで聞いてね。」
「続けてください。」
「うん。まず、この世界では科学がすごく発展してるでしょ?」
「はい。」
「で、もうひとつの世界・・私がいた世界なんだけど、そっちは魔法が発展してるんだよね。」
「じゃあ、魔法が使えるんですか?」
「うん。こんな感じ。」
暗くて良く見えないが女性の表情が変わったような気がした。
その瞬間、聡一をありえない強さの風が襲う。
あまりの強さに倒れてしまう。
「え?・・え?」
思わず、戸惑ってしまう。
「今のが私の魔法。風を操れるんだよね。」
そして、また女性の表情が変わったような気がする。今度は、笑顔に。
「今の・・あなたがやったんですか?」
「そうだよ?これで信じてくれた?」
「い、一応ですけど・・」
本当にありえない。でも、目の前でやられてしまうと、信じるしかなくなってしまう訳だ。
「まだ、信じてくれないか・・まぁ、いいや。どこまで話たっけ?」
「えーと、もう一つの世界には魔法があるってところまで・・」
「そうそう、もう生活には魔法が欠かせないくらいに重要なものになってて、
この世界でいう、科学くらい重要なものなのよね。」
「それが・・なんで世界を救うとかいう話になるんですか?」

「それは・・むこうの世界にも、いくつかの国があって、私がいた国が他国と戦争中なの。
まぁ、言ってみれば魔法戦争ってことね。で、現在その戦争の戦況は圧倒的不利。
負けが確定しているようなもので、このままでは国民にも甚大な被害が出る可能性がある。
そこで王の出した答えが、この世界の住人と自分の国の人を魔法によって入れ替えるということ。これは王の魔力があれば不可能なことじゃないわ。
でも、そんなことをしてしまえば、科学を維持することによって生活が出来ている場所に魔法を維持することによって生活できている人々が来るってこと。」
「それの、何が悪いんですか？」
「だから、科学の維持方法をわからない人たちが、この世界に来てしまえば、科学がすぐに崩壊して、生活ができなくなってしまうってこと。
逆に魔法の維持方法がわからない、こっちの世界の人たちが魔法を維持している場所に
行っても、魔法が使えないから生活が困難になってしまうってわけ。」
「えーと、まだわからないんですけど・・」
「うーん・・じゃあ魚がいきなり水の無い場所で生活しろと言われても無理でしょ？
まぁ・・進化していけば不可能でもないんだけど、長い時間がかかってしまうでしょ。
で、陸で生きている生物が水中で生きろって言われても無理。」
「うーん・・なんとなく、わかったような気がします。」
「じゃあ、協力してくれる？」
「考えておきます。」
「じゃあ、明日までね。」

そう言うと女性は、どこかへ歩いて行く。
なんだったのだろう・・不思議な人だったな。
言っていることは、なんとなく正しいような気がするけど・・
でも、なんで、俺なんかに協力を求めたのかな・・
不思議に思いながらも、先に行ったメンバーが待っていると思ったので
急ぎ足で墓の入り口まで戻る。

「あぁ、やっときたか。何やってたんだよ・・」
「ごめん、ごめん。ちょっと気になるものがあってさ・・」
「それは、いいとして、まだ一人たりないんだよな。」
「え?俺は見てないけど。」
「そうか。もう帰ったのかな?いいや、もう帰っちゃおうぜ。」
どうやら浩介は、他のメンバーが帰っても、一人で俺を待っていてくれたようだ。
こんな薄暗くて、気味の悪い場所で・・感謝しなくちゃな。
二人は自転車を猛スピードで走らせ、家に帰る。

act3　自殺の理由

「そろそろ起きないと遅刻するよ?」
翌日の朝、聡一は聞きなれない声で目が覚める。
「うーん・・うわぁっ!」
その声の主は昨日の肝試しのとき墓場で会った幽崎美羽だった。
「なんで、そんな大声出すの?」
「いやいやいや・・まず、どうやって入った?そして、なんで来た?」
「えーと、昨日、君に使った魔法って「風」だったでしょ?」
「そういえば、強い風が起きたような・・」
「それを応用して、体を浮かせて窓から入ったってわけ。」
この部屋は二階にある。玄関も鍵がかかっている。
「それで、私に協力してくれるの?」
「うーん・・」
「お願い。」
美羽は、手を合わせながら、こちらを見ている。
美羽の顔は、このとき初めて見た。・・意外とかわいい・・
なんていうか不思議な気分になる。こんなかわいい女の子がこんな近くにいるのは初めてだ。ヤバい・・このままじゃ惚れてしまいそうだ・・
「・・わかったよ。」
なんとか、その場を回避するために「世界を救う」ことを承諾してしまう。
「やってしまった・・」そう思ったときには、もう遅かった。
「ホントに?ありがとう!」
「いや、えーと・・で、何をすればいいの?」
今更、「やっぱ、無理」などと言えるような状態ではない。
美羽の嬉しそうな表情・・あぁ、どうしようか・・

仕方ない。どうせなら世界の一つや二つ救ってやろうじゃねえか！
聡一が人生で一番の決断をした瞬間だった。
「じゃあ、今日の昼休み、君の通ってる学校の屋上に来てね。」
「え？それだけでいいの？」
「うん。じゃあ、もう一回、自己紹介。私は幽崎美羽。魔法の世界の住人です。」
「森嶋聡一。絶対に世界を救ってみせます。」
「お？言ってくれたわね？じゃあ、よろしくね。聡一君。」
「・・・・・」
女の子に下の名前で呼ばれたのなんて初めてだ・・
「何、黙ってんの？まぁ、いいけど遅刻するよ？」
「あぁ！すっかり学校のこと、忘れてた・・」
本当に何やってんだろうな・・俺。

☆　☆　☆

翌日は通常どおり授業が行われた。
たとえ前日に自殺があったとしても、授業は通常どおり行われるらしい。
四時間目の授業を受けている途中、美羽の言った言葉を思い出す。
「昼休みに、屋上に来て。」
なんとなくだが屋上に行くことによって、魔法の有無、世界崩壊の事実がわかるような気がした。
たとえ、わからなくても昼休みを無駄にするくらいだから、大したことはない。
昼休みのことを考えているうちに四時間目の授業が終わる。
それぞれ班にわかれて、給食を食べる準備をする。
給食関連の当番に当たって無い人は、準備中は自由な時間を過ごせる。
聡一は自分の分の給食を貰いに行き、自分の席で他の人の給食が終

わるのを待つ。
全員、準備が終わると、日直が「いただきます」とあいさつをして、給食を食べ始める。
今日のメニューは、カレーだ。このカレーは、あまり辛くない味付けになっている。
そのおかげで早く食べ終えることができる。
「ごちそうさま」をする時間は決まっており、その時間になったら食べている途中でも片づけなくてはいけない。この時間の五分くらい前に食べ終わったが、班の人と会話することもなく、静かに「ごちそうさま」をするのを待つ。
「ごちそうさまでした」
日直が言うと皆、一斉に食器を片づけ始める。
人混みの嫌いな人は少しタイミングをずらして片づけをする。
聡一も、その一人だ。
片付け終わったあとは昼休みになり、自由に過ごすことができる。
食器を片づけ終わった聡一は、少し急ぎ足で屋上に向かう。
屋上は四階。三年生の教室は三階のため、すぐに屋上につく。
屋上の扉を開けると、美羽と見知らぬ女の子がいた。年は、聡一と同じくらい。
見た目は・・それなりにかわいい。黒いショートヘアーをしている。
「お?約束どおり来てくれたね。」
「そりゃあ、色々、気になる事がありましたからね。」
「美羽さん、この人、誰ですか?」
見知らぬ女の子は美羽にだけ聞こえるように小声で言ったが聡一にも丸聞こえだった。
「そういう、君は誰だよ?」
この学校の制服を着てるし、年上ではないだろう。
そう思い、あまり丁寧な言葉は使わなかった。
「え?私・・ですか?」
「うん。」

見知らぬ女の子は美羽の方をチラっと見る。
「この人は味方だよ。」
と美羽が言う。
「わ、私は高梨・・高梨柚月です・・」
「へー、たかな・・って、自殺したんじゃねーのかよ!?」
「えーと・・それは、その・・」
「いいわ、私が説明するから。
この子は自殺したと思われてるけど実際は、そうじゃないわ。」
「じゃあ、なんなんですか?」
「魔法で一時的に仮死状態にしただけ。」
「・・なんで、そんなことを?」
「死んだことにしておけば、いつでも魔法の世界に来れるから。」
「それと、どういう関係があるんですか?」
「だから、生きてたら毎日、学校に行かなくちゃいけないでしょ?
でも、死んでたら存在しないことになってるから、なんでも都合のいいときにできるってわけ。」
「じゃあ、俺も死んだことにされるんですか?」
「いや、別にいいけど?」
「じゃあ、なんで高梨は・・」
「柚月は何回か魔法の世界に来ていて、もう魔法も使えるのよ?
だったら自由に「こっち」と「魔法の世界」を行き来できるようにしたら?って提案したら、死んだふりをしてくれたってわけ。」
なんか、滅茶苦茶なやつばかりだな。魔法が使える奴って。
「そういえば、なんで屋上なんかに呼び出したんですか?」
「あぁ、それは、もう魔法の世界に行かなくちゃいけないからよ。」
「え?じゃあ・・」
「そう。今すぐ、魔法の世界に行くわよ。」
「ちょ・・午後の授業もあるんですよ?」
「いや、でも時間ないからさ。」
なんなんだよ一体。世界を救うとかいう話を承諾してしまった、俺

がわるいけど・・
これは、いくらなんでも突然すぎだろ・・
そんな風に思っている聡一の横では美羽が魔法の世界に行くための魔法を発動させる準備をしている。
「よし、もう行く準備できたから。」
美羽が使った魔法は、ブラックホールのような姿をし、少しずつ吸い込まれていくような感じだ。美羽と柚月は、もうすでに吸い込まれてしまっている。
聡一は抵抗するだけ無駄だと思い、「どうにでもなれ」と自らブラックホールの中へ飛び込む。
吸い込まれた瞬間、不思議な感覚になり気を失ってしまった。

act4　魔法の世界

目が覚めると、古い小屋の中にある小さなベッドの上だった。
「あ、起きた?やっぱり、皆、最初は気絶するんだね。」
聡一は、全く状況がつかめずにいた。
窓の外には見たこともない木や植物が生えているし・・
「なに、驚いた表情してるの?ここが魔法の世界だよ?」
目の前には美羽の姿・・このとき、やっと気がつく。
「魔法の世界に来てしまった」ということに。
「本当に存在したんだ・・」
「え?信じてなかったの?」
「あたりまえです・・それで、魔法の世界って、どこなんですか?」
「おぉ、その質問してくれた人、初めてだよ。」
「答えてくださいよ・・」
「うーん・・正確には、ここは「もうひとつの世界」なんかじゃなくて、地球の科学技術で観測可能な範囲より、遥か遠くにある「惑星リーフ」って言う惑星よ。」
「地球以外に生命のある惑星は無いんじゃ・・」
「だから、言ったでしょ。地球の観測範囲外だって。」
「だからといって、存在するとは思えませんが・・」
「・・まぁ簡単に説明すると、地球みたいに生命が誕生できる、気温・自然環境が整っている惑星があったていうだけよ。」
「じゃあ、ここは・・」
「そう。宇宙のどこかにある惑星って考えてくれればいいわ。あと酸素の濃度が地球より少し濃いから、運動したりするの楽になるかもね。」
「そういえば、なんか体が軽いような気がする・・」
「じゃあ、さっそく聡一君の魔法がなんなのか確認しに行こうか。」
「そんなこと、できるんですか?」

「うん。この小屋の近くに洞窟があって、その中の石碑が、どういう魔法なのか教えてくれるの。」
「わかりました。そういえば高梨は・・」
「あぁ、柚月なら外にいるよ。」
小屋の外に出ると、あたり一面、とてもきれいな自然であふれていた。
しかし、どの植物も見た事ないものだった。
「そういえば、戦争がどうとかって・・」
「そう。この森を抜ければ、私の住んでいた国につくわ。この星では、十年に一回、戦争が行われるの。」
「十年に一回も!?」
「それで、負けると国の領土を奪われていくってわけ。今回の戦争に負けると、私の国は渡せる領土がないから、国自体が他の国のものになってしまうの。」
「でも、戦争が行われているにしては静かじゃないですか?」
「そりゃあね。この星には戦争にもルールがあって、お互いに魔法を使って戦える国民を十人用意して、その人たち・・計二十人で戦って一人でも生き残ったほうの勝ちになるの。」
「もしかして美羽さんの国って戦える人が十人いないとか?」
「ううん。十人はいるんだけど・・弱いのよね・・それで新戦力が欲しくて、私は自分自身を地球に召喚して、聡一君をこっちに連れて来たってわけ。」
「本当に俺なんかで戦力になるんですか?」
「さぁね。ほら、ついたわよ。ここが、さっき言った石碑のある洞窟よ。」
洞窟は、どう見ても、そんな特別な石碑があるようには見えない。
ただ、崖に穴があいている。
そんな感じだ。
美羽は洞窟の中に入って行く。そのあとを追い、聡一も洞窟の中に入る。

act5　合成魔法

洞窟の中は、結構狭い。
湧水が壁を伝うように流れ、足下に少し水が溜まっている。
そして、真ん中に大きな石碑がある。
「さぁ、この石碑の前に立って。」
言われた通り石碑の前に立つ。
「・・・」
しかし、何も起こらない。
「何も起きませ・・」
そう言い振り返ろうとした瞬間、地面が揺れ、石碑が光り始めた。
「うわ・・」
光は、とても明るく、思わず目を閉じてしまった。
光が消えるのを待つ。
眼を開くと石碑には、とても長い文章が書かれている。
「美羽さん・・これ、なんて読むんですか・・」
「あぁ、これが聡一君の魔法の説明よ。
なになに、「この魔法、合成魔法。二つの魔法を合わせ、新たな力を生み出す。すなわち、この魔法、無限の力を持つ。」だって。
私の魔法の説明なんて、「風を操る魔法」だけだったんだよ・・」
「そうなんですか・・それで、このあとは何をすれば・・」
「うーん・・そうだね、じゃあ実際に魔法を使ってみようか。この森なら誰にも迷惑かからないし。」
「わかりました。」
洞窟から出ると、柚月がいた。
「そういえば、高梨の魔法って、なんですか?」
「え?じゃあ実際に受けてみれば?柚月、魔法使ってみて。」
「わかりました」
急に体が重くなる。どんどん体が重くなり、立っているのがやっと

だ。
「ちょ・・どうなってるんですか・・」
「柚月、もういいよ。」
「はい。」
体の重さが元に戻ったようだ。
「これ、どんな魔法なんですか・・」
「ははははは、これはね、重力の大きさと向きを操れる魔法だよ。」
美羽が笑いながら言う。
「じゃあ、君の魔法も見せてください。」
不意に柚月に話しかけられる。
「あぁ、聡一君の魔法は、これから試すつもりだから、ちょっと待ってて。」
「はい。」
「聡一君、ここだったら洞窟があるから、少し離れましょう。」
五分くらい歩くと、あたり一面、木しかない場所に来る。
「ここなら、いいかな。じゃあ、やってみて。」
「でも、二つの魔法が必要なんじゃ・・」
「そうね。じゃあ、私と柚月の魔法で試そうか。」
「いいですよ。」
「柚月は?」
「わかりました。では・・」
また体が重くなる。
「じゃあ、いくわよ。」
さらに美羽の魔法で強風が吹く。
風が聡一に当たった瞬間、重力は元に戻り、風も収まる。
そして、ゴォォォという音とともに、聡一を中心に巨大な竜巻が起こる。
竜巻は五秒ほどでおさまり、まわりの木々はボロボロになっている。
「・・すごい・・・」
「え?今、俺なにもしてないですよ?」

「コントロール無しで、この威力って・・よし、今から、その魔法をコントロールできるように特訓するわよ。」
「全然、自信ないんですけど・・」
「大丈夫。私が教えるから。」

☆　☆　☆

一体、何回、美羽と柚月の魔法を合成したのだろう・・
段々、慣れてきたため、威力を弱めることはできるようになってくるが、強くすることができない。
「怖がってるからダメなのよ。どうやら、合成する魔法の強さは関係ないみたいだから、聡一君次第なのよ?」
「わかりました。もう一回、お願いします。」
何度もやっているように美羽は強風を起こし、柚月は重力を大きくする。

ゴォォォォ!!

合成後の魔法の形は竜巻のままだが、明らかに発生する瞬間の音が違った。
確実に竜巻の大きさは違った。
バキバキバキと、まわりの木々が倒れる音も聞こえる。
今まで五秒程だった竜巻の持続時間は十秒近くまで伸びている。
スゥゥゥ
静かに竜巻はおさまり、まわりの様子を見る。
さっきまでは綺麗な植物でいっぱいだったはずなのに、荒野のようだ。
そして、美羽と柚月の姿が無い。
「美羽さん?高梨?」
「ごめん、ごめん。その威力じゃ、私たちも非難しないと危なかっ

たからさ。」
「すいません・・」
「いいのよ。あと、今のが本気だった?」
「わからないです・・」
「そう・・それにしても、すごい魔法ね。今の竜巻、並みの魔法使いが命かけても出せないと思うよ。」
「そうですか・・」
「じゃあ、次は形状の変化ができるのか、やってみてよ。」
「どうやってやるんですか?」
「多分、威力を上げた時と同じ感覚だと思うけど?」
「わかりました。「威力」じゃなくて「形状」ですね。」
「よし、じゃあ柚月!」
「はい!」
今日だけで、何度この二つの魔法を受けたのだろう・・
形状を変える・・そう思いながら、また魔法を受ける。
今回は竜巻の発生音は聞こえなかった。
スッ
かわりに、こんな音が聞こえる。
その瞬間、竜巻で倒した木々が正面にあるものだけ、真っ二つに斬れた。
「今度は、かまいたち・・」
「なんとか、できましたよ・・」
「聡一君、本当にすごいわね。私の言ったこと、すぐにできるようになってる・・」
「ありがとうございます。次は、何をすればいいですか?」
「あぁ、今日は、もういいわ。」
そう言って、柚月を指差す。
柚月は、ハァハァと息を荒げて、とてもつらそうだ。
「まだ・・大丈夫・・です・・」
「大丈夫じゃないわ。あんまり、魔法使いすぎる、倒れるわよ?」

「・・・」
「さぁ、今日は、もう帰りましょう。」
この星の時間経過も、ほとんど地球と同じらしく、空は少し赤くなっていた。
「あれが、地球で言う太陽ですか。」
「そうよ。本当にこの星は地球と似ているわ。」
そして、小屋に向かう。

act6　組み合わせ

三人は、小屋に戻る。
美羽は夕食を作り、テーブルに並べる。
テーブルの上に並べられている料理は白いスープ・・シチューに似ているような気がする。
「これ、なんの料理ですか？」
「この森に生えている植物で作ったスープよ。栄養もあるし、魔力回復にも役立つの。」
「そうなんですか。」
一口、食べてみると不思議な味がする。
不味いわけではないのだが、今までに食べたことのない味で・・とにかく不思議な味だ。でも、結構、美味しい。
「このスープ、美味しいですね。」
「そう？ありがとう。」
柚月は無言でスープを食べている。
「そういえば、聡一君の魔法について色々、考えてみたんだけど・・」
「なにか、わかりましたか？」
「えーと・・まず、二つの魔法が絶対に必要。そして、新しく発生する魔法の「形状」は変えれるけど、「性質」は、あまり変えれないみたいね。」
「そういえば、竜巻もかまいたちも「風」の魔法でしたもんね。」
「うん。でも柚月の魔法である「重力」の性質が出てないところを考えると・・」
「両方の魔法が新しく生まれる魔法に影響するとは限らない、ということですか？」
「それは、まだわからないわ。まだ「風」と「重力」の組み合わせしか試してないからね。

明日は、別の組み合わせを試してみましょう。」
「わかりました。」
そういえば、柚月は全然、喋ってないな・・
美羽さんに聞いてみようかな。

「起きてますか？」
「なに？」
柚月が眠った後、美羽に話しかける。
「高梨って、俺のこと嫌ってませんか？」
「そんなことないわ。」
「でも・・全然、喋らないし・・」
「あら、もしかして柚月のこと好きになっちゃった？」
「そんなことありません！でも・・」
「大丈夫。心配するようなことじゃないわ。」
「本当ですか？」
「うん。もう寝ましょう？」
「わかりました。」

☆　☆　☆

「さぁ、今日も色々、試したいことあるんだから、もう起きてよ。」
「うぅ・・」
眼を開けると、テーブルには、もう朝食が並んでおり、柚月は椅子に座っている。
「いただきます。」
朝食は、パンとスープだ。
五分ほどで食べ終え、外に出る。
「昨日の様子を見ると、小屋の近くでやったら壊されそうだから、少し離れたところに行こうか。」
「すいません・・」

また、五分ほど歩いたところに来る。昨日とは違う場所だ。
「じゃあ、まずは私の魔法と治癒系の魔法を合成してみましょうか。」
全然、気がつかなかったが美羽の肩に小さな白い鳥が乗っている。
「その鳥は・・」
「あぁ、私のパートナーみたいなものよ。治癒系の魔法を使ってくれるから、怪我しても大丈夫よ。」
「で、今回は、その治癒魔法と風の魔法を合成すると・・」
「うん。じゃあ、さっそくいくよ。」
いつもどおり、強風が起きる。
白い鳥の羽根が緑色に輝き、聡一の体も緑色の光に包まれる。
その瞬間、辺り一面から緑色の光が溢れ出す。
「すごい・・森が喜んでるみたい・・」
「キレイ・・」
柚月が初めて喋ったような気がする・・
いや、初めて会った時に少し喋ってたか・・
「すごいわね。どうやら、治癒魔法の範囲を広げる感じのようね。」
「でも、敵も治癒させちゃうんじゃ・・」
「だいじょうぶよ。たぶんだけど・・」
「なんですか・・それ・・」
「やっぱり、攻撃系の魔法を合成しないとダメみたいね・・
よし、ちょっとついてきて。」

act7　幽崎氷璃

言われた通り、美羽についていくと小さな集落につく。
「ここわね、どの国にも在籍せずに生活をしている人々の集落よ。皆、優れた魔法使いだから、自分たちの身は自分たちで守って生活しているのよ。」
「何で、ここに連れて来たんですか？」
「ここには、姉がいるのよ。」
「そうなんですか・・どんな魔法を使うんですか？」
「氷の魔法よ。氷璃（ひょうり）って言う名前なんだけど、すごい魔法使いでね。まだ、私と一緒に住んでいたころに国で強盗殺人が多発してたの。で、その犯人を見つけ出して、三十人くらいの盗賊団だったんだけど、全員を氷像にしちゃってさ。」
「氷像・・三十人って・・」
「それも、一瞬で。氷璃が本気のなれば、国ひとつは氷づけになるわね。」
「そんなに怖い人なんですか？」
「怖くないわよ。「怒らせたら」やばいけど。」
「怒らせたら・・って」
「大丈夫よ。そう簡単に起こるような人じゃないから。ほら、ついたわよ。ここが氷璃の家。」
「ゴクッ・・」
「そんなに緊張しなくてもいいよ。」
建物自体はテントのようなつくりになっている。
玄関のところにある布をめくり、中に入る。
「氷璃ー、いるー？」
「はーい、ちょっと待ってー」
奥から声が聞こえてくる。
「ごめん、ごめん。ちょっと、洗濯しててさ。お？そっちの男の子

と女の子は？」
「あぁ、聡一と柚月だよ。そういえば柚月も氷璃に会うのは初めてだったね。」
「はい。よろしくお願いします。」
「よろしくね、柚月ちゃん。で、聡一君かぁ・・」
「よろしくお願いします。」
「はははは、なんか、かわいい子だな。」
「え？」
かわいいなどと、言われたのは初めてだ。どう見ても、かわいいというよりは怖いとかだと思うんだけど・・
「それで、なんの用？」
「そうそう、聡一君の魔法の練習に付き合ってほしいの。」
「ふーん・・」
氷璃は聡一をジッっと見つめる。
「どんな魔法を使うの？」
「合成魔法よ。」
「合成？どんなの？」
「二つの魔法を合成して新しい魔法を作り出すっていう魔法。」
「へー、おもしろそうな魔法ね。その練習に私が必要な理由は？」
「まだ、柚月と私の魔法を合成させたことと、治癒魔法と私の魔法を合成させたことしかないのよ。それで、氷璃の魔法も合成させてほしいってこと。」
「いいわよ。そのかわり、美羽は私と勝負ね。」
「・・しょうがないわね。」
「じゃあ、さっそくいこうか。」
なんで、美羽さんと氷璃さんが戦うことになるんだよ・・
「聡一君・・」
「え？」
柚月に初めて話しかけられたため、思わず驚いてしまった。
「な、なに？」

「美羽さんと氷璃さん、どっちが勝つと思う？」
「・・氷璃さんじゃないの？」
「やっぱり、そうよね・・」
この後、聡一と柚月も氷璃の家から出る。

☆　☆　☆

集落の人々も集まり、美羽と氷璃を円形に囲むようなっている。
「美羽と勝負するなんて、本当に久しぶりね。」
「そうね。負けないから。」
「どうかな。」
美羽の頭上に巨大な氷の塊が出現する。
「美羽さん！上！」
「わかってるわよ。」
美羽は身軽な動きでバックステップをし、氷をかわす。
そして、風を起こし、氷を粉々に砕き、その破片を氷璃に向けて飛ばす。
「無駄、無駄ー」
氷璃の前に氷の壁が発生し、氷の破片を弾き返す。
「氷璃、手加減はやめてよ。」
「美羽もね。」
ヒュー・・美羽の表情が変わり、風の動きは美羽を中心に渦を巻くような形になる。
さらに、空気中に光る粒がたくさん浮き、気温が一気に下がる。
光る粒は美羽の体に纏わりつく。
「ウゥッ・・」
風の動きは無くなり、美羽の苦しむ声が聞こえる。
「私の勝ちね。」
気温も元に戻り、空気中の光る粒も無くなる。
「そうでも・・ないわよ・・」

氷璃の着ている服が斬られ、下着が丸見えになっている。
サッ・・
「へぇー、結構、強くなったんじゃん。」
氷璃は胸を隠しながらいう。
「じゃあ・・聡一君の練習に・・付き合ってもらうわよ・・」
「いいけど、着替えさせてね。」
美羽は相当、無理をしていたようだ。
それに対して氷璃は、まったく疲れている様子がない。
「聡一君、君も来てくれる?」
「え?」
「だから、着替えたいから、ついて来てって言ってるの。」
何を言ってるんだ、この人は・・
「わかりました・・」
よく、わからないが、すごい魔法使いなのだから、なにか考えがあるのだろう。
「じゃあ、美羽と柚月ちゃんは、待っててね。」
こうして、もう一度、氷璃の家に向かうことになる。

☆　☆　☆

「じゃあ、着替えてくるから。・・のぞかないでね。」
「そんなこと、しませんよ!」
「ははは、聡一君は、おもしろい人だね。」
なんだよ・・この人・・見た目は超美人なんだけど・・
「終わったわよ。それで、君を呼んだ理由なんだけど・・」
「あまり、からかわないでくだし・・」
「ごめん、ごめん。それでさ、君の魔法について聞きたいんだけど・・」
「すいません・・俺も昨日、こっちの世界に来たばっかりで、なにもわからないんです。」

「じゃあ、このあと、練習のときに確認することにするわ。じゃあ、行きましょうか。」

「はい」

聡一と氷璃は、家から出て美羽と柚月の待っている場所に向かう。

ａｃｔ７　幽崎氷璃（後書き）

やっと、新キャラを出せました。
登場人物、少なすぎますよね（笑）

act8　パートナー

「遅かったわね。早く練習、始めましょうよ。」
「そうね。少し離れたところでやるわよ。この集落に被害が出たら大変だから。」
この集落に来る前に練習をしていた場所に来る。
「じゃあ、早速、氷璃と私の魔法を合成してみて。」
「わかりました。」
「じゃあ、いくわよ。」
強風が起こる。
「私は、何をすればいいの?」
「聡一君に魔法を当てて。・・ちゃんと加減してよ。」
「わかってるわよ。」
気温がどんどん下がっていく。
ゴォォォォ!
二つの魔法が聡一の体に当たると、吹雪が起きる。
美羽と氷璃が魔法を止めたため、すぐに吹雪はおさまったが、まわりの木々が凍りついている。
「・・全然、コントロールできませんでした・・・」
「なんで?私と柚月の魔法でやったときは、できてたじゃん。」
「わかりません・・」
「もしかして・・次は柚月と氷璃の魔法でやってみてよ。」
「え?私ですか?」
「うん。もしかしたら柚月の魔法が聡一君がコントロールできるようにしてるかもしれないって思ってさ。」
「わかりました。」
「氷璃も、いい?」
「うん?あ、はいはい。」
また、気温が下がり、体も重くなる。

パッ！
一瞬、強烈な光が発生し、眼を閉じてしまう。
もう一度、眼を開けると、まわりには光る粒が大量に舞っている。
「キレイ・・」
美羽が呟く。
段々、空気中の光る粒は消えていく。
「今度は、コントロールできましたよ！」
「じゃあ、やっぱり柚月の魔法が影響しているみたいね。」
「はい。」
「・・・」
「どうやら、聡一君と柚月ちゃんの魔法は相性がいいみたいだし、パートナーになれば？」
「パートナーって・・」
「うーん・・一番、相性のいい魔法使いがペアを組むっていうことよ。」
「それは、わかります。でも・・」
「柚月ちゃんじゃ、いやなの？」
「そうじゃなくて・・俺、高梨と話した事ないし・・」
「大丈夫。あくまでも「魔法」の相性がいい二人組だからさ。」
「・・聡一君がよければ、私は・・いいよ・・」
あれ？高梨が顔、赤くしてる・・かわいいし・・
「ほら、柚月ちゃんも、こう言ってることだし。」
「わかりました・・」
「まさか、こんなに速くパートナーが決まるとはね。」
「・・聡一君、よろしくね。」
高梨が手を出している・・握手、したほうがいいのかな・・
「よろしく・・」
静かに柚月の手を握り、握手をする。
柚月は、嬉しそうにしながらも顔を赤くしている。
「パートナーになったら、なにか、いいことがあるんですか？」

「正式なパートナーになるには、教会に行って、儀式みたいなものをしなくちゃいけないんだけど、正式なパートナーになると、お互いの魔力を共有して、さらに強力な魔法を使えるようになるわ。」
「それって、すごいじゃないですか。」
「うん。だから私もパートナー欲しいんだけど、なかなか、いい人がいなくて・・」
「氷璃さんと組めばいいじゃないですか。」
「氷璃には、もうパートナーがいるから、ダメなのよ。」
「氷璃さんのパートナーって、どんな魔法を使うんですか？」
「そうね・・簡単に言うと自然を操る魔法かな。私より遥かに強いわ。」
「え？氷璃さんより、強いって・・」
「彼も、君たちと同じで地球から来た人なのよね。今は地球に帰ってるから、会えないけど、戦争のときは、帰ってくると思うわ。」
「そうですか・・」
「そういえば、柚月ちゃんの魔法のこと全然、聞いてなかったわね。」
「私のは・・重力を操る魔法です・・」
「すごいじゃない。もっと自信、持ったほうがいいよ！」
「でも、私の魔法・・地味ですし・・」
「そんなこと、ないわよ。すごい実用的でいい魔法じゃない。」
「・・・」
「大丈夫よ。そのうち自分の魔法のすばらしさに気づけるわ。」
「そうですか？」
「うん。私も最初は自分の魔法が嫌だったから・・」
「なんでですか？あんなにキレイな魔法なのに・・」
「子どものころから、私の魔力が大きくて自分でも制御できないほどだったの。
それで、まわりの人たちに「寒いから近づかないで」って言われちゃってさ。

今じゃ、自慢の魔法だけどね。」
「なんか、すいません・・」
「いいのよ。もう、お昼だし、うちに来てご飯、食べない？」
「いいんですか？」
「うん。」
「ありがとうございます！」
今日だけで柚月と氷璃は、とても仲良くなったようだ。
そして、昼食を食べるために、もう一度、氷璃の家に向かうことになる。

act9　自信

「おぉ、めちゃくちゃ美味い！」
「そう？ありがとう。」
「・・・」
珍しく美羽が黙ったままだ。
「うーん、こういう味付けが・・」
小声でなにかを言っているようだが、本当に静かだ。
昼食を食べ終えたあとも少し、話をしている。
「聡一君の魔法ってさぁ、単体だったら、なんの役にも立たないよね。」
「・・言われてみれば、相手の魔法だけだったら、なにもできませんね・・」
「そのために、柚月がいるんじゃない。」
美羽が口を開いた。
「・・私は・・なにもできませんよ・・」
「柚月ちゃん、もっと自信を持ったほうがいいよ？
聡一君には、二つ目の魔法を使ってくれる人が必要なように、君には自身を持つことが大事よ。」
「そうだよ。高梨の魔法がないと、俺の魔法なんて制御が効かないんだから。」
「・・ありがとうございます。」
美羽が氷璃のもとへ聡一と柚月をつれてきた理由は、聡一の魔法の性質を確認するためではなく、柚月にも自身をつけてもらうためでもあった。
柚月の魔法は、とてもよいものなのだが、使い方を考えなくては、ただの宝の持ち腐れだ。
だからこそ、自信を持ってもらい、さらにすばらしい魔法に進化させていってほしいと思ったのだ。

「そういえば、聡一君の魔法って単体だったら無力同然だよね。」
「・・気づかれましたか・・でも、信頼できるパートナーができたので大丈夫です。」
信頼できるパートナー・・こんな言葉を使える日が来るとは思わなかった。
しかし、これは紛れもない事実だ。
柚月は顔を赤くして、下を向いている。
「よし、そろそろラグの国に行きますか。氷璃も久しぶりにどう?」
「ラグの国ってなんですか?」
「私と氷璃が生まれ育った国よ。
そして、地球を守るためには、この国を戦争で勝たせなくてはいけない・・
だから、君たちの魔法は戦争のために使わないといけなくなるけど・・」
「覚悟はできています。こっちの世界に来たのは、地球を救うためなんですから。」
「そう・・」
初めは聡一のことを頼りなさそうだと思っていた美羽だが、今の聡一を見ていると、
地球だけではなく、この星も「救って」くれるような気がしていた。
「じゃあ、氷璃も来るよね?本当は氷璃にも戦争で戦ってほしいんだけど・・」
「いいわよ・・和彦(かずひこ)も、やるって言ってたし・・」
「和彦・・って誰ですか?」
「氷璃のパートナーよ。本当は和彦さん一人で戦争に勝てるんだけどね・・」
「そんなに強いんですか?」
「うん。じゃあ、和彦は後で、こっちの世界に来るみたいだし、先にラグの国に行きますか。」
「わかりました。」

「はい。」
「じゃあ、ちょっと待っててね。」
氷璃は食器を台所に持っていき、しっかりと洗う。

「ごめん、ごめん。じゃあ、行きますか。」
聡一、柚月、美羽、氷璃の四人は、ラグの国へ向かう。

act10　入国

森の中を進み続けると、急な下り坂になる。
この下り坂付近は森の中より、植物や木などが少ない。
そして、坂の下を見ると、とても巨大な都市が見える。
真ん中には、かなりの高さがあると思われる塔があり、その下には町が広がっている。
「すごく、大きな国ですね。」
「うーん・・そうかもしれないけど、この星では小さい方なんだよね・・
そもそも星自体の大きさが地球の三倍近くあるしね。」
「三倍・・」
「そうよ。だから国の数も、いくつあるか、私もわからないのよね。」
「そんな数え切れないほどの国と戦争するんですか?」
「そうよ。」
美羽は平然と言う。
ラグの国の入り口につき、そのまま中に入る。
「パスポートとかは必要ないんですか?」
「パスポート?」
「地球では国と国を行ったり来たりするのに必要なんです。」
パスポートの話をしているとき、聡一には、二つの疑問が生まれた。
一つ目は、なぜ、こっちの世界の人が日本語を話しているのかということ。
もうひとつは、パスポート無しで国に入れるのに、なぜ戦争が起きるのかということだ。
「じゃあ、早速、教会に行って正式なパートナーになろうか。」
「俺は、いいですけど・・」
「私もいいよ。」

少し、街中に入ってくると、すぐに教会がある。
「教会があるっていうことは、この世界にも神を信仰する習慣があるんですか？」
「ううん。この世界の人たちが信じるのは、「自分自身」よ。
魔法は自分を信じることによって、さらに強力なものになるって言われてるの。
だから、教会に来る人は、自信を持つためとか、パートナーを決める時は、
「パートナーを信じる」ことを誓うのよ。」
「なんか、不思議ですね。
「神」じゃなくて「自分」を信じる・・か。」
「そうよ。じゃあ、中に入るわよ。」
教会の作りは、地球のものと特に変わらない。
しかし、ひとつの大きな違いがひとつある。
「神を祀っていない」ことだ。さらに、神父もいない。
「あの・・なにをすればいいんですか？」
パートナーになるための儀式みたいなもの・・
美羽からは、それしか聞いていないため、何をすればいいかわからない。
「もっと、奥に行けばわかるわ。」
美羽に言われたとおり、奥に行くと台の上に、とても厚い本が置いてある。
その本は真ん中あたりのページが開いてあり、何も書かれていない。
その横には一本の黒い万年筆が置かれている。
「その本に二人の名前を書いて。
そして、パートナーとなり協力しあうことを誓うのよ。」
言われたとおり、二人の名前をノートに書く。
そうすると、本が光出し、どこからか声が聞こえてくる。
「二人はパートナーとなり、協力し合うことを誓うか。」

「はい。」
「はい。」
聡一と柚月の声が重なる。
光は少しずつおさまる。
もう一度、本を見ると、さっき書いたはずの名前が消えていた。
「これで、パートナーになるための儀式は終わり。」
「あの・・名前が消えたんですけど・・」
「それで、いいのよ。
あの本は、この世界の魔法を司る塔・・マグメントに情報を送るための本なの。
だから、さっき書いた文字は情報としてマグメントに送られたのよ。」
「そうなんですか・・」
あまり意味がわからなかったが、そんなに必要な情報とは思わなかったので、詳しいことを聞かなかった。
「じゃあ、教会の用事も済んだことだし、そろそろ行こうか。」
四人は、教会から出る。

「このあとは、なにをするんですか?」
「そうね、王に会いに行きましょうか。」
「え?」
「別に大丈夫よ。「戦争に協力する」って言えば。」
「・・そういえば戦争って、いつからですか?」
「五日後よ。聡一君は、人を殺したことある?」
「あるわけないじゃないですか・・」
「そう・・それでも戦争に参加するって言うの?」
「はい。地球を救うために来たんですから。」
「じゃあ、地球のために、人を殺せる?」
「・・・」
「まぁ、いいわ。私も敵を殺すつもりは無いから。」

「・・じゃあ、なんで聞いたんですか？」
「さぁ、なんでだろうね。でも、私の思ったとおりの言葉が帰って来たから、いいわ。」
「そうですか。」
「うん。じゃあ、王のところに向かいますか。」
四人は、歩き始め、王の住む塔へ向かう。

act11　和彦と王

ザワザワ・・
「あれって、幽崎氷璃だよな?」
「帰って来たのか・・」
「これで、この国は安心だね。」
四人が道を歩いていると氷璃を見て、まわりが騒がしくなる。
「氷璃さんって、有名人なんですか?」
小声で美羽に聞く。
「そうよ。この国にとっては救世主みたいなものだからね。」
「そうなんですか・・」

「おぉ、氷璃じゃねーか。」
美羽と小声で話していると、横から男の声が聞こえた。
「お?和彦じゃん。もう来てたんだ。」
「おう。そっちの三人は、誰だ?」
「妹と、あとの、二人は、あなたと同じく地球から来た人たちよ。」
「そうか。よろしく。俺は、仙台和彦だ。」
和彦は、とてもいい体つきをしており、すごく喧嘩とかが強そうだ。
顔も少し怖いような気がする。
しかし、喋り方からは、なんとなく優しさを感じる。
「森嶋聡一です。」
「高梨柚月です。よろしくお願いします。」
「氷璃の妹の美羽よ。」
「聡一、氷璃に手出したら許さねーから。」
「は、はい!」
この言葉には、とてつもない殺気を感じた。
「それで、お前らは、なんで地球から、こっちの世界に来たんだ?」
「地球を救うためです。」

聡一は迷うことなく答える。
「ほう・・どうやら本気みたいだな。俺も同じ目的だ。」
「和彦さんも戦争に参加するんですか？」
「そうだ。目的も同じだし、一緒に行動してもいいか？」
「僕は構いませんが・・」
「いいわよ。今から王に会いに行くから。」
「そうか。では行くとするか。」
和彦を加え、五人になった聡一たちは、王のもとへ向かう。

☆　☆　☆

「ここに王が住んでるんですか？」
王が住んでいる塔、それは国に入る前に森から見た一番大きな塔のことだった。
「そうよ。王でも塔の全体を使えるわけじゃないんだけどね。」
「なんで、ですか？」
「そのうち、わかると思うわ。」
「そうですか・・」
「じゃあ、入りますか。」

塔の入り口を入ると、とても広い空間になっている。
奥の方には、階段があり、さらに上に続いている。
「王は、どこにいるんですか？」
美羽は近くにいた兵士のような格好をした男に聞く。
「王に、なにか用か？」
「あぁ、戦争のことで。」
「そうか・・ならば、その階段を上がって、王の間に入れ。王様は、そこにいる。」
「ありがとう。」

言われたとおり階段を上り、王の間に入ろうとする。
「止まれ。」
王の間の扉の前に二人の兵士がいる。
彼らの腰には、魔法の世界のはずなのに剣が携えてある。
「王に用があるのだが。」
「・・しばし待たれよ。」
兵士の一人が王の間に入り、二分程度経つと戻ってくる。
「王様から許可が出た。」
そう言うと二人の兵士は王の間の扉を開け、五人を王の前まで連れていく。

「なんの用だ。」
「戦争に参加したい。」
「なに？」
「私たちは本気だ。」
美羽の話し方は、王に対する態度とは思えないほど強気だ。
「そうか・・ならば、お前ら五人の参加を認めよう。」
「ありがとうございます。」
「お礼を言うのは、こっちだ。他に用はあるか？」
「いいや、もう無い。では。」
美羽は回れ右をして、四人に「ついて来い」という態度で王の間から出る。
そのまま王が住んでいる塔の出口まで行く。

「ふぅ、緊張したー」
どうやら美羽も緊張していたらしい。
「一つ気になったんですが、なんで簡単に僕たちの参加を認めてくれたんですか？」
「前に、この国が戦争に負けてしまう理由、教えたよね？」
「はい。戦える人はいるけど、弱いって・・」

「王の間の前にいた兵士って武器を持っていたよね？」
「そういえば、剣を持っていましたね。」
「あれは、魔法じゃ犯罪者の一人も捕まえられないからよ。
もともと、この国は皆で暮らすためだけの国だったの。
だから国の人たちが使える魔法は生活のための魔法ばっかりなのよ。
それを戦争のときは、無理矢理、攻撃の形にして使うだけだから、
勝てるわけがない。
さらに普段は戦うこともない。だから身を守る方法もわからない、
っていうこと。」
「確か、戦争に参加するのは十人ですよね？
じゃあ、俺たち以外の五人はどうなるんですか？」
「国民や兵士の中でも戦える人を使うんじゃない？」
「そうですか・・」
「ねぇ、いつまでも喋ってないで進もうよ。」
氷璃が言う。
柚月と和彦も「早くしろ」というような顔で見ている気がする。
「わかったわよ・・」
五人は歩き始める。

「これから、どこ行くの？」
「美羽の家だよ。」
「なんで、うちなのよ・・」
「この国に住んでるの、あんただけでしょ？」
「しょうがないわね・・」
「美羽さんって森の中の小屋に住んでるんじゃないんですか？」
「あの小屋は、魔法の練習をするときに泊る小屋よ。」
「なぁ、氷璃　こいつらの使う魔法ってなんなんだ？」
和彦が口を開く。
「美羽の家についたら説明するわ。あと、戦争のときの戦い方もね。
」

「そうか・・」

五人は、話しながら美羽の家へ向かう。

act12　戦争のルール

美羽の家は、日本のどこにでもあるような一軒家で、結構、綺麗な家だ。
「じゃあ、まずは戦争のルールについて説明するわ。」
戦うことに関しては、氷璃が一番詳しい。
過去に戦争に参加した経験もある。
「まず戦争についてのルールだけど、覚悟してね。
もしかしたら、腹が立つかもしれないから。」
「大丈夫です。」
「私も・・覚悟はできてます。」
「速く、教えてくれよ。」
「まず、この星で戦争が行われている理由だけど、領土の奪い合いなの。
十年に一度、戦争が行われるわ。私も十年前に参加したんだけどね。
それで、この戦争は、この星のルールみたいなものだから、どんなに仲の良い国どうしでも戦争をしなくてはいけないの。
ここまではいい？」
「はい」
「はい・・」
「おう」
「次は戦争のルールよ。
お互いに十人の魔法使い、もしくは戦える人を出すの。
その人たちは、戦争の会場・・わかりやすく言うとスポーツのコートみたいなところにつれていかれるわ。
そのコート内で、集められた人は戦う。
勝つための条件は、相手を全員、殺すか戦闘不能にすること。
降参は認められていないわ。」
「なんですか、そのルール！ゲームみたいじゃないですか！」

「そうよ。私もルールを聞いただけで腹が立ったわ。
でも、今回は本気で勝たないといけない。そうでしょ？」
「はい・・」
「じゃあ、次は戦い方を考えるわ。最初に何か聞きたいことはある？」
「三人の魔法を教えてくれ。」
「あ、そっか和彦は私の魔法しか知らないんだもんね。
うーん・・一人ずつ自分の魔法を説明してもらおうかな。」
「じゃあ、私から。
私の魔法は風を操る魔法よ。遠距離攻撃が得意かな。」
「次は俺が・・合成魔法です。二つの魔法を合わせて新しい一つの魔法を作り出す魔法です。」
「なんだよ、それ・・すごいじゃねぇか。」
「ありがとうございます。」
「えっ・・えと、私は重力を操れます。」
「なんで、お前らは、そんなすごい魔法を使えんだよ・・
俺なんて、植物だぜ？」
「でも、あんたの魔法、応用の幅が広すぎて恐ろしいのよね・・
これで、皆の魔法がわかったことだし、戦い方を説明するわ。
まず、和彦は私たち以外の五人を守ること。いい？」
「戦わなくていいのか？」
「うん。あんたが本気出したら国が崩壊するからね。
いい？守るだけよ。攻めちゃダメだから。」
「わかったよ・・」
「柚月ちゃんは私たちの補助を頼んでいい？」
「ど・・どんなふうにですか？」
「相手にかかる重力を大きくしてくれればいいわ。」
「わ、わかりました。」
「私と美羽は攻めるから。」
「あのー、俺は何をすれば？」

「君は攻めの要だから。よーく聞いてね。」
「はい。」
「柚月ちゃんの魔法が届く範囲の最前線で戦ってもらうわ。
相手の使った魔法は、できる限り合成すること。
いいわね？」
「わかりました。」
「まぁ、余裕で勝てると思うけどね。
もし危なくなったら、和彦も攻めに力を入れてもらうから。」
戦争のための作戦は完成した。
戦争までは、あと五日ある。
十分に戦い方を練習する時間があるというわけだ。
そして、五人は戦争が終わるまで美羽の家に滞在することにした。

act13　吸収と合成

「とりあえず、実戦で試してみますか。」
氷璃の提案で、もう一度、森の中で特訓をすることになった。
王に戦争への参加を言った次の日だ。
戦争まで、あと四日。
五人は森の中で、なるべく木の少ないところに行く。

「じゃあ、始めますか。
とりあえず、聡一君と和彦が戦ってみて。
そうそう、聡一君は柚月ちゃんがいないと戦えないから、柚月ちゃんは合成をさせるだけね。じゃあ、始めて。」

「聡一、俺に勝つ自信あるか？」
「ありませんよ・・」
「そうか。俺は手加減するつもり無いからな。
お前も全力で来いよ。」
「わかってます」

サッ！

和彦は聡一の懐に飛び込み、一発強烈な打撃を繰り出す。
「ゴホッ・・ゴホッ・・」
その打撃は聡一の腹部に直撃し、膝をついてせき込んでしまう。
「ストーップ！」
「え？」
「和彦、喧嘩の練習じゃないんだから魔法、使ってよ。」
「すまん、すまん。地球にいるときは魔法を使わないようにしてるせいでさ、普通に殴りかかっちまったよ。」

「聡一君、大丈夫？」
「は・・はい。」
「じゃあ、もう一回。今度は魔法、使ってよ。」
「はいよ。」

サッ！

和彦は、さっきと同じように懐に潜り込んでくる。
しかし、雰囲気がまったく違う。
「！！」
和彦は、あと少しの所で腕を止め後ろに下がる。
「なんだよ・・その魔法・・俺の魔力が吸い取られるような感じがしたぞ。」
「え？でも、まだ合成はしてませんよ。」
「なるほどね。」
「なにか、わかったんですか？」
「聡一君に、私が攻撃魔法を使った時のこと覚えてる？」
「前に、魔法の特訓をしていたときですか？」
「そうよ。あのとき使った魔法って当たれば結構、ダメージを与えられるんだけど、
聡一君は全然大丈夫そうだったよね？」
「はい。気づいたら合成が始まっていて・・」
「それでも、合成する前にダメージがあるはず。
それで私が思ったことなんだけど、魔法を合成する前に魔法を聡一君が「吸収」してるんじゃないのかなって。」
「吸収・・ですか・・」
「そうよ。もし、これが本当だとしたら聡一君は魔法が相手だったら無敵ってことだよね？」
「そう・・なるんですか？」
「多分ね。じゃあ、試してみましょうか。」

「なにをすればいいですか？」
「柚月ちゃん、聡一君に魔法を使ってみて。」
「は・・はい」
柚月が魔法を使うと聡一は体が重くなるのを感じる。
「柚月ちゃん、もっと強く。」
「わかりました。」
重力が大きくなるのを感じる。
しかし、柚月は魔法を強め続けているはずなのに重力は段々、元に戻る。
「あ・・あれ？」
「どうしたの？」
「魔法が・・使えなくなりました・・」
「大丈夫よ。聡一君に全部、吸収されただけだから。
聡一君、なんか感じない？」
「なんていうか・・不思議な感じです。」
「今から私が魔法を使うから、吸収した魔法と合成してみて。」
「やってみます。」
氷璃が魔法を使うとき、まわりの気温が少し下がる。
そして、氷の粒が浮き上がり、聡一に向かって飛んでいく。
氷の粒は聡一まで、あと三十センチほどのところで、渦を巻きながら消えていく。
氷の粒は消えたあと聡一のまわりに、もう一度出現する。
「今、出ている氷は操れます。」
「そう。じゃあ、一回ストップ。」
氷の粒は全て消える。
「次は、二つの魔法を吸収したままの状態を保てるか試してみて。
今のは、私の魔法を吸収したあと、すぐに合成したでしょ？」
「はい。」
「柚月ちゃん、一つ目の魔法よろしくね。」
「はい。」

さっきと穴時ように柚月は少しずつ魔法を強くしていく。
「もういいですか？」
「いいわよ。次は私の魔法よ。すぐに合成しないで一回、吸収したままの状態を保ってね。」
氷璃も、さっきと同じように冷気を発生させながら、氷の粒を作り出す。
聡一に向かって飛ぶ氷は、渦を巻くように消えていく。
そのあと、聡一のまわりに氷は発生しなかった。
「どう？」
「わかりません・・でも、これでいいんですよね？」
「うん。次は吸収した二つの魔法を合成してみて。」
「やってみます。」
聡一が合成を始めようとすると、氷璃が魔法を使うときと同じように冷気が発生する。
そのあとに発生する氷の粒も氷璃のものと似ている。
「なんか、目の前で自分と同じ魔法を使われると不思議な気分になるわね。」
「このあとは、どうすればいいですか？」
「そうね・・私に向けて氷を飛ばして。」
「・・わかりました。」
氷璃が言うのだから、なにか考えがあると思い、氷の粒を飛ばす。
氷璃は身を守るための氷の盾を作り出す。
聡一が飛ばした氷の粒は、氷の盾に連続して当たる。
最後の一粒が当たったとき、氷の盾が粉々に割れた。
「すごいじゃない。私が使ったときの氷の粒だったら、この盾に傷すらつけられないのよ。」
「多分、高梨の魔法と合成したからだと思います。」
「そうね。二つの魔法の魔力が合成されて、さらに柚月ちゃんの魔法のおかげで
氷の硬さや形を変えることも可能だからね。」

「はい。そういえば美羽さんと和彦さんは？」
「むこうで戦っているわ。聡一君と柚月ちゃんに魔法の使いかたを教えるのは私で
美羽と和彦は、実戦をして新しいことを見つけてるのよ。」
「そうなんですか・・」
「もしかして、気になる？」
「はい。」
「見に行こうか？」
「いいんですか？」
「うん。柚月ちゃんも、それでいい？」
「はい。」

act14　柚月の魔法

美羽と和彦が戦っているところに近づくにつれて、強風が吹き荒れ、地面が少し揺れている。
「な・・なんですか・・この風と揺れは・・」
「美羽も和彦も派手にやってるわね。」
「なんで落ち着いていられるんですか・・」
「見てみ。」
氷璃が指さす方向を見ると美羽と和彦が派手に戦っている。
しかし、二人の表情は、とても楽しそうだ。
「多分、聡一君じゃ、あの二人の本気の魔法は吸収できないと思うわ。」
そのとき、戦いに動きがある。
和彦は聡一の懐に潜り込んだときと同じように、美羽の懐に潜り込む。
攻撃が当たるとかと思った瞬間、美羽の体が消えている。
そして、背後に回り込んだ美羽は和彦の頭をめがけて蹴りを繰り出す。
和彦はそれも、わかっていたかのように左腕を上げ、蹴りから身を守る。
「なんで二人とも魔法を使わないんですか?」
「使ってるわよ。美羽は移動のために、和彦は防御のためにね。」
「・・攻撃には使わないのは、なんでですか?」
「移動と防御のためにしか使ってないのに、これだけの強風と揺れが起きてるのよ?
二人が本気で戦ったら森はぐちゃぐちゃになるし、お互いに命の危険もあるからよ。」
「・・・」
思わず言葉を失う。柚月も驚いているような表情をしている。

急に、さっきまでの強風と揺れがおさまる。
「皆、来てたんだ。」
戦いを中止して、美羽が聡一たちの方を見る。
「うん。二人とも、なにか新しいこと見つけた?」
「和彦さんは、魔法、使わない方が強いっていうことかな。そっちは?」
「聡一君の魔法に大きな進展があったわ。それより、和彦が魔法、使わない方が強いっていうのは、どういうこと?」
「さぁね。とにかく魔法を使うと隙だらけになるのよ。だから、魔法を使うのは防御のときだけが一番いいと思うの。」
「そう・・和彦は自分で、どう思う?」
「・・美羽の言うとおりだよ。」
「じゃあ、色々な防御の形を考えてみたら?相手によって使う魔法は違う訳だし。」
「わかった。美羽、もう一回、付き合ってくれよ。」
「はいはい。」
「あの二人、ずいぶん仲良くなったみたいね。」
「そうですね。」
「次は柚月ちゃんの魔法を鍛えましょうか。いい?」
「は、はい。」
「俺は、なにをすればいいですか?」
「これから考えるわ。」
さっきまで合成魔術の特訓をしていたところに聡一、柚月、氷璃の三人で向かう。

☆　☆　☆

「柚月ちゃんにやってもらいたいことは、重力を地面に向かって強くするんじゃなくて別の方向にも使えるようになってほしいの。」
「あの・・もう、できます・・」

「え？本当に？
じゃあ、どのくらいの強さの重力なら発生させれるかやってみて。」
「何に重力をかければいいですか？」
「そこにある岩でいいわよ。
手加減しないで本気でやってね。」
柚月は指定された岩に近づく。
岩の大きさは、柚月の膝くらいまであり、丸い形をしている。
柚月が魔法を使い始めると、岩は
ズズズズッ！と音をたてながら、地面にめり込んでいく。
「す・・すごいわね・・」
「そ・・そんなことありません・・」
「本当にすごいわよ！見方に、こんなすごい魔法使いがいるなんて、
すごく心強いわ。」
「でも、重力ですよ・・」
「重力だからいいのよ。相手の動きを制限できるし、
味方にかかる重力を小さくすれば、味方は動きやすくなるし。
すばらしい魔法だと思わない？」
「そうですか？ありがとうございます！」
柚月は、すごく明るい表情になる。

それぞれ新しいものを見つけ出そうと特訓を続ける。
そして、日が暮れると美羽の家に行き、休息をとる。
こうしている間に戦争に刻一刻と近づいていく。

act15　開戦前夜

戦争の前夜、聡一は眠れずにいた。
氷璃や美羽、和彦がすごい魔法使いだということは身をもって体験しているわけだし
心配は、なにもないはずなのだが、柚月のことが心配だった。
ずっと無口で、どんな人なのかも、あまりわかっていない。
「今から、柚月のところに行こうか・・」
そうも思ったが、もう遅いので、やめることにした。
そのとき、聡一の寝ている部屋のドアをノックする音が聞こえた。
「はい。」
「こんな時間にすいません・・でも、どうしても聡一君と話したくて・・」
この声は柚月の声だ。つまり部屋に来たのは柚月ということだ。
「・・どうぞ」
ちょうど柚月のところに行こうと思っていたときに柚月が来る。
こんなに良いタイミングなのは偶然なのだろうか。

「夜、遅くにごめんなさい。でも聡一君と話しておきたくて・・」
「いいよ。俺も高梨のところに行こうと思ってたし。」
「そうなんですか。あと・・柚月って呼んでくれませんか?」
「うん。じゃあ柚月も敬語、使うのやめて。」
柚月はコクッっと小さく頷く。
部屋は暗いため、顔は、よく見えないが少し照れていることはわかる。
「あの・・聡一君は戦争のこと、どう思う?」
「・・くだらないと思う。多分、この戦争を始めた人たちは遊びだと思ってるんだろうね。」
「そうですよね。ルールも、なんかゲームみたい・・」

「そんな、ふざけたゲームだとしても真剣に参加しなくちゃいけない。
地球を守るためだからな。」
自分では、気づいていないが聡一は思わず熱くなっていた。
「聡一君は、すごくいい人ですね・・私なんて・・」
「そんなふうに言っちゃダメだと思うよ。」
「え？」
「氷璃さんにも言われたとおり、もっと自信を持たなくちゃ。
俺は柚月が、魔法使いとしても人としてもいい人と思ってるから。」
「そ・・そんな・・」
聡一は、やっと自分がとても恥ずかしい台詞を平然と言っていたことに気づく。
顔が焼けるほど恥ずかしい。
「ごめん・・俺、なんか変なこと言っちゃったな・・」
「そんなことないですよ。ありがとうございます。」
柚月は、他のなにものもない純粋な笑顔を聡一にむける。
「よし、じゃあ明日の戦争、がんばろうか。」
「はい。がんばりましょう！」
「もう寝なくちゃな。柚月も部屋に戻ったら？」
「はい。明日、パートナーとして、よろしくお願いします！」
柚月は手を出している。
聡一は、その綺麗な手を握り、握手をする。
三秒くらい、その状態のままだ。
そのあと、柚月は笑顔のまま部屋に戻っていく。

ａｃｔ１６　開戦当日

まったく眠れないまま朝が来る。
外は、もう明るい。
部屋から出て、リビングに向かう。

「おはよう、聡一君。早いわね。」
リビングには、もう氷璃がいた。
「おはようございます・・」
「ちゃんと眠れた?」
「全然、寝れませんでしたよ・・」
「大丈夫?じゃあ、朝ごはん作るから、ちょっと待ってて。」
「なにか手伝いますか?」
「いいわよ。ゆっくりしてて。」
どうせ手伝ったところでなにもできないのは、わかっている。
だから、素直に言葉に甘えることにした。

氷璃が朝食を作り終わるのを待っていると柚月が起きてくる。
「おはよう。」
「おはよう。」
昨日のおかげで柚月と話しやすくなっている。
柚月は氷璃のいるキッチンに行く。
何を話しているのかはわからないが楽しそうだ。
会話が終わると柚月がリビングに戻ってきて、聡一の正面に座る。
そして、すぐに美羽が起きてくる。
「おはようございます。」
「おはようございます。」
「おはよう。二人とも早いわね。」
「お待たせ。」

ちょうど朝食も完成したようだ。
氷璃は、次々と料理を並べる。
「そういえば、和彦がまだおきてないわね。」
「俺、行ってきますか？」
「私が行くわ。」
氷璃は階段を上がっていき和彦が寝ている部屋に行く。

「そうそう、今日の日程だけど九時開戦だから。」
「九時って・・」
時計を見ると七時を指している。
「あと二時間しかないですか！」
「大丈夫よ。会場、結構近いから。」
「そうじゃなくてですね・・」
そのとき階段を下りてくる音が聞こえる。
氷璃と和彦が二階から下りてくる。
そして、テーブルの前に置いてある椅子に座る。
「皆そろったし、食べましょうか。」
「いただきます。」
聡一は少し急ぎながら朝食を食べる。
「そんなに慌てなくても大丈夫よ。ちゃんと間に会うから。」
「そうですか？」
食べる速度を落とし、ゆっくり料理を口に運ぶ。
氷璃の作る料理は、いつ食べてもおいしい。

「そういえば、敵国の名前ってなんですか？」
「そういえば言ってなかったわね。
アカルよ。アカルの国。」
「アカル・・ですか・・」
当然、聞いた事などない。
「アカル」これがこれから戦争をしなくてはいけない国の名前・・

「皆、食べ終わったみたいだし、片づけるわよ。」
「ごちそうさま。」
「ごちそうさまでした。」
手を合わせながら言う。
時計の針は七時四十五分を指している。
「八時になったら出発するから準備しておいてね。」
食器を片づけながら氷璃が言う。
「あと十五分しかないですか・・
もっと早く行ってくださいよ・・」
「ごめん、ごめん。」

聡一は準備を始める。
準備とはいっても、ほとんどすることはなかった。
結局、五分程度だけ昨日の夜寝た部屋を見るだけだった。
まず、こっちの世界に何も持ってきていないのだから準備なんてもともと必要なかった、ということだ。

「準備できた？」
玄関に美羽と氷璃が立っている。
和彦も玄関に行く。
聡一が部屋から出ると、ちょうど柚月も玄関に向かうところだった。
二人は一緒に玄関に向かう。

「じゃあ、出発するけどいい？」
美羽が確認をして家に鍵をかける。
そして、氷璃が案内する形で五人は戦争が行われる会場に向かう。

act17　開戦

「ここから、戦争の会場に向かうわよ。」
「ここって・・」
着いた場所は王の住んでいる巨大な塔だ。
戦争に参加することを言うとき、来たことがあったので覚えている。
そのまま建物の中に入り、王の間へ向かう。

「戦争に参加するために来た。王に会わせてくれないか。」
こういうときに話すのは、やはり美羽だ。
そして、前と同じように、かなり強気な話し方だ。
「おぉ、来てくれたか。では、案内するぞ。」
王の間には、もうすでに聡一たち以外の戦争に参加すると思われる五人がいた。
「俺たち以外に戦争に参加する五人って、あの人たちですか?」
小声で氷璃に聞く。
「多分そうね。」
王が戦争の会場に案内するために歩きだす。
そのあとを聡一たちがついていく。
先にいた五人は聡一たちの後ろを歩いている。

ひとつの建物の中だというのに、ありえないほどの距離を歩かされる。
もう、十分くらいは歩いているだろうか。
「ここから戦場に向かってもらう。」
大きな扉の前で王が言う。
その扉を兵士が開けると、目の前には森が広がっている。
しかし、聡一の知っている森とは少し違う。

道は石造りになっているし、横には石の柱が等間隔で立っている。
王は道に従って進み始める。
道は、ずっと一直線に続いている。
五分くらい歩くと、正面に大きなドーム状の建物が見えてくる。
「あの建物が今回の戦場だ。」
王は歩きながら、冷静に言う。
しかし、その奥には不安があるということが丸わかりだ。

ドーム状の建物の前につく。
この建物の入り口も、巨大な扉だ。
王が扉を開け中に入ると、目の前に高さ三メートルはあると思われる壁がある。
今度は、その壁にそって歩き始める。
そうすると、すぐに壁に扉がある。
扉の大きさは普通のものだ。
「この中で戦争が行われる。
覚悟はいいか？」
王は扉に手をかける。
聡一は口に溜まった唾液をのみ込む。
王が一気に扉を開けると、中の様子がすぐにわかった。
どうやら中の作りは、闘技場のようになっている。
障害物や隠れられるような場所は、いっさい無く直接、戦うことになりそうだ。
敵国の魔法使いは、まだ到着していなかったため、中に人の姿は無かった。

☆　☆　☆

聡一たちは戦場で敵国の魔法使いの到着を待つ。
しばらく待っていると聡一たちが入って来た扉の正面にある

同じつくりの扉が開き、人が入ってくる。
敵国の魔法使いらしい。人数も、ちょうど十人だ。
戦場の空気が一気に重くなったような気がする。

両国の魔法使い、計二十人が戦場の中心に集まる。
そして二人の王が戦争の開始を宣言する。
その後、二人の王は戦場から出ていき、
少し高い位置にあるガラス張りになっている部屋に行く。
その部屋からは戦場全体の様子が、すべてわかる。

そして戦場いっぱいに大きな鐘の音が響く。
これが開戦の合図のようだ。
戦争について、あまり詳しく知らない
聡一、柚月、美羽、和彦は少し戸惑う。
一度、戦争に参加した経験のある氷璃は落ち着いた表情をしている。
相手も様子を窺っているのかなかなか動き出さない。
そのまま五分くらいの時間が経ったとき
敵の一人がものすごい速度で柚月に襲いかかった。
「キャッ！」
柚月が悲鳴をあげるが、ギリギリのところで氷璃が攻撃を止めている。
柚月に襲いかかった敵は剣を持っている。
前に氷璃が言っていたように魔法使いが剣を使うのは珍しいことだ。
柚月に皆が注目している間に敵が散開してしまった。
「なにしてんのよ！集中して！」
氷璃の一言で皆、まわりを見る。
見事に敵に囲まれている。
囲まれていることに気づけたのはいいのだが
どのように対応していいのかわからない。
少しずつ敵が迫ってくる。

ある程度近づいたところで聡一の目の前にいた敵が魔法を使う。
その敵の魔法は炎を発生させるだけの単純な魔法だった。
聡一は、その魔法を全て吸収する。
「な、なんだよ・・こいつ・・」
敵は驚きを隠せず、少し怯む。
その隙を逃さず、さっきの炎をあらかじめ吸収しておいた柚月の魔法と合成する。
巨大な火の玉が聡一の目の前に発生し、敵に向かって進んで行く。
そのまま敵に当たり、敵の体は炎に包まれる。
「あ・・熱い・・助けてくれ・・」
その敵は近くにいた、もう一人の敵に近づく。
近づかれた敵は無言のまま水の魔法を使い火を消す。
「くそ・・あいつの魔法は、なんなんだよ・・」
どうやら火傷は、そこまで重度のものではないようだ。

ドゴンッ!!

聡一は背後から聞こえた、ものすごい音に驚き振り向く。
そこには、敵の一人が倒れており、その横で和彦と別の敵が殴り合っている。
美羽は柚月の援護を受けながら、攻撃を繰り返している。
氷璃は、もうすでに二人の敵を氷づけにして戦闘不能にしている。
皆の強さに驚く。
柚月も戦っているのだからやるしかない。
もう一度、前をむくと五人の敵が聡一の前に来ている。
五人は同時に魔法を発動させる。
五つの魔法が混ざり、どんな種類の魔法なのかすらわからない。
しかし、その魔法は聡一の合成魔法とは違い一つの魔法になっているわけではなかった。
その魔法が聡一に当たりそうになるが、聡一は全て吸収する。

こんなに、たくさんの魔法を一度に吸収したのは初めてだ。
そのせいか、無意識のうちに合成が始まってしまう。
聡一の前に巨大な白い光の玉ができる。
その白い光の玉は前にいる五人の敵に向かって飛んでいく。
敵に当たった瞬間、光の玉は爆発するかのように、さらに強力な光を放ち消えてしまう。
聡一が目を開けると五人の敵が倒れている。
「すごいじゃない。」
後ろから氷璃の声が聞こえてくる。
自分でやったにも関わらず驚きのあまり言葉が出ない。
「俺と美羽が一人、氷璃が二人、聡一が五人か。
残る敵は一人だけだな。」
和彦が言う。
そして、全員で最後の一人を探すが見つからない。
障害物や隠れる場所など一切ない。
この戦場で見つからないなんてことは、ありえないはずだ。
「くそ・・どこにいるんだよ!」
和彦が大声を出した瞬間、和彦の左肩から血が噴き出す。
「ここだよ」
低く暗い声の刀を持った男が和彦の横に立っている。
「なん・・でだ・・全然、見えなかったぞ・・」
和彦が左肩をおさえながら言う。
「どうやら、一番やっかいな敵みたいね。
皆、油断するんじゃないわよ。」
氷璃の一言で皆、一人の敵に集中する。
しかし、また敵の姿は無かった。

act18　終戦

見えない敵と戦う、これは聡一たちの全員が初めてだ。
そんななか、美羽だけが冷静に考え、まわりの空気の流れを変えている。
「なに、やってるんですか？」
「静かに！集中させて。」
美羽は目を閉じ、なにかに集中しているようだ。
そして、少し時間が経ったとき目を開け、魔法を発動させる。
鋭いかまいたちのような風を正面に放つ。

カンッ！

金属と金属がぶつかり合うような音がする。
「へー、風の動きの音で見えない俺の場所を把握したってわけね。」
敵がもう一度、姿をあらわす。
刀で美羽のかまいたちを弾き返したようだ。
「どうやら、あいつの魔法は透明になる魔法らしいわね。」
氷璃が言うが聡一は、それがわかった時点で対処法がないので意味がないと思った。
「こいつの相手は私がするわ。」
美羽の表情は、とても怖い。
さっき、空気の動きで相手の位置がわかった。
だから美羽がこの敵の相手に最も適している。

美羽が一歩前に出る。
「美羽！無理すんじゃないわよ！」
氷璃が声を大きくして言う。
美羽は、それに対して大きく頷く。

☆　☆　☆

目を閉じ、もう一度集中する。
敵の動く向き、攻撃をしてくる位置、すべてを空気の動き方から感じる。

――右から左方向に向かっての刀の動き・・

その動きに合わせて風の壁を作る。
キイイイィィ・・と金属同士が擦れるような音がする。

――腰の刀をもう一本抜く・・
さらに二本の刀を持ち近づいてくる・・
早さは・・並み程度・・

攻撃に備え一応、風の壁を作る。

カンッ！カンッ！カンッ！

何度も斬りつけてくるが全て風の動きを変え、弾き返す。
何発か弾き返した後、美羽は右手を横に振る。
その瞬間、刀が回転しながら飛んで行くのが見える。
「残り一本ね。」

――敵が後ろに下がった・・
今度は何を狙っているんだ・・

――なんで・・動きが無い・・

「美羽、目を開けて。」
敵は、また姿を現している。
美羽も集中をやめ、風の動きも元に戻る。
「ハァ、ハァ・・」
美羽の呼吸から相当、疲れているということがわかる。
「柚月ちゃん、魔法！」
「え？」
「あいつにかかる重力を大きくするのよ！」
「はい！」
氷璃の指示どおり柚月が重力を大きくする。
「これで、動きが遅くなったわ。透明になっても無駄よ。」
「くそ・・」
それでも敵は透明になる。
「無駄って言ってるでしょ！」
氷璃は氷の粒を敵のいた場所に放つ。
しかし、氷の軌道は変わらず、まっすぐに飛び続ける。
「当たってない！？」
驚くことに敵は柚月の重力から抜け出したらしい。
「君が一番、やっかいらしいね。」
柚月の背後から声が聞こえる。
皆、柚月のほうを向くと刀を振り下ろそうとする敵の姿。
その瞬間、敵と柚月の間に茶色い壁ができる。
敵が刀を振り下ろすと、すぐに真っ二つに切れてしまったが柚月を守った。
「こんなふうに魔法、使ったの初めてだな。」
和彦が言う。
そして、和彦は敵の懐に潜り込み強烈な打撃を一発。
「ゴホ、ゴホ・・」
敵は咳をしながら、その場に膝を地面につけるような体勢になっている。

聡一は、その隙を逃さず、あらかじめ吸収していた
氷璃の魔法と柚月の魔法を合成し、氷の粒を放つ。
敵は氷の粒を刀で弾こうとするが全て弾くことはできなかった。
氷の粒は左肩にあたり、その部分が凍りつく。
「聡一君、いい判断だね。」
氷璃が笑顔で言う。
「さぁ、もう終わりにしましょうか。」
氷璃が魔法を発動させる。
敵の体は、ゆっくりと凍りついていき全身が氷に包まれる。
「終わった・・んですね」
柚月が悲しそうな表情をしながら言う。
「そうよ。終わったの。私たちの勝ちよ。」

二人の王が戦場の中に入ってくる。
「これで終戦だ。国に戻るぞ。」
ラグの国の王が言い、聡一たちを国につれて帰ろうとする。
「待ってください。」
氷璃は氷づけにした三人のところむかい、氷を溶かす。
しかし、中にいた敵は気絶したままだ。
「いいわ。行きましょう。」
ラグの国のメンバーは国に戻る。
アカルの国の王は戦闘不能になった十人の魔法使いを一か所に集め、
治癒魔法を使える魔法使いをつれきて、治療を始める。

戦争は、とても少ない時間で終戦を迎えた・・

ａｃｔ１８　終戦（後書き）

アカルの国のやつら弱くしすぎましたね（笑）
出てくる敵が最初から強いというのがあまり好きではないので
こういう結果になってしまいました。

次回もよろしくお願いします。

act19　お祭り

ラグの国につくと、すぐに王の間へつれていかれる。
「みなさん、本当にありがとう。
これで、我が国は救われた。今夜は祭りがおこなわれる。
勝利を国民全員で祝おうじゃないか。」
王の言葉を貰い、聡一たちは王の住む塔から出る。
国の中の様子は、とても賑やかだ。
戦争前は少し暗い雰囲気だったのに、皆、明るい表情をしている。
「皆さん、本当にありがとうございました！」
「英雄の帰還だ！」
など国の人々は聡一たちを褒めたたえている。
そんな中を歩きながら、五人は美羽の家へと向かう。

☆　☆　☆

「皆、お疲れ様。」
氷璃が笑顔で言う。
「あのー、意外と楽々勝てたような気がするんですけど・・」
「そりゃあね。アカルの国なんかに負けるようだったら話しにならないわ。」
「え・・もしかして・・」
「そうよ。二週間後に、また戦争があるわ。」
「・・どういうことですか？」
「まぁ、この星にある国のほとんどが戦争に参加してるから仕方のないことよ。
負けたら、もう戦争に参加しなくていいんだけどね。
次は、もっと強い国と戦争することになると思うから。」
「またですか・・」

「うん。戦いの形式は変わるけどね。」
「もう、戦争の話しはやめて、お祭りに行きましょうよ。」
美羽が提案し、皆でお祭りに行くことにする。

家から一歩出ただけで、とても賑やかだ。
王の住んでいる塔の前にある広場には、なにやら不思議な石碑が置かれている。
「あれ、前からありましたか?」
「うん?あぁ、あれは今回の戦争の詳細が書かれている石碑よ。」
「へぇー、すごいですね。」
「そうね。そういえば聡一君と柚月ちゃんはそうするの?」
「どうするって、なにをですか?」
「戦争も終わったし地球に帰るんでしょ?」
「俺は、そうするつもりです。」
「柚月ちゃんは?」
「私も、帰りたいんですが・・
地球で私は死んだっていうことになってるし・・」
「聡一君の家にかくまってもらったら?」
「な、なんでうちなんですか!」
「パートナーだからいいんじゃない?」
「よくないですよ!」
「聡一君は嫌なの?」
柚月が顔を真っ赤にしながら聞いてくる。
「い、いやでは・・ないけど・・」
「じゃ、じゃあ・・」
「わ、わかったよ・・」
「はい、決定。
柚月ちゃんは地球にいるとき聡一君の家に住むっていうことで。」
「・・・」
「・・・」

聡一と柚月は顔を赤くしたまま黙っている。
「さぁ、お祭りを楽しみましょう。」
気がついたら美羽と和彦がいなかった。
よく見ると少し離れたところで、
なにやら飲み物を飲みながら国の人たちと楽しそうに話している。
「ほら、聡一君も柚月ちゃんも戦争で活躍したんだから。」
氷璃に背中を押され、美羽と和彦のいるところにつれていかれる。

たくさんの人、たくさんの食べ物や飲み物を飲み食いし、お祭りを楽しむ。
これほど大きなお祭りをするということは、
戦争に勝ったということが相当、重要なことだったのだろう。

聡一たちは、日が暮れるまでお祭りを楽しむ。
そして、お祭りが終わった後は、もう一度、美羽の家に集まる。

☆　☆　☆

「あー、疲れたー」
「本当にお疲れ様。ありがとうね・・」
「いえいえ、俺はなにもしてませんよ。
活躍してくれたのは柚月です。」
「そうね。柚月ちゃん、あなたに魔法、もっと強くなるわよ。」
「そうですか？」
「うん。今度、こっちに来た時にもっと特訓してあげるね。」
「ありがとうございます！」
「そういえば、次の戦争どうするんですか？」
「多分、大丈夫よ。
今回みたいな大人数の団体戦になるのは珍しいことだし。」
「そうなんですか？」

「そうよ。少ない時は一対一っていうときもあるし。もし、また困ったことがあったら協力してくれる？」
「はい。喜んで！」
「いつ地球に帰るの？」
「明日・・でいいですか？」
「いいわよ。もう一回、美羽の魔法で地球に戻る事になるわね。」
「はい。
そういえば、和彦さんも地球の人なんですよね？」
「そうよ。和彦も君たちと一緒に地球に帰ると思うわ。」
「わかりました。」
「そうだ、柚月ちゃんと一緒に暮らすことになったけど、覚悟はできてるわよね？」
「わかってますよ・・」
聡一の家には親がいないため、柚月を家に住ませること自体は問題がなかった。
「柚月ちゃんもいい？」
「・・はい」
「もう今日は疲れたでしょ？そろそろ寝たら？」
「・・まだ大丈夫です。」
「そう？」

それからは、魔法の話し、戦争についての話し、これからのことについてなど色々な話しをした。
そして、気がついたころには皆、寝てしまっていた。

act20 「魔法」の「力」

「皆、起きて。」
氷璃の声で目を覚ます。
どうやら全員、話をしているうちに眠ってしまっていたようだ。
「うぅ・・」
少し頭が痛いような気がする。
それでも無理矢理、体を起こしあげる。
「さ、もう地球に帰る準備をしないと。
美羽の地球に行くための魔法は使える時間が決まってるのよ！」
氷璃は慌てて皆を叩き起こす。
全員、まだ寝むそうな顔をしているが、氷璃が無理矢理、四人をつれて森の中へと向かう。

この世界に来て初めて泊った小屋に来る。
さらに森の奥に進んで行くと、
石の地面にある丸い形の中に複雑な模様が書かれた場所に来る。
「ここが地球とこっちの世界を行ったり来たりする場所よ。」
五人とも、この模様の中に入る。
「美羽、あとは頼んだよ。」
氷璃が模様の中から出ると、美羽が魔法を発動させようとする。
「じゃあね、聡一君、柚月ちゃん、和彦。
また会いましょう。」
「はい！また会いましょう。」
「氷璃さん、さようなら」
「またな。」
こっちの世界に来た時と同じようにブラックホールのようなものが発生する。
その中に吸い込まれると、すぐに気を失ってしまった。

☆　☆　☆

「うぅ・・」
聡一が目を覚ますと、自分の家のリビングにいた。
「あの魔法って好きな場所に出られるのかな？」
そのとき、なにか左手に柔らかいものがあたってるのを感じる。
そっと見てみると、そこには柚月が寝ている。
「うっ・・」
思わず驚いてしまう。
「そうだった・・今日から柚月と一緒に暮らすんだった・・
柚月、起きろよ。」
背中に手をあて、軽く揺する。
「うぅん・・
ひぃっ・・なんだ聡一君か・・」
「なんだって・・」
「そっか、私たち地球に戻って来たのかー
ここが聡一君の家？」
「そうだよ。」
「結構、広いんだね。
今日から、よろしく。」
「う、うん・・」
「あ、聡一君、学校行かなくていいの？」
「あぁ、もう行かないよ。」
「え？」
「地球より、あっちの世界のほうが住み心地よさそうだからさ。
将来は、あっちの世界に住もうと思う。」
「だからって学校、行かないのは・・」
「いいんだよ。
そうしとけば、いつ呼ばれても、むこうの世界にいけるからな。」

「そう・・ずっと一緒だからといって、私に変なことしたら許さないからね。」
「しねーよ、バカ」
「それ、私じゃ嫌だってこと?」
「いや、そうじゃなくて・・」
「えへへ、やっぱり聡一君はおもしろい人だったね。」
柚月は満面の笑みを浮かべる。
それを見ていると聡一も自然と笑顔になっていく。

初めて会ったころの柚月は笑顔を見せることもなく
ただの暗くて無口で地味な女の子だったはずだ。
でも、今は違う。
雰囲気も明るくなって、たくさん喋るようになった。
笑顔になる回数も増えていた。
なんのおかげで、そうなったのかはわからないが
確実に魔法の世界に行ったことが関係しているだろう。
聡一は「魔法」には、すばらしい「力」があるということを確信した。

ａｃｔ２０　「魔法」の「力」（後書き）

これで第一章は終わりです。
まだ続きますので、これからもよろしくお願いします。

次は登場人物紹介を書きたいと思います。

登場人物紹介・魔法説明（前書き）

第一章、終了時点での登場人物について書きたいと思います。
読んでいただければ本編がよりわかりやすくなると思います。
本編に直接、関係しないので飛ばしても大丈夫です。

登場人物紹介・魔法説明

登場人物紹介

森嶋聡一（もりしま そういち）

この作品の主人公です。
魔法の世界につれて行かれ、「合成魔法」を習得し、
さらに柚月と氷璃とともに特訓をしたおかげで「魔法を吸収」することもできるようになる。
年齢は十五歳で普通の中学三年生。
誰からも好かれる性格をしている。

高梨柚月（たかなし ゆづき）

重力を操る魔法を使う中学三年生の女の子。
暗い性格をしていたが氷璃や魔法に出会ったおかげで、明るい性格に変わっていく。
頭が柔らかく、魔法の応用能力がとても高い。
聡一にだけ時折、女の子らしい一面を見せることもある。
料理が結構、得意だったりする。

幽崎美羽（ゆうざき みはね）

風を操る魔法を使う。
聡一と柚月を魔法の世界につれてきた張本人でもあり、
聡一と柚月がどんな魔法を使えるのかも教えている。
とても明るく、思ったことは、はっきり言う。
とても器用で空気の動きから相手の動きを読み取るなどということもする。

氷璃（ひょうり）

氷を操る魔法を使う。
美羽の姉で聡一と柚月に魔法の使い方を教えた。
とても、すごい魔法使いで、ほとんど敵無しの強さを持っているらしい。
普段は優しいお姉さん的存在だが起こると、とても怖い。

仙台和彦（せんだい かずひこ）
聡一や柚月と同じように地球から来た魔法使い。
植物を操る魔法を使うのだが、派手な使い方をしないため
本当に魔法を使ったかどうかの確認ができない。
喧嘩がとても強いらしく、主な攻撃方法は殴るなどというものだ。

単語について

ここからは、この作品でよく出てくる単語について説明を書いていきます。

合成魔法（ごうせいまほう）
二つの魔法を会わせて新しいひとつの魔法を作りだす魔法。
聡一は、もうすでに五つの魔法を合成することに成功している。

吸収（きゅうしゅう）
相手の魔法を体内に取り込み、消しさること。
大抵の魔法は一瞬で吸収できるが例外もある。

魔力（まりょく）
魔法を使うためのエネルギーのこと。
一人の人が持っている魔力は無限だが、一度にたくさんの魔力を使うほど

魔法のコントロールが難しくなる。

登場人物紹介・魔法説明（後書き）

これを書いてて気づいたのですが
登場人物、五人しかいないんですね（笑）

では、第二章もよろしくお願いします。

act1　電話とニュース

「もしもし、氷璃さん？
そっちの世界の生活もいいですが、地球のほうがなんか安心するっていうか・・
やっぱり、慣れてるからでしょうかね？」
「私も地球に住んでみたいわね。」
「柚月・・朝から誰と話してるんだよ・・」
魔法の世界から地球に戻って来た日の翌日、まだ朝早いのに柚月の声で起きてしまった。
「あ、聡一君も起きてきたみたい。
出しますか？」
「お願い。」
柚月の手には透明で細長い水晶が握られている。
「なんだよ、それ。」
「電話だよ。相手は氷璃さん。
ほら、出て。」
柚月から、その水晶がわたされる。
耳に当ててみると本当に電話みたいだ。
「もしもし、聡一君？
柚月ちゃんとの共同生活は楽しい？」
「なに言ってるんですか！
そういう言い方はやめてください！」
「それで、どうなの？
柚月ちゃんみたいな、かわいい子と一つ屋根の下にいる気分は。」
「それは・・嬉しいですけど・・」
「やっぱり、そうよねー　そのまま結婚しちゃえば？」
「・・切りますよ。」
「あー　ごめん、ごめん　真面目な話し、あるんだって！」

「なんですか？」
「それがね、地球にも結構、魔法使いがいるのよ」
「それが、どうかしたんですか？」
「・・危険な人もいるみたいだから気をつけてね。
魔法使いだっていうことは、なるべく隠してね。」
「わかってますよ。」
「じゃあ、それだけだから。
じゃあね。」
電話が切れる。
電話の切れ方まで地球の電話にそっくりで少し驚いた。
「氷璃さん、なんて？」
「地球にも魔法使いがいるって。
その中には危険な人もいるみたいだから気をつけてって。」
「へー、どんな人がいるのかな？」
「さぁ、あと魔法使いだっていうこと、なるべく隠すようにだって。
」
「わかってるよー」
「そういえば、この電話、いつ貰ったの？」
「美羽さんの家から出るときだよ。
聡一君は、ちょうどトイレに行ってたかな。」
「あぁ、あのときか。」
「うん。今日は、なにか予定あるの？」
「うーん・・特にないな・・」
「じゃあ、家でゆっくりしてようか。」
「そうだな」
聡一と柚月は、なにかするわけでもなく
適当にテレビでも見ながら時間をつぶす。
「学校ないと暇だねー」
「そうだな、こんなに暇になるとはなー」
またボーっとしている。

テレビではニュース番組をやっている。
コンビニで強盗があった、殺人が起きたなど、
いつもとなんら変わらないニュースをやっている。
「次のニュースです。
また新たな被害者が出ました。」
なにやら深刻な事件のようだ。
その事件の内容は連続殺傷事件だ。
被害者の人数はすでに九人にものぼっているという。
犯行の方法は人気の無い道を歩いていた被害者が刃物で切りつけられるという感じだ。
凶器は見つかっておらず、被害者は全員、刺された時の記憶がないという。
「なんか、変な事件だな。
結構、近いところで起きてるみたいだし。」
「えぇ！聡一君、この事件のこと知らなかったの？
学校でも注意するようにって言ってたじゃん。」
「そうだっけ？」
どうやら、むこうの世界と地球の時間経過は同じらしく
むこうの世界にいた日付のぶんだけ時間が経っている。
つまり、この事件は一週間以上前から起きているというわけだ。

ａｃｔ１　電話とニュース（後書き）

第二章、始まりました。
タイトルが仮のもののため
変わるかもしれません

ａｃｔ２　黒い球体の魔法

「ねぇ、なんかしようよー
すごい暇なんだけどー」
「そう言っても、なにもすることないじゃん。」
「確かにそうだけどさー」
「・・・」
「そうだ！魔法の特訓しない？
氷璃さんがまだ戦争あるって言ってたし、
それまでに新しい魔法の使い方、見つけたいの。」
「別にいいけど・・ずいぶん熱心だな。」
「だって、私がこんなに人と・・
それも男の人と話せるほど自身がついたの、氷璃さんのおかげなんだもん。
だから、今度は私が氷璃さんの力になれないかなーって。」
これが柚月の本心。
前までの暗い自分が本当に嫌だったんだ・・
だから、魔法に関しては真剣に考え、新しいものを見つけようとしているんだ・・
「聡一君、どうしたの？」
「え？ちょっとね・・」
「じゃあ、特訓始めよう。」
「ちょっと待って、その前に魔法を吸収しないと・・」
「そうだったね。準備、いい？」
「うん」
柚月が魔法を発動させ、聡一にかかる重力が大きくなる。
その魔力を全て吸収しつくす。
「もういい？」
「うん。ありがとう。」

「じゃあ、私の考えた新しい形やってみてもいい？」
「いいけど・・家を壊さないように加減してよ。」
「わかってるよー」
柚月の目つきが変わる。
完全に集中している証拠だ。
そして、空中に黒い小さな球体が出来始める。
その球体はグォォォンと不気味な音を出しながら、
中心に向かって回りの黒いものが吸い込まれていくような感じだ。
球体は大きさを変えずに、ずっと回転しながら、
空中の一点で止まったままだ。
「聡一君・・それ・・吸収して・・」
柚月は、つらそうな声で言う。
「え？わ・・わかったよ。」
あまり、意味がわからないまま黒い球体を吸収するために手を伸ばす。

ズズズズズ・・

黒い球体に触れた瞬間、体中に激痛が走る。
「うっ・・な、なんだよ・・」
まったく吸収することができない。
だが、少しずつだけど黒い球体が小さくなっていってるような気がする。
「くそ・・」
聡一は激痛に耐えながら黒い球体の吸収を試みる。

一体、どれだけの時間、激痛に耐え続けたのだろう。
この黒い球体を作り出した柚月は、気絶してしまっている。
前に氷璃から聞いた話によると魔法を発動させた
魔法使いが気絶・死亡した場合は魔法が消えるはずだ。

それなのに、この黒い球体は、まだ存在しつづけている。
黒い球体の大きさは最初の半分くらいになった。
「もうひと踏ん張りだ！」
右手に全神経を集中させ、一気に黒い球体を吸収しようとする。
黒い球体と右手の間から激しい光が発生し、目を閉じてしまう。
もう一度、目を開けると黒い球体は無くなり、体中の激痛も、もうない。
「や、やったのか・・」
どうやら、黒い球体の吸収に成功したらしい。
「ハ、ハハハ・・やっと・・終わった・・」
一体、なぜこの球体は柚月が気絶したのに消えなかったのだろう。
「そうだ！柚月！」
床に倒れている柚月に近づく。
「大丈夫か、柚月」
右肩を軽く叩きながら声を大きめにして話しかける。
「うぅぅ・・」
どうやら死んではいないらしい。
「よかった・・」
聡一は柚月を抱きかかえ、柚月がいつも寝ている部屋に行き、柚月を布団に寝かせる。
一人でリビングに戻り、もう一度黒い球体のことについて考えてみる。

・柚月が発動させた魔法
・発動させた柚月が気絶しても黒い球体は消えなかった
・吸収するのに、かなり時間がかかった

「わかっているのは、このくらいか・・
やっぱり、柚月に聞かないとダメかな・・」
時計に目を向けると、午後三時・・

黒い球体の吸収を始めてから一時間ほど経過している。
「はー、一人で、なにしてればいいなだよ・・」
柚月が起きてくるまで、どれだけかかるかわからない。
さらに、なにもやりたいことがない・・
つまり、柚月が起きてくるまで暇な時間を過ごさなくてはいけないということだ。

――そうだ、寝よう

自分でも、驚くほどいい考えだ。
むこうの世界ではお祭りがあったから全然、眠れなかった。
よく考えてみれば寝不足だ。
さっき、黒い球体を吸収したせいで、さらに疲れた。
聡一は自分の部屋に向かい、ベッドに潜り込む。
ベッドに入って三秒・・いや一秒で眠りについただろう。
こんなにも心地のよい睡眠は初めてだった。

ａｃｔ３　黒い球体の正体（前書き）

この話から少し書き方が変わります。
内容は、そのままなので続けて読んでも大丈夫です。

act3　黒い球体の正体

聡一が目を覚ましたのは午後七時だ。
つまり四時間、寝ていたことになる。
体が恐ろしいほど軽く、頭もスッキリしている。
「そうだ柚月……」
四時間も経っているのだから柚月も起きているはずだ。
そう思いリビングに向かう。

リビングには誰もいない。
テーブルの上には小さな紙が一枚、置いてある。
柚月の起き手紙のようだ。

「買い物に行ってきます」

とだけ書いてある。
「また待たなきゃいけないのか……」
溜め息をつこうとしたとき、玄関のドアが開く音がする。
玄関に行ってみると、ちょうど柚月が帰って来たところだった。
「おかえり」
「ただいまー
今から夜ごはん作るから待っててね。」
柚月の両手には大きな買い物袋が持たれている。
白い袋だったため中の様子はよくわからない。
柚月はすぐにキッチンへ行き、夕食を作り始める。
「さっき使った魔法、どういうのなの？」
野菜を切っている柚月に後ろから話しかける。
「一点にかかる重力を少し変えてみたの」
「……そういえば、なんで急に「吸収して」なんて言ったの？」

「あれは……私の力じゃ、あの黒い球体を制御しきれないって思ったから……」
「じゃあ柚月が制御できなくなって、黒い球体自体が自分の意思で動いていたから
柚月が気絶したのに消えなかったってこと？」
「わかんない……だから後で氷璃さんに電話してみようと思うんだけど……」
「その方法があったか……全然思いつかなかったよ。
魔法といえば氷璃さんだもんな。」
「うん！」
柚月は笑顔になり料理を続けている。
「それで黒い球体ができたときは、どんなふうに重力をかけたの？」
「球体の中心に対して、全部の方向から重力がかかるようにしえみたの。
だから中心にはものすごい量の重力がかかって、あんなふうになっちゃったの。」
「じゃあ、あの黒い球体は重力の塊ってこと！？」
「多分そう。
でも、制御できなくなるなんて思わなかったの……
小さいうちは制御できてたんだけど……」
「そう……じゃあ、次は制御できるように特訓しなくちゃね」
「うん！聡一君も手伝ってくれる？」
「当然だろ」
「ありがとう。もうすぐ完成するから、ちょっと待っててね。」
柚月は鍋で、さっきまで切っていた野菜を煮込んでいる。

「はい。」
柚月がテーブルに並べた料理は、
むこうの世界で食べた植物が色々入っているスープによく似ている。
そして、その横にはパン。

むこうの世界とほとんど変わらない食事だ。
「ねぇ、早く食べてみてよ！」
「うん。いただきます。」
スープを一口、飲んでみる。
普通に美味しかった。
そして、久しぶりの地球の食べ物の味に少し感動する。
「どう？」
「おいしいよ」
本当においしい。
甘くて、しょっぱいような……
なにか不思議な感じだ。
「これ、氷璃さんに教えてもらったのを野菜に変えて作ってみたんだー」
「へー、すごいじゃん。本当においしいよ」
「ありがと！」
柚月はまた笑顔になる。
この笑顔にはすごく癒される。
もしかしたら柚月に不思議な感情を抱いているからなのかもしれない。

夕食を食べ終え、柚月の持っている水晶で氷璃に電話をする。
「もしもし、氷璃さん？」
「あぁ、柚月ちゃんね。」
「ちょっと魔法のことで聞きたいことがあるんですけど……」
「いいわよ。なんでも聞いてちょうだい。」
「今日、私が発動させた魔法が私が気絶しても消えなかったんですよね……」
「へー、珍しいじゃない」
「え？ありえないことじゃないんですか？」
「まぁ、ほとんどありえないけど、なるときはなるわよ。」

「どういうときに、なるんですか？」
「魔法が暴走したときかな。
そうなったら魔法自体を消し去らないといけないから大変なんだけど
そっちには聡一君もいるから、大丈夫でしょ？」
「なんでわかるんですか……」
「だって魔法が暴走したら、ただじゃ済まないもの。
今、電話できてるってことはそれを消し去ったとしか考えられない
から
聡一君が吸収したのかなーって。」
「本当に氷璃さんは、すごいですね！
私も氷璃さんくらい、すごい魔法使いになりたいです！」
「柚月ちゃんなら、なれるわ。
すごい魔法使いって皆、一度は魔法を暴走させるから。」
「じゃあ……氷璃さんも……」
「うん。一度、暴走させたわ。
でも、何回もその魔法を使い続けて
今は、その魔法も制御できるようになったけどね。
柚月ちゃんも、制御できるようにがんばってみたら？」
「そのつもりです。
聡一君もいるから安全ですしね。」
柚月と氷璃の笑い声は聡一にも聞こえるほどだ。
「ありがとうございました。
じゃあ、切りますね。」
「うん。じゃあね。」
柚月は電話を切り、水晶をポケットの中に入れる。
「氷璃さん、なんて言ってた？」
「制御できるように、がんばってみたら、だって。
そういうわけで明日から協力よろしくー！」
「おう！」
正直、もう一度あの球体を吸収できるか心配だった。

しかし柚月は、こんなにがんばろうとしているんだ……
そのためなら少しくらい危険でも協力しようと思う。
「ねぇ、お風呂入りたいんだけど……」
「え？」
この一言は聡一を深く悩ませることになる。

act4　お風呂

むこうの世界から直接、ここに来たのだから柚月の着替えがない。
さらに女の子が同じ家の中でお風呂に……
……なるべく考えないようにしよう。
「ダメ？」
「いや……いいんだけど……
着替えが……」
「聡一君の貸してよ。
それで明日、買いに行こうよ。」
待て待て待て、今回ばかりはその笑顔に惑わされるわけにいかない。
このままでは本当にヤバい。
漫画やアニメの世界なら、ありえても……
女の子に服を貸す？それも、こんなかわいい子に？
絶対に無理な話だ。
いや……貸すのはいいんだけど、そのあとが……
「ねー、なに顔赤くしてんのー
そんなに私に服を貸すのが嫌なのー」
柚月が少しずつ近づいてくる。
それにあわせて聡一は後退していく。
「逃げてもダメだよー
汗かいたまま、寝るのなんて嫌だからねー」
ガタン……
聡一は柚月から離れるのに後ろへ下がっていくと
父と母の服が入っているタンスに背中をぶつける。
聡一の父と母は、すでに死んでおり、もうこの世にいない。
そのとき、ふと思いつく。
「母さんの服でもいい？」
この考えがあった！

これなら柚月も俺の服を着なくて済むし、なにより、俺が普通の状態を保てる。
「え？いいの？
そういえば……お父さんとお母さんは？」
「死んだよ……」
「ゴメン……でも、いいの？」
「うん。柚月も俺の着るよりはマシだろ？」
「うん……」
「じゃあ、適当に取ってって。
サイズは……会わないと思うけど」
聡一がタンスを開け、柚月に服を見せる。
柚月は適当に服を取ると広げて体に会わせる。
「やっぱり大きいよな……
母さん、身長高くてさー」
聡一の母の身長は百七十センチほどあった。
それに対して柚月は百五十センチほど。かなり大きい。
「なんか、ごめん……
このサイズしかないんだよ……」
「ううん、ありがと。じゃあ、入ってくるから。
……のぞかないでね」
のぞかないでねって……
そんなつもりは無い。
でも……
深く考えないことにしよう。
このままでは本当に大変なことになってしまいそうだ。
「俺は、そんなことしねーよ」
そう言って誤魔化すものの……
説得力が全然無い。
この言葉を聞いた柚月は笑顔のまま風呂場へ向かう。

サァァァ……

……一人しかいないため、柚月が風呂に入っている音が丸聞こえだ。
自分でも顔が赤くなっていることがわかる。
こんなことが毎日続くのかと思うと嬉しいようなつらいような……
なんだか、よくわからないが、とにかくのぞくことは絶対にしない。
神に誓う。
そんなことをして柚月に嫌われでもしたら……冗談じゃない！
そんなことは絶対に嫌だ。
そして一緒に暮らすのが気まずくなってしまう。
聡一の頭の中を色々なことがグルグル回る。

ガチャ……

風呂場のドアが開く音がする。
思ったより入浴時間が短かったので時計を見てみる。
柚月が風呂に入ってから四十五分が経っている。
どうやら色々、考えているうちに時間が過ぎていたようだ。
「あぁー、気持ちよかったー
聡一君も入らないの？」
顔をほんのり赤くさせ、バスタオルで髪の毛を拭きながら、柚月がリビングに来る。
顔を直接見ることができない。
なぜか鼓動がありえないほど早くなっている。
「聡一君？どうしたの？」
「な、なんでもないよ
じゃあ、俺も入ってこようかな……」
声が少し震えている。
さらに立ち上がって歩き始めるが動きが少し変だ。
自分でも、わかるほどに。

「本当に大丈夫？
顔、真っ赤だし……」
お前のせいだよ！
大声で叫べたら、どんなにスッキリするだろう。
でも、そんなことする勇気などないに決まっている。
無言のまま風呂場に向かい服を脱ぐ。

「あぁ、本当にヤバかった……」
浴槽につかりながら一安心。
「聡一君ー、背中流そうかー」
ドアの外には人影が……
この声は間違いなく柚月の声だ。
「な、なに、言ってんだよ……」
思わず立ち上がってしまい、お湯が流れる音が聞こえる。
本当は、ぜひともお願いしたかった。
でも……な。
わかってくれる人はいるのだろうか……
今まで、こういう状況になることえをどれほど願ったか……
「えへへ、冗談だよー」
そうだよな。そうじゃないとおかしいもんな。
このあとは何もなく、いつもどおり入浴を済ませる。

act5　和彦の訪問

「やっと来ましたかー
一人で暇だったんだよねー」
「どうせ二人になっても、することがないじゃん」
「それが、あるんですよー」
「なにすんの？」
「私の質問に答えてもらいまーす！」
柚月のテンションがいつもより高い気がする。
「別にいいけど……簡単なのでお願いね。」
「わかってるよー
じゃあ、一つ目。ズバリ、彼女は？」
なんだよ、その質問……
「いないけど……」
「おぉ！じゃあ、好きな女性のタイプは？」
母親の服を着てる人と恋愛に関する話をするとか……
普通ありえるのかな、こんな状況……
「明るくて優しい人。」
「うーん……難しいな……」
「なんのこと？」
「え？こっちの話。」
「他は？」
「もう、ないよー
次は聡一君から質問して。」
「……じゃあ彼氏は？」
「いないよ」
「好きな男性のタイプは？」
「優しくて強い人。
って私と同じ質問じゃん！」

「別にいいじゃん……」
「……まぁ、いいや
もう遅いし、寝ようか。」
「そうだな」
「明日、服買いに行くの付き合ってね。」
「うん。」
今、来ている服は半袖のはずなのだが・・やっぱり袖が長い。
でも、なんかかわいい……
「じゃあ、おやすみー」
大きい服を着たまま柚月は部屋に向かう。
聡一も自分の部屋にむかい、ベッドに寝転がる。
特に疲れているわけではなかったが、すぐに眠る事ができた。

☆　☆　☆

「聡一君、早く起きて！」
柚月に起こされ、目を覚ます。
目の前には昨日と同じ服装の柚月が立っている。
「おはよう！」
「おはよ……」
朝から、なぜこんなに元気なんだろう……
「朝ごはん、できてるから食べよ。」
「あ、ありがとう……」
まだ眠い。でも二度寝するわけにもいかないので無理矢理、体を持ち上げる。
リビングのテーブルに置かれたご飯からは湯気がたっている。
「ほら、早く早く」
椅子に座る。
「いただきまーす」
「いただきます……」

柚月は笑顔のまま、ご飯を口に運ぶ。
聡一も少しずつご飯を口に運ぶ。

「ごちそうさま」
「ごちそうさま」
朝食を食べ終えるころには聡一も、すっかり目が覚めていた。
柚月は食器を片づけ始める。
「今日、一緒に買い物行くんだから準備しておいてね」
「おう……」
そういえば今日は柚月の服を買いに行くんだった……
どうしよう、楽しみすぎるぞ……
聡一は自分の部屋に向かい、自分が持てる全てのファッションセンスを使い、服を選ぶ。
服を選ぶだけで、こんなにも悩んだのは初めてだ。
悩んだ末に選んだ、服に着替えリビングに向かう。
柚月がいない。
部屋のドアが閉まっていたため、柚月も着替えをしているのだと思う。
柚月の部屋のドアを開き、昨日と同じ服を着ている。
「あれ?その服……」
「あぁ、昨日の夜、洗濯したんだー
ちょうど乾いたから、よかったんだ。」
「じゃあ、もう行こうか?」
「うん」

ピンポーン

ちょうど家から出ようとしたところに家のチャイムが鳴る。
玄関に行き、誰が来たのかを確認する。
そこに立っているのは和彦だった。

「俺の家、なんで知ってるんですか？」
「あ？美羽から聞いたんだよ」
美羽は聡一と柚月をこの家まで送り届けたのだから家の場所を知っていてもおかしくない。
「美羽さんですか？
もしかして和彦さんも電話を貰ったんですか？」
「あぁ、これのことか？」
和彦はポケットから水晶を取り出す。
柚月の持っているものと同じものだ。
「そういえば、和彦さんが来たのって、なにか用があったからじゃないんですか？」
「お？柚月……本当に柚月かよ！？」
「そうですよ」
柚月は笑顔で答える。
「へー、お前笑ったすげー、かわいいんだな。
まぁ、俺はロリコンじゃねーから、関係ないんだけど。
それで、俺がここに来た理由だが……
連続殺傷事件のことは知ってるか？」
「知ってます。」
「あの事件、どうやら魔法使いが狙われてるらしいんだ。」
「え？」
「被害者も自分が魔法使いだって知られたくないから記憶が無いと言ってるそうだ。」
「それ、本当ですか？」
「多分、な。
だからお前らも気をつけろよ。
俺はもう仕事あるから帰るけどよ、うまくやっていけよ。」
「はい。ありがとうございます。」
和彦は立ち上がり、家から出ていく。

act6　デート？（出発）

「魔法使いが狙われてるって、どういうことなんだろう……」
「わかんないけど……
私たちは狙われる心配ないよね？なにもしてないもん。」
「そうだよな。じゃあ、行くか。」
玄関に鍵をかけ、柚月の服を買いに行こうとする。
「あ、そうだ！」
「どうした？」
柚月の声が少し大きかったため驚く。
「私……死んだことになってるんだ……」
そういえばそうだ。
魔法の世界に行くときに行方不明などと騒がれたら面倒なため
どうせなら死んだ方がいいということで「自殺をした」ように見せたんだった……
「そういえば俺のこと全然、騒がれてないな。」
「確かにね。」
「まぁ、いいか。
その方が楽だしな。それで、どうするの？」
「何が？」
「柚月は死んだことになってるんだろ？
じゃあ、見つかったら……」
「そうだね。
……変装するとか？」
「……本当にそれで大丈夫？」
「たぶんね。ほら鍵、開けて」
「お、おう」
言われたとおり鍵を開け、もう一度家の中に入る。
「なんか使えそうなものない？」

「うーん……サングラスとか？」
「そういうのでもいいよ。」
母さんと父さんのものが入っているタンスを開け、使えそうなものを探す。
思ったより使えそうなものがたくさんある。
サングラスや伊達メガネ、大きめの帽子など色々なものがある。
「これ、かけて」
柚月から伊達メガネをわたされる。
言われたとおり、かけてみる。
柚月は聡一の顔をジッと見つめ、なにかを確認している。
「よし、大丈夫そう。
次は私のを探さなくちゃ……」
少しタンスの中を見た後、サングラスと大きめの丸い帽子を取り出す。
「本当はこういう格好したくないんだけど……」
サングラスをかけ、帽子をかぶる。
「どう？」
「似合ってるよ……」
いつもの柚月とは、なにか違う。
いつもの柚月は「かわいい」感じだ。
しかしサングラスと帽子の装飾があるだけで、かなり大人っぽく見える。
「そうじゃなくて……
私だってわかる？」
「いや、わからないと思うよ……」
「じゃあ、これでオッケー
今度こそ出発しようか」
「うん」
さっきと同じように玄関の鍵をかけ外に出る。
「思ったより時間かかっちゃったねー」

「そうだな。和彦さんも来たし変装もしなくちゃいけなくなったし……」
「だよねー
やっぱり死んだことにしない方がよかったのかな……」
「……」
なにも言うことができなかった。
どんな声をかければいいのか……それさえも。
柚月は悲しそうな表情だ。
サングラス越しに見える目も少し潤んでいるような気がする。
「はー
後悔しても無駄だよね……
あのときはさ、もう死んでもいいと思ってたから簡単に自殺したけど……
やっぱり生きていればいいことがあるんだねー」
初めて会ったころの柚月はそこまで思っていたのか……
なんだか辛くなってくる。
「あ、ごめんね……
もうこんな話はやめて、もっと明るい話しようか。
せっかくのデートだもんねー」
デート……
この言葉は、彼女いない歴イコール年齢の人にとってものすごい気になる言葉だ。
「デートなどしたことない」だからこそ感動的に聞こえてしまう。
たとえ柚月が冗談で言ってたとしてもかまわない。
少しでも、そう思ってくれているのなら。
「なんか聡一君、元気ないねー」
「え?そんなことないよ
せっかく柚月とのデートなんだから……」
またやってしまった。
本当に言葉は選ぶべきだ。

言った後に後悔しても遅い。恥ずかしくてたまらなくなる。
「え？聡一君もそう思ってくれてるの？
なんか嬉しいな。」
今の柚月は変装しているため、いつも見た目がまったく違う。
つまり変装していな状態の性格が今の柚月が言うと、なんか不自然だ。
見た目と正確が全然、一致しない。
「なんで聡一君、黙っちゃうの？」
「いや……緊張してるっていうか……」
「なんで？
でも、なんか嬉しいな。」
そう言うと柚月は笑顔になり歩く速さが変わる。
「おい……ちょっと早いって……」
「聡一君が遅いんだよー」
そんな調子のまま駅に着く。
ここからは電車に乗って移動するらしい。
聡一は、まだ行き先を知らない。
柚月が切符を買い、その電車に乗る。

ａｃｔ７　デート？（柚月のファッション）

「そういえば柚月、金持ってきてんの？」
「あ……そういえば持ってない……」
「わかった。じゃあ俺の使っていいよ」
「……そんなことできないよ」
「いいじゃん、一緒に住んでるんだから」
「……でも」
「いいって。もうここまで来ちゃったんだし」
「……うん」
小さくうなずく柚月。
聡一が柚月に服を買ってあげるほどお金があるのには理由がある。
聡一の母は、ただ聡一の父のことを愛していたから結婚した。
お互いに愛していた……理由は、それだけだった。
だから聡一の母は一切、贅沢をしないで聡一の父が働いている時間だけ自分も働いていた。
そして聡一の父が帰ってくるころには、ご飯を準備して待っている。
これがいつもの日常だった。
聡一の両親にとって、この生活はとても幸せなものだったようだ。
聡一の母は働いているのに贅沢をしない……
つまり貯金がいつの間にか、とんでもない金額になっていた。
父と母が死んだ時、息子は聡一のみだったため全ての遺産を相続した。

電車の中は、あまり混んでいない。
平日の昼間なのだからあたりまえだ。
時間どおりに目的の駅につき、電車から降りて柚月の行きたがっている店に向かう。

「ここだよ」
柚月が立ち止ったところにあった店は、とても大きい店だ。
店の外装から男が入るような店ではないことがよくわかる。
「俺も入らないとダメなんだよな……」
「うん。あたりまえでしょ、デートなんだし」
「わかったよ……」
柚月についていき、店の中に入る。
外装からもわかるように、とても広く綺麗な店だ。
しかし、本当にこんなところに男が足を踏み入れていいのだろうか？
いくらデートとはいえ、本当に付き合ってるわけではないのだから……
「なにやってんの？
早く行こうよ！」
柚月は聡一の手を握り、エレベーターの前まで歩いていく。
迷わずに歩いているため、初来店というわけではないようだ。
「何階に行くの？」
「三階だよー　まずは服を買わないとねー」
この元気な柚月が一番好きだ。
電車の中で、お金の話をしていたときのような表情はしてほしくない。
三階につき、エレベーターの扉が開く。
エレベーターから降りると、まわりは女の子むけの服でいっぱいだ。
「なに顔赤くしてんの？
服選ぶの聡一君にも手伝ってもらうんだからね？」
「え？」
「え？　じゃないよ。
ほら、行こう」
柚月はまた聡一の手を握り歩き始める。
「ねぇ、これどう？」

柚月は服を体に会わせるような感じで持っている。
なんというか……すごく柚月にピッタリ会う服だ。
サイズもちょうどいい。
「試着してみたら？」
「そうだね」
近くにあった試着室に入り着替え始める。
「どう？」
やっぱり似合っている。
身長は低いもののスタイルは、とてもよいためどんな服でも似合う気がする。
「似合ってるよ」
「本当に？　じゃあ、これ買ってもいい？」
「いいよ」
「ありがとう」
柚月はもう一度試着室のカーテンを閉め、元の服に着替える。
「これだけでいいの？」
「え……まだ買ってもいいの？」
「いいよ」
買い物かごの中には今、試着した服とスカートが一枚入っているだけだった。
「でも……なんかわるいよ……」
「いいって。柚月は、もう俺の家にずっといなきゃいけないだろ？」
「そうだけど……」
「ほら、行くぞ」
今度は聡一が柚月の手を握り歩き始める。
「柚月、なんか気にいったの無いか？」
「……本当にいいの？」
「おう」
「じゃあ……あれ……」
「あれって……本当にあれでいいのか？」

「うん……」
聡一は驚きを隠せない。
柚月が指差した先にあった服は、いわゆるゴスロリだったからだ。
その服に近づく。
そして、買い物かごに入れる。

「……」
「これ、一回でいいから着たかったんだよねー」
レジで会計を済ませ、次に買いたいものがある階へと向かう。
結局ゴスロリを着しているのを見るのはできなかった。
「あとでのお楽しみ」だそうだ。
もう一度、エレベーターに乗り二階に向かう。

act8　デート？（次の目的地）

二階は下着売り場。
今度は本気で気まずい。
「この階も一緒に回らないとダメ？」
「当たり前でしょ」
柚月はかわいい……いや恐ろしい笑顔を浮かべ聡一の腕をひっぱり歩きだす。
まわりは女性用の下着で囲まれている。
嬉しいやら恥ずかしいやら……色々な思いが頭の中でまわり続ける。
柚月は聡一のことを考えて少し急ぎ目に下着を選ぶ。
しかし、その買ったものの会計をするのは聡一なのであまり意味がない。
横に柚月がいるのが救いだった。
もし一人だったら……
考えたくもない。
会計を済ませたあと、すぐに店から出る。

「あぁ、緊張したー」
「なんで？私がいるんだから大丈夫でしょ？」
「でも……こんな店に入ったの、初めてだから……」
「なんか、ごめんね……」
「いいよ。腹減ったし、なんか食べるか」
店の入り口にある時計を見ると午後二時となっている。
知らない間に、昼を過ぎてしまっていたようだ。
「あそこでいいんじゃない？」
柚月が言った場所は、すぐ近くにあるファミリーレストランだ。
「そうだな」
二人は、そのファミリーレストランに向かう。

昼を過ぎているからか、店内には客があまりいなかった。
二人は適当な料理を注文する。
「このあと、なにする？」
「せっかくのデートなんだから、もう少し楽しみたいよねー」
「柚月はなにかやりたいことある？」
「うーん……ゲームセンターは？」
「ゲーセンでいいの？」
「うん。私、行ったことないから……」
「うそ？友達と行ったりしなかったの？」
「私……友達いなかったし、学校から帰ってきたらずっと部屋にいたから……」
「……ごめん」
明るい柚月を見ていると昔は暗かったということを忘れてしまう。
「いいよ。今は聡一君がいるから昔のことなんてどうでもいいの。」
「なんか照れるな……」
「本当にありがとうね、聡一君」
やっぱり笑顔の柚月が一番いい。
何度同じことを思ったのだろう……
こう思った回数だけ柚月は笑顔ではなくなっているということを忘れてしまう。
これからは二度と思わなくていいようにがんばっていこう……
「あ、料理できたみたいだよ」
二人とも同じものを注文していたため、同時にできあがる。
「いただきます」
こんなところでも食事をする前に「いただきます」というほど柚月は礼儀が正しい。
正直、尊敬してしまう。
「いただきます」
それを見習い聡一も言い、料理を食べ始める。
いつも思うのだがファミリーレストランの料理は、なぜこんなに美

味しいのだろう。
注文してから出てくるまでの時間も、とても短い。
さらに値段も安めだ。
忙しい時でも気軽に立ち寄れるし、とても便利だと思う。

料理を食べ終えた二人は会計を済ませ、店から出る。
「そういえばゲーセン行きたいんだっけ？」
「うん！
ユーフォーキャッチャーがやってみたいんだよねー」
どうやら柚月は本当にゲームセンターに行ったことがないらしい。
女子だからかはわからないが、普通一回くらいは行ったことがあるもんだよな……
「それで、このあたりにゲーセンあんの？」
「……わかんない」
「……じゃあ俺の家の近くにあるところでもいいか？」
「うん」
「よし、じゃあ駅まで戻るぞ」
ゲームセンターに行くため駅まで戻りもう一度、電車に乗る。
降りる駅は家の二つ手前の駅だ。
この駅の前は商店街のようになっている。
その中に一軒だけゲームセンターがあり、聡一もときどき友達などと来ることがある。

act9　デート？（ゲームセンター）

「結構、大きいんだねー」
「うん。それに人気もあるんだよね。この町で遊べるところって少ないでしょ？」
「確かにね」
聡一たちの住む町は田舎というわけではないが都会というわけでもない。
街中まで行けば結構大きなデパートなどもあるが少し街中から離れれば、住宅街がある。そこには聡一の家もあり、学校も歩いて行ける距離の場所にある。

「中も広いんだねー」
「そりゃあ、いろんな種類のゲームがあるからな」
柚月の服を買った店に入った時と立場が真逆になっている。
「それでユーフォーキャッチャーがやりたいんだっけ？」
「うん。でも、あれ難しいんでしょ？」
「いや、そんなんでもないよ」
聡一はユーフォーキャッチャーが得意なので、いいところを見せるチャンスだと思った。

「なにこれー、全然取れないじゃん！」
案の定、柚月はユーフォーキャッチャーでは何も取れないようだ。
「俺が取ってやろうか？」
「……もう一回やらせて」
どうやら柚月は負けず嫌いでもあるようだ。
「やっぱりダメだ……」
「俺にやらせて」
少し強引にユーフォーキャッチャーの操作パネルの前に行く。

狙いはもちろん柚月が狙っていた小さな猫のぬいぐるみだ。
失敗しないように慎重に操作をする。
見事に猫の足の部分に引っ掛かり、小さな猫のぬいぐるみを取ることに成功する。
「わー！聡一君すごいねー！」
「ほら」
聡一は猫のぬいぐるみを柚月に差し出す。
「え？」
「やるよ」
「いいの？」
「うん」
「ありがとう」
聡一から猫のぬいぐるみを受け取ると嬉しそうに抱きしめる。
「次は何する？」
「他におもしろいゲームないの？」
「たくさんあるよ。
時間もあるし、色々まわってみる？」
「いいの？」
「うん。どうせ帰ってもすることないし」
「やったー　ありがとー」
「じゃあ、あっち行ってみるか？」
「うん」
聡一が指差した方にあるゲームは対戦格闘ゲームやレースゲームなどの
一人でも遊べるゲームがあるコーナーだ。
「これ、やってみない？」
「私こういうのできないと思うよ……」
「いいから、やろう」
ゲーム機の中に百円玉を入れ、ゲームを開始する。
画面はキャラクターを選択するための画面になっている。

「どうするの？」
「こう」
指をさしながら操作説明をする。
「こう？」
「そうそう。ほら、始まるぞ」
戦闘画面になる。
「え？これ、どうするの？」
「こうだよ」
柚月の手を動かしながら操作方法を説明する。
「え？わかんないって……」
「あとは柚月がやってみ」
「うわ……なにこれ？ユールーズって……負けちゃったよ……」
「まぁ、初めてだから仕方ないよな」
「じゃあ次は私のやりたいことでいい？」
「いいよ」
「あれだよ。いい？」
柚月が指差した方向にあるのはプリクラがたくさん置かれているコーナーだ。
「もしかして、あれもやったことないのか？」
「……うん」
柚月は恥ずかしそうに顔を赤らめている。
「わかった。行こうか」
聡一が歩きだし、その横を柚月が歩く。

「どれがいい？」
「うーん……これ！」
プリクラを撮るために色々な設定を決めていく。
「始まるよ」
「え？どうすんの？」
「なんでもいいよ」

「じゃあ、こう！」
そう言うと柚月は聡一の腕に静かに抱きつく。
「柚月？」
「私じゃ、嫌？」
「……」
なんだよ、それ。
そんなふうに言われたら断るわけにいかなくなる……
というか、こっちが嬉しいくらいなのだが。
柚月はこんなに笑顔なのに、なんで俺は緊張してるんだ？
まさか……柚月のことを……
……それだけはダメだ！
そんなことになってしまえば、これから一緒に暮らすのがな……
あまり考えないようにするが、自然と意識してしまう。
色々考えてる間に撮影が終わってしまったようだ。
「聡一君、顔赤いよ？
大丈夫？」
「え？大丈夫……大丈夫……」
大丈夫なわけないよな……
まだ柚月は腕に抱きついたままだ。
腕になにか柔らかいものがあたっている……
「完成したの取りに行こうか」
このプリクラは撮影が終わったあとに出てくる写真は
撮影する場所の外にある取りだし口から出てくる。
もう柚月は腕から離れている。
聡一は顔が真っ赤なまま取りだし口の前に行く。
「はい、聡一君」
出てきた写真をわけ、柚月が半分をわたしてくる。
聡一の腕に笑顔で抱きついている柚月と
少し顔の赤い聡一が写っている。
「また一緒に撮ろうね」

「うん……」
「そういえば、今何時？」
「え？って、もう七時半じゃん！」
「意外と長く遊んじゃったみたいだね」
「もう帰るか。ここからなら歩いて帰れるしな」
「そうだね。」
二人はゲームセンターから出て、歩いて家に向かう。

☆　☆　☆

家までは歩いて十分ほどだ。
「今日は楽しかったねー」
「そうだな」
「ありがとね、聡一君」
「お、おう……」
「もしよかったら、また一緒に遊びに行こうね」
「そうだな」

カン！カン！

会話をしながら歩いていると、道路の横にある家と家の間から大きな音が聞こえてくる。
金属のようなものが擦れているような音だ。
「ねぇ……なんの音？」
「……わかんない。見てみるか」
そう言って音の聞こえる所に向かう聡一。
そこには……

act9　デート？（帰り道の魔法使い）

金属音が聞こえた場所、そこにいたのは二人の人だ。
少し暗く、家と家の間なので街灯の明かりも届かないので顔がよく見えない。
そこにいる二人は、どちらも刀のようなものを持っている。
片方は普通の日本刀のような形のもの。
もう片方は、フェンシングで使われる剣のような形をしている。
その二人は持っている武器で攻撃しあっている。
どちらかの攻撃が当たるわけでもなく、勝負は互角といったところだ。
二人の動きはとても速く、聡一が見切れる速度ではない。
「ねぇ、あの人たち何やってるの？」
柚月の声は、驚いているような動揺しているような感じだ。
「わかんない。でも絶対、魔法使いだよな？」
「多分。動きが普通じゃありえないほど速いもんね」
そのとき戦っている二人に動きがある。
細い剣を持っている方の人が日本刀を持っている方の隙をついて逃げ出す。
しかし「逃げる」というのが正しいのかはわからない。
正しくは「消えた」というような感じだ。
暗闇にスゥー……と消えていったように見えた。
「また逃げられましたか……」
残りの一人は日本刀を近くに落ちていた鞘に入れる。
そして、聡一と柚月のいる方向へ歩いてくる。
「君たち、今の見てた？」
話しかけてきたのは女性だった。
眼鏡をかけていて頭のよさそうな感じのお姉さん的な印象を受ける。
「はい」

聡一は、なぜか堂々としている。
「そのわりには驚いてないみたいね」
「あなたも魔法使いなんですか？」
「「も」っていうことは君も、そうなのかな？」
「はい」
「へー　じゃあ気をつけた方がいいよ。
じゃあ、またどこかで会いましょうね」
女性は歩きだそうとする。
「待ってください！
俺が「魔法使い」だから気をつけなくちゃいけないんですか？」
「さぁね。詳しいことは私も知らないから。
でも最近、起きている殺傷事件の被害者は全員魔法使いよ。」
「じゃあ犯人は、あなたと戦ってた人なんですか？」
「それもわからないわ。
でも、味方でないことは確かよ」
「そうですか……」
「じゃあ私は、まだやることがあるから」
その女性は、どこかへ行ってしまう。
「聡一君、今の人誰？」
「わかんない。でも魔法使いなのは確かみたい」
「そう……じゃあ、私たちも帰りましょうか」
「うん」
その場から離れ、聡一の家へ向かう。

☆　☆　☆

「さっきの人たち、なんだったんだろうね……」
「さぁね。でも悪い人じゃなさそうだし、大丈夫じゃないかな？」
「でも、あの人たちが戦ってた場所、見た？
塀とかに傷がたくさんついたりしてたんだよ？」

「そりゃあ、魔法使い同士の戦いだしな」
「武器を持ってたのに、魔法使いなの？」
「そうなんじゃないの？
本人も「魔法使いだ」みたいなこと言ってたし」
聡一は、この話をするのが少し面倒くさかった。
正直、あの二人が誰でも関係ない。
自分たちに影響があるわけじゃないし、面倒なことには巻き込まれたくないからだ。
「もう風呂、入っちゃえよ」
「今日も私が先でいいの？」
「うん」
「わかったー　じゃあお先にー」
柚月は風呂場に向かう。
一緒の家で女の子が風呂に入るのも、これで二度目。
だいぶ慣れてきた。
そのおかげで、なんとなく楽な気がする。

「ふー　聡一君も、もう入っちゃえば？」
「そうだな」
次は聡一が風呂場に向かう。
いつもどおり浴槽に浸かっていると、ガラスの割れるような音がする。
一瞬、驚いたが気にせず入浴を済ませる。

風呂場から出るとリビングには柚月の姿がなかった。
「また部屋の中にいるのかな？」
そう思い、しばらく待ってみることにする。

十分経っても二十分経っても柚月は戻ってこない。
「寝てるのかな？」

さすがに心配になった聡一は柚月の部屋に行ってみることにした。
「柚月ー　入るぞー」
返事がない。仕方がないので、そのまま入る事にした。
部屋の中にも柚月の姿がなく、部屋の奥にあるカーテンが風で靡(なび)いていた。

act10　誘拐

そこに近づいてみると窓ガラスの破片は部屋の中に散らばっている。
つまり外から割られたということだ。
「まさか……柚月……」
窓の外を見てみるが柚月の姿はない。
「誘拐……ってことか？
くそ……風呂に入ってるときに気づけば……」
急いで玄関に向かい、外から割られた窓の様子を見に行く。
窓ガラスの割られ方は、「割られている」というよりは
「切られている」というような感じだ。
「でも、柚月は魔法を使えるからな……」
その点を考えると柚月が簡単に連れ去られるとは思えない。
しかし、窓ガラスは「切られて」いるのだから
今日会った魔法使いのように武器を持った魔法使いの仕業だとすれば納得もいく。
ふと、さっき会った女の言った言葉を思い出す。
「気をつけた方がいいよ」
もしかしたら、これはあのとき戦っていたもう片方の人のやったことなのかもしれない。
あのとき聡一たちが戦いを見ていたということに気づいていたとして、
柚月だけが相手に都合の悪いものを見ていたとしたら狙われてもおかしくない。
「とにかく、柚月を探さないと……」
そうは思ってみるものの、
辺りは暗くどこに行ったのかもわからないため、どうにもならない。
「なんで、こういうときに限って俺は何もできないんだよ……」
聡一は悔しくて泣きたくなるほどだ。

そのとき何か小さなものを蹴ったような感触が足から伝わってくる。
足下を見てみると柚月が美羽や氷璃と電話をするために使っていた
水晶が落ちている。
「氷璃さんに電話しても、わかるわけないよな……」
ここに水晶が落ちているということは
柚月が電話をしているときになにか起きたのかもしれない。
そう考えてみると氷璃に電話をするのも無駄でもないような気がす
る。
「もしもし氷璃さんですか？」
「そうよ。聡一君？」
「はい」
「柚月ちゃんは大丈夫なの？」
「柚月のこと、なにか知ってるんですか？」
「それが、さっき電話してたら急に電話が切れちゃってさ……
なんかあったのかと思って、もう一回電話しても出ないし……」
「そうですか……
柚月は、どんなことを話していましたか？」
「え？武器を使う魔法使いについて聞いてきたけど……」
「わかりました」
「それで柚月ちゃんはどうしたの？」
「今はなんとも言えません……」
「もしかして、誘拐とか……？」
「そうかもしれません。
では失礼します」
電話を切り、もう一度まわりの様子を見てみる。
後ろを振り向くと一人の男が立っている。
全然、気づけなかった。
いつからいたのか、それすらもわからない。
「お前は、あの女の子の仲間か？」
なんか危なそうな雰囲気だ。

「あなたはどうなんですか？」
聡一は強気で乗り切ろうとする。
「俺はどちらでもない。
しかし女の子を連れて行ったやつらの敵だがな」
「柚月の行方を知っているんですか？」
「さぁな。俺はやつらの後を追っているだけだ。
今日はここで見失ってしまったのだ。
そしてここでしばらく様子を窺っていたら君が来たというわけだ。」
「柚月を……誘拐された女の子を助けるのに協力してくれませんか？」
「駄目だな。
なぜ名前も知らない、今会ったばかりのやつに協力しなくてはいけない？」
「すいません……
でも……どうしても柚月を救いたいんです！」
「……お前が俺に協力するというなら考えてやるが？」
「本当ですか？
ありがとうございます！」
「あぁ。その子を探す前に君と話しておきたいことがあるんだがいいか？」
「……わかりました。
では、ここで話しても落ち着かないので家の中に入ってもらってもいいですか？」
「いいのか？」
「はい」
会ったばかりの人を家に入れるのは気が引けるが柚月のためなら仕方がない。
そして聡一は男とともに家の中に入る。

act11　柚月の居場所

「そういえばお前も魔法使いなのか？」
「はい」
「なら話は早いな。
多分その子を誘拐したのは魔法使いだろうな」
「俺もそう思います」
「そうだ、この人見たことないか？」
そう言うと男はズボンのポケットから一枚の写真を取り出す。
その写真に写っている人物は柚月と一緒にゲームセンターの帰り会った女性だった。
「知ってます」
「どこで見た？」
「この家のすぐ近くです」
「そうか……」
「その人がどうかしたんですか？」
「いや、そのことはまた今度だ」
「そうですか……
それで柚月を見つけるにはどうすればいいんですか？」
「そうだな……ひとつだけ心当たりがある。
そこに行ってみるか？」
「はい！」
「かなり危険だぞ？」
「かまいません」
「本当に死んでも知らんからな」
「わかってます」
聡一は柚月のためなら命をかけてもかまわないと思っていた。
「それだけの覚悟ができているのなら大丈夫だな。
よし、行くぞ」

もう一度、外に出て男についていく。

「そういえばお前の名前、まだ聞いてなかったな」
「聡一です。森嶋聡一」
「聡一……か」
「あなたは？」
「さぁな」
「どういうことですか？」
「記憶が無いんだよ。
それで、さっき見せた写真に写ってた女に助けてもらった。
戦い方も魔法の使い方もあの女に教えてもらったんだよ」
「……」
聡一はこの男の言っていることに納得できなかった。
根拠は無いのだが、なんとなく嘘をついているような気がして仕方がない。
でも今は柚月を助けるのが最優先。
多少、信じられなくてもついていくことにした。

☆　☆　☆

「ここだ」
聡一が連れてこられた場所は結構大きめの倉庫で、その倉庫の雰囲気は
ドラマなどで、不良が溜まり場としているような感じの倉庫だ。
「この中に柚月がいるんですか？」
「さぁな。入るぞ」
男は倉庫の中へ入っていく。
その後を聡一が歩き、倉庫の中に入る。
倉庫の中は鉄パイプや工具などが綺麗に置かれている。

その様子から今も使用されている倉庫のようだ。
「誰もいないですね」
「そうだな」
「やっぱり、ここじゃないんでしょうか？」
「かもしれないな……」
聡一は辺りをよく見てみる。
暗くてよく見えないが、白い布がかぶせられているテーブルを見つける。
その布の膨らみ方からテーブルの上には、なにか置かれているようだ。
テーブルに近づき、布をめくってみる。
「柚月！」
布にくるまれていたものは柚月だった。
柚月は目を閉じている。
「おい！柚月、大丈夫か！」
軽く方を揺すりながら声をかける。
「う……うーん……」
目は覚まさないが、どうやら死んではいないようだ。
「うるせーなー　誰だよ？」
倉庫の奥の方から女性の声が聞こえ、倉庫の明かりがつく。
「まずい！」
男は慌てて聡一の方に来て、聡一の腕を引っ張りテーブルの下に隠れる。
「ったく……誰だよ、こんな時間に！
さっさと出てこいよ！」
その女の声から、かなり怒っていることが分かる。
「どうするんですか……」
「さぁな……とりあえず様子を窺うぞ」
男の表情はかなり冷静だ。
「そこか！」

女は右手に持っている細身の剣を聡一と男の隠れている方向に一振り。
その瞬間キィィィ……というような金属がこすれ合うような音が発生し
聡一と男が隠れているテーブルの横にある古びたロッカーが真っ二つに切れる。
「……風の魔法!?」
そう思ったが美羽が使っていたものと発生時の音も発生のさせ方も、全くの別物だ。
「……隠れてたほうが危なそうだな」
そういうと男はテーブルの下から出る。
「やっと出てきやがったか!でも、もう一人いんだろ?」
聡一も男の言うとおり隠れている方が危ないということがわかったので、
テーブルの下から出てくる。
「なんだよ!ただのガキじゃねーか!」
女の言葉づかいは、とても荒々しい。
そして、とても威圧的だ。
「どうすんですか……」
「戦うしかねーだろ」
「そっちもその気みてーじゃねーか!
なら話は早い!二人とも殺してやるよ!」

act12　女との戦闘

女は剣を振る。
さっきと同じように金属がこすれ合うような音がする。
これに当たれば危ないのはわかっている。
しかし、どのような軌道なのか見えないので全くわからない。
「同じ攻撃が当たると思うか？」
男の手には巨大な剣が持たれている。
いつから持っていたのか……あんな巨大な剣を持っていれば最初から気づいているはずだ。
男はその巨大な剣を盾のように使っている。
「やっぱり、あんたらも魔法使いか……」
女の声はさっきと比べて落ち着いている。
「いくぞ！」
男は攻めの体勢になる。
一気に女に近づき巨大な剣を振り上げる。
その攻撃が隙だらけなのは聡一が見てもわかる。
「そんな隙だらけの攻撃でいいのか？」
女は横に一歩動くと剣を横に振る。
それに合わせて男も剣を振り下ろし、お互いの剣がぶつかり合う。
剣の大きさや体型の違いから男の方が有利に感じられるが、互角のようだ。
女は素早く男がいる方向と逆に動き男の背中を切りつける。
その攻撃は男の背中に浅く当たってしまう。
「さぁ、次はテメーの番だ！
かかってこいよ！」
女は聡一の方を見ながら挑発的な態度をとる。
――ここで攻めたら負け
相手の動きは、とても速い。

自分から攻めれば攻撃を避けられ逆に攻撃を受けてしまう。
女の攻撃は魔法のようだ。
ならば、それを吸収してその直後の隙に魔法を当て一撃で終わらせる！
「なんだよ！攻めてこねーのか！
なら、こっちからいくぞ！」
女の攻撃はさっきと違う。
剣を振るのではなく、猛スピードで聡一に近づいてくる。
これでは「剣」での一撃を受けてしまう。
「剣」は「魔法」ではないはずなので、吸収することができない。
つまり、この一撃を受けてしまった瞬間聡一は終わってしまうというわけだ。
この攻撃をどう防ぐか……
聡一はふと氷璃が氷の壁を盾のように使っていたことをおもいだす。
「これだ！」
聡一の目の前に氷の壁が発生し、女はそれに気付き氷の壁を切りつける。
氷の壁は真っ二つに切られる。
慌てて発生させたものなので強度は、あまりなかったようだ。
「氷の魔法かよ！
その程度の魔法で勝てると思ってんのか？」
女はさっきと同じ距離まで下がる。
その様子から、この距離が一番戦いやすい間合いなのだろう。
ならば、この間合いを崩せば少しは有利になるはずだ。
聡一は走りだし、間合いを崩そうとする。
「逃げんのか？」
予想どおり女は、聡一の方向へ向かって走り出す。
一番魔法の使いやすい距離まで近づいてくる。
そのとき柚月の魔法を合成し、重力を大きくする。
「なんだ……体が重くなった……

テメー、何しやがった！」
「魔法を使っただけだよ」
このままにしておけば相手も身動きを取れないはずだ。
この女をどうしていいのかもわからないので、そのまま少し考えてみる。
――待てよ……重力で身動きが取れなくなるっていうことは、柚月が気絶させられるわけがない……
もう一度、女のいた方向を見てみる。
女の動きを封じていた場所……そこに女はいなかった。
「くそ……」
「そんな魔法で私を止められると思った？」
背中に鈍い痛みが走る。
なにか硬いもの殴られたような……そんな感じの痛みだ。
「どうやって逃げた……」
「さぁな」
女は剣を振り上げる。
終わった……
聡一は死を覚悟し、目を閉じる。
「うわーっ！」
その瞬間、女の叫び声が聞こえる。
さらに剣が地面に落ちる音……
「聡一君、その魔法は一つの方向だけに使ってもあまり効果ないんだよ……」
聞きなれたかわいい声。
少し元気がないように感じるが、これは間違いなく柚月の声だ。
「柚月！」
「ごめんね、心配かけて……」
「うん。それより……」
聡一は女の方を見る。
右手首がありえない曲がり方をしている。

これは柚月がやったようだ。
「なにしてくれてんだよ……」
女は左手で剣を持ちなおす。
「まだやる気か？」
「そうだよ……死ね！」
女は柚月のいる方向に剣を振ろうとする。
「聡一君、ごめんね」
柚月は前に発生させたものと同じ黒い球体を作り出す。
大きさは前より小さいままで保っている。
直径一センチほどだ。
女の魔法は黒い球体に当たったようだが全く効果がないようだ。
黒い球体はゆっくりと女に近づいていく。
「ハハ……もう終わりかよ……」
これが女の最後の言葉だった……

act13　帰宅

黒い球体は女に当たると協力な白い光を発する。
五秒間くらい光が出続ける。
聡一が目を開けると目の前に女が倒れている。
「ハァハァ……」
柚月は肩が動くほど息が荒くなっている。
「柚月！」
慌てて柚月に近づくと、ちょうど聡一の方向に柚月が倒れてくる。
息はしているので気絶しているだけのようだ。
「無理させて、ごめんな……
もっと俺に度胸があれば……」

ズズズズズ……

魔法の世界から地球に来るときに入ったブラックホールのようなものが
発生するときと同じような音が背後から聞こえてくる。
「まさか地球の魔法使いがここまで強いとはね……」
黒い影のような煙の中から若い男が出てくる。
「まだいるのか……」
聡一は思わず身構える。
「あぁ、戦う気はないから」
男の様子は本当に戦う気はなさそうだ。
「あなたは誰ですか？」
「今度、会ったときに教えるよ。
僕の本当の目的は、そこに倒れてる女の回収だからさ」
男は倒れている女を抱え、もう一度黒い影を発生させる。
「じゃあ、僕はこれで失礼するよ」

男は黒い影とともに消える。
何者だったのか……
使う魔法もよくわからないが雰囲気はとても強そうだった。
それに「今度、会ったとき」ってもう一回会うことが決まっているみたいだった。
とにかく今は柚月の無事を確認できたのでよかった。
「柚月、大丈夫か？」
「うぅ……ん」
起きそうにない。
仕方がないので柚月を抱き、倉庫から出ようとする。
そのとき、ここまで案内してくれた男がいないことに気がつく。
「いつの間にいなくなったんだ……」
少し気になったがもう夜も遅い。
柚月を抱きかかえたまま家に向かう。

☆　☆　☆

柚月はとても軽くて柔らかい。
しかし、ここで余計なことを考えてはいけない。
今、柚月は聡一の背中に背負われている。
一歩歩くたびに柚月の体は揺れ、なにか柔らかいものが聡一の背中に当たる。
その感触に耐えながら家に向かって歩き続ける。
家までの距離は結構ある。
約十五分間、これに耐え続けなくてはいけないと思うと気が遠くなりそうだ。
「くそ……余計なこと考えるな！」
自分に言い聞かせ、歩く速度を少し上げる。

十五分後、やっと家につく。

「ハァハァ……やっとついた……」
家の中に入り柚月を静かに布団に寝かせる。
時刻はもうすでに深夜二時を過ぎている。
聡一も自分の部屋に戻り眠ることにし、
今日起きたことについては明日かんがえることにする。
「ハァー疲れたー」
ベッドに倒れ込む。
そして、すぐに眠りについてしまう。

次の日、目が覚めたのは十二時過ぎだった。
リビングに行くが柚月の姿はなく、テーブルの上に一枚の紙が置かれている。
「買い物に行ってきます」
そう書かれている。
「昨日さらわれたばかりなのに、よく家から出られるな……」
関心と呆れを同時に感じる。
「そうだ昨日のこと……」
もう一度、昨日のことを思い出してみる。
窓から入り、あの剣を持っていた女が氷璃と電話していた柚月を誘拐した……
ここまではいい。
しかし「なぜ誘拐したのか」ということと「なぜ柚月なのか」ということがわからない。
もしもゲームセンターの帰り道に柚月が相手にとって都合の悪いものを見たのだとすれば、
あとから現れた若い男が柚月を殺していたはずだ。
それともう一つ。
一緒に柚月を探してくれた男の行方だ。
気絶させられた男はその場にずっといたはず。
しかし女を若い男が連れて行った後にはいなかった……

とても不思議な話だ。
疑問は、まだある。
若い男が言った言葉「今度、会った時に教えるよ」
これは、もう一度会うことになるということなのか？
考えれば考えるほど疑問が増えてくる。
「ただいまー」
柚月が帰ってきたようだ。
これで柚月がさらわれたときの様子も聞くことができる。

act14　誘拐犯の目的

「おかえり。昨日のことについて話したいんだけどいい？」
「いいよ。ちょっと待ってて」
柚月は買い物袋の中身を冷蔵庫の中に入れ、リビングにある椅子に座る。
「それで昨日のことだっけ？」
「うん。柚月がさらわれたとき、どんな感じだった？」
「ガラスの割れる音がした後、すぐに背中を殴られて気絶しちゃったから、あまり覚えてないんだよね……」
不意打ちをされたのなら簡単に柚月がさらわれたことにも納得がいく。
「なんで、さらわれたのか心当たりはない？」
「なにもないよ」
「そう……」
そのときテーブルの上に置いてあった水晶が光る。
どうやら氷璃から電話が来たようだ。
「もしもし」
「あ、柚月ちゃん？」
「はい」
「氷璃だけどさ、気をつけてほしいことがあるの」
「なんですか？」
「昨日、柚月ちゃんとの電話が切れたあと聡一君から電話が来てそのとき柚月ちゃんが誘拐されたことを知って、色々、調べてみたんだよ。
それでわかったことなんだけど……
こっちで指名手配中の犯罪者が何人も地球に逃亡してるらしいんだよね。

そいつらの目的が地球に魔力の塊を送り込むことなの」
「それがどうかしたんですか？」
「魔力の塊を送り込むには、その付近の魔力がゼロの状態にしなくちゃいけなくて、
その目的のために柚月ちゃんたちが住んでいる町の魔法使いを襲っているってわけ」
「じゃあ私がさらわれたのは……」
「そう。魔力を持っている柚月ちゃんを殺すため」
「それなら私の不意をついたときに殺せばよかったんじゃないですか？」
「私もそいつらの考えてることが全部わかるわけじゃないからなんとも言えないけど、とにかく気をつけてね。」
「わかりました……」
柚月は電話を切る。
「聡一君、昨日私たちが戦ったやつ犯罪者だって……
それも結構、大人数のグループみたい……」
「そうか……じゃあこれからも戦わなくちゃな！」
「守ってくれる？」
「え？」
「昨日みたいに私のこと守ってくれる？」
「あぁ、当然だ！」
「ありがとう。それだけで心強いよ」
「そうか。それでなにをすればいいんだ？」
「その犯罪者たちの目的は魔力の塊を地球に送りこむことなんだって。
そうするには付近の魔力をゼロにしなくちゃいけないらしくて……」
「それで連続で魔法使いが襲われてたってこと？」
「多分そうだと思う……」
「それで魔力の塊が地球に送りこまれたらどうなるの？」
「……」

「もしかして聞いてなかった？」
「今、聞いてみる」
柚月は水晶を使いもう一度氷璃に電話をする。
「氷璃さん、もし魔力の塊が地球に送り込まれたらどうなるんですか？」
「え？多分、地球の常識が全部狂うだろうね」
「そうなったら……」
「そうよ。地球に住んでいる人たちは何もできなくなって魔法に詳しい人に頼り始める。
そいつらが魔力の塊を送り込んだ張本人だとも知らずにね」
「もしかして、それが目的なんだすか？」
「多分ね」
「わかりました……では」
柚月は電話を切る。
「聡一君、今すぐ戦いに行こう！」
「え？」
「だって、あいつらのやろうとしてること最低だよ？」
「待て、その前に説明……」
「ごめん……」
「それで、どうしたの？」
「氷璃さんから聞いたんだけど、
魔力の塊を地球に送り込んで常識を全て狂わせて、どうにもできなくなった人たちに
魔力の塊を送り込んだ人たちが頼られ始める……魔法に詳しいからね。
そうすれば地球の人たちより上の立場になってしまうっていうことでしょ？」
「なるほど……
でもさ俺たちが居る限り、この付近の魔力はゼロにならないわけでしょ？

だったら俺たちが殺されなければ大丈夫なんじゃないの？」
「そうだよね……襲われたとしても聡一君が守ってくれるもんね……」
「あぁ。だから安心しろ」
「うん」
「俺たちから動く必要なんてないんだよ。
襲いかかってきたら、それを返り討ちにしてやればいいんだから」
「そうだね……」
「じゃあ、これからはなるべく一緒に行動するようにするか」
「うん！」
これで地球に魔力の塊を送り込もうとしているやつらの対処法はできた。
あとはその魔法使いの強さが問題となる。
柚月を誘拐した女程度の強さならばなんとかなるがあまりにも強い敵が現れたとしたら……
それでもなんとかするしかない。
「柚月、また魔法の特訓しないか？」
「そうだね……強い敵が現れたら困るもんね」
「俺の魔法は強化しようにも、どうすればいいかわからないから柚月の黒い球体の魔法をもっと強化しようか」
「……また聡一君に吸収させることになっちゃうよ？」
「俺のことは気にしなくていいよ。
それにたくさん吸収した方が俺も強くなれるし」
「わかったよ……
じゃあ、さっそく始めるよ？」
「よし、こい！」

ガシャン！

また昨日と同じようにガラスの割れる音がする。

act15　大男の襲来

「もしかして、また？」
「わかんないけど……」
聡一は少し身構えながら音のした方へ向かう。
今度は聡一の部屋の窓が割られていた。
そして部屋の中には身長が二メートル近くある大男が立っている。
「本当にお前らがあいつを倒したのか？」
「あいつって誰のことですか？」
この男が言っているやつのことなんてわかっている。
昨日、戦った女のことだ。
「細い剣を持った女だよ。うるさいやつ。覚えてないか？」
「それなら昨日、戦いましたよ」
「やっぱりお前らか。あいつも情けねーなーこんな子どもに負けるんだからよ！」
「なにしにきたんですか？」
「あ？敵討だよ！あんな雑魚でも仲間だからな。
そういうわけでちょっと相手してもらう！」
大男はいきなり魔法を使い始める。
よくわからない魔法だ。
確かに魔法を使っているのだが、なにも起きない。
だからこそ聡一は自分から攻めることができなかった。
相手の魔法を知る……それが聡一の勝つために必要なことだからだ。
「え？なによこいつら！」
後ろから柚月の声が聞こえてくる。
「どうした！」
柚月のまわりには体が透けている人がたくさんいる。
「魔法が……効かない？」
柚月は必死に魔法を使おうとしている。

「どうなってんだよ……魔法が使えないって……」
そのとき聡一に一つの考えが浮かぶ。
もしも柚月のまわりに見えている人たちが魔法で作られたものだとしたら……
それを吸収することができる。
しかしそうでなければ自分も魔法が使えなくなって大男に殺されてしまうかもしれない。
でも柚月を救うためには、これに賭けてみるしかない！
聡一は柚月のいる方向へ行こうとする。
「君の相手は俺だよ」
さっきまで逆方向にいたはずの大男が聡一の目の前にいる。
腹部に激痛が走った。
どうやらこの大男は和彦と同じように魔法はあまり使わないようだ。
「くそ……」
吸収しておいた魔法を合成し始める。
ガッ！
もう一発、腹部を殴られる。
「君のやりたいことはわかってんだよ！」
聡一のやりたいことは全て知られている……
つまり大男はもう魔法を使わないつもりなのだろう。
そうなれば喧嘩や殴り合いとは無縁の生活を送っていた聡一は圧倒的不利になる。
柚月もまだ魔法を使えないようだ。
「ハァハァ……」
このままでは簡単に殺されてしまう。
ならば何もしないよりはマシだ。
そう考え、聡一は大きく振りかぶって大男に殴りかかる。
「そんな振りかぶった攻撃が当たると思うか？」
大男は聡一の手首を掴み床に投げ飛ばす。
「ウッ……」

ものすごい勢いのまま床に背中から叩きつけられる。
意識も朦朧としてきた……
「どうすればいいんだよ……」
柚月も魔法を使えないまま透明な人たちに苦しめられているようだ。
「どうせここで死ぬんだから、なんで負けたのか教えてやるよ。
あらかじめ吸収しておいた魔法を合成するのに隙が大きすぎだ。
そしてもう一つ、あの女の子がいないと何もできないんだな」
「長々と語ってくれたじゃねーか……ハァハァ……」
意識が朦朧としている間も勝つための方法を考えていた聡一は、
大男が話し始めたときに魔法の合成を始めていた。
どんなに朦朧とする意識の中でもあれだけの時間があれば余裕で合成を済ませられる。
「まだ、やろうってのか？」
「俺たちの……勝ちだよ……」
聡一の右手には柚月が発生させた黒い球体ができている。
しかし大きさは柚月のものの半分にも満たない。
「この魔法なら……この大きさで十分だよな？」
黒い球体は一直線に進み大男の脇腹を貫通する。
大男はそのまわりの服が血で滲んで行くのがわかるほどの出血をしている。
「ゴホッ……ゴホッ……」
大男は咳をしながら血を吐き出す。
「終わり……だよな……」
「くそ……」
最後の力で聡一に殴りかかろうとする。
その攻撃はさっきまでのものとは全く違い、聡一でも簡単に避けることができた。
大男はそのまま床に倒れる。
そして柚月のまわりにいた透明な人も消えている。
どうやら、あれは大男の魔法だったようだ。

「聡一君！大丈夫？」
「大丈夫だよ……」
聡一は柚月の肩を借りながら起き上がる。
「やっぱり聡一君は私を守ってくれるんだね」

act16　襲撃に備えて

ズズズズズ……

昨日、女を倒した時と同じ音が聞こえてくる。
「君たちは本当に強いね」
黒い影の中から昨日と同じ若い男が出てくる。
「なにがしたいんだ……」
「結構ボロボロだね。
そういえば名前を教えるんだっけ……
僕の名前はルード。ついでに目的も教えてあげるよ。
僕たちの目的は地球に魔力の塊を送り込むこと……
そして新しい魔法の世界を作り出すことだよ」
「そんなことして、なににになるんだよ……」
「僕が作り出すんだ。新しい魔法の世界の王は僕ってこと」
「もっとまともなやつだと思ってたけどな……」
「僕をバカにするのかい？
どっちにしろ僕の目的のためには死んでもらわなきゃいけないわけだし……
今すぐ殺してもいいんだよ？」
「勝手にしろ！」
聡一は魔法の合成を始める。
作り出すものはさっきと同じ黒い球体。
これを当てれば一撃で仕留められるはずだからだ。
黒い球体はルードに向かって一直線に飛んでいく。
当たった……
「そんな攻撃は効かないよ」
確かに当たったはずだ。
しかしルードは無傷。

「やっぱり今、殺すのはやめる。
簡単に新しい魔法の世界の王になってもつまらないからね。
じゃあこれからもたくさん敵を送り込んであげるから、がんばって強くなってね」
ルードはまた黒い影の中に消えていく。
「本当にあいつなんなの？」
「とにかく、これから現れる敵を全員倒せってことだろ……」
「そうだよね……そうしないと魔力の塊を送り込まれしまうもんね」
「うん。大変になりそうだけど……がんばるか！」
「そうだね」
「そうだ、こんなところに敵を送り込まれたら家も壊れるし、近所迷惑にもなるからひと気の無い場所に行かないか？」
「いいよ。それなら山奥のキャンプ場とかはどう？」
「うーん……今はキャンプをする家族も多そうだからな……」
「じゃあ普通に山奥に行こうよ。
それなら、あまり人に迷惑はかからないでしょ？」
「そうだな。今日はもう攻めてこないとは思うけど……一応、今日のうちに移動しちゃうか」
「そうだね。じゃあ私は荷物をまとめてくるね」
柚月は聡一のそばから離れていく。
「痛いな……」
聡一は服をめくり大男に殴られた場所を見てみる。
見ただけで殴られたのがわかるほど変色している。
「こりゃ、柚月には見せられないな……」
「聡一君ーあとなに持てばいい？」
「え？食べ物を出来る限りと着替えだけでいいんじゃない？」
「わかったー」
柚月は準備を進める。
「終わったよ」

リビングには大きな鞄が二つ置かれている。
この中にテントや食糧、着替えなど必要なものがほとんど入っている。
そう思うと柚月の荷物をまとめる能力が恐ろしく感じられる。
「どうする？」
「え？」
「いつ出発するの？」
「そうだな……もう行くか」
「うん」
柚月は鞄を持とうとする。
それを横から「俺が持つ」と言って聡一が持ち、家から出る。
ルードとの戦いが終わるまで、この家に帰ってくることはないだろう。
家に対して心の中で「行ってきます」と呟き、駅に向かう。

聡一の家からひと気の無い山奥まで行くとなると電車に乗り、
その後はバスで移動しなくてはいけない。
移動距離はあまりないのだがバスを待つ時間などの計算をしていなかったため
相当時間がかかってしまった。
山奥とは言っても下を見れば聡一の住んでいる町や海が見渡せる。

「あぁ、やっとついたー」
柚月は遊び感覚のようだ。
「テント張るの手伝ってくれないか？」
「いいよー」
二人で協力してテントを張る。
家には一つしかテントがなかった。
聡一はこのテントには思い出がある。
まだ幼稚園児だったころ、両親とともに一度だけキャンプに行った。

そのときは海に行き、食べ物は海で獲ったものだけで済ますという予定だったのだが
結局、近くのコンビニで食べ物を買って食べることになった。
今、思い出せばとても懐かしい。
もう父も母もいないのだけれど……
「聡一君、なにボーっとしてるの？」
「ごめん、ごめん少し昔のこと思い出してさ……」
「そう……次は何をすればいいの？」
「そうだな……火をおこしておくか」
近くにあった大き目の石を円形に集め、その中心に木を置く。
そして持ってきておいたライターと着火剤で火をおこす。
「なんか戦うために来たっていうのが嘘みたいだね」
笑顔の柚月を見ていると本当にそうであってほしかった。
できれば戦うことなどしたくなかった……
「戦いが終わったらさ……また来ようか」
「そうだね。今度は普通のキャンプ場でね」
「うん。そろそろ晩飯作るか」
西の空は、もうすでに燃えるような橙色になっていた。

ａｃｔ１７　新しい敵と美羽

「夕日、キレイだな」
「そうだね。こんなにちゃんと夕日を見たの初めてかも」
「俺もだな」
夕日に照らされながら二人は夕食の準備をする。

「やっぱり、こういうときはカレーだよな」
「だよねー　こういうところで食べるカレーは格別だよね」
「うん」
二人はカレーを食べるのに夢中になっている。
「ごちそうさま」
「ごちそうさまー　まさか聡一君が料理できるとは思わなかったよー」
「家に誰もいないから、いつも自分で作ってるからな」
「そうなんだー」
夕日も沈み空は暗くなっている。
そんな暗い空の中に輝くいくつもの星……
そして下を見るといつも暮らしている町の夜景が見える。
「キレイだねー　私たちの町ってあんなにキレイだったなんて知らなかったー」
「そうだな。空も見てみろよ。星なんて滅多に見ないだろ？」
「うん」
星と夜景を眺めたあと、二人はテントの中に入る。
寝袋はちょうど二つあった。
大きさも大人用のものなので問題ない。
「そういえば、この中で寝るんだよな？」
「そうだよ」
「俺、外に行こうか？」

「別にいいよ。聡一君なら」
「……」
それはどういう意味だ？
俺を信じているということか？
それとも……
いや、そんなはずはないよな……
「なに顔、赤くしてんの？早く寝ようよ」
「わ、わかったよ……」
柚月は平然と寝袋に入り、すぐに眠りにつく。
一方、聡一は無理矢理寝袋の中に潜り込むもののどうしても柚月のほうを意識してしまう。
「あぁ、もう！」
もっと深くまで潜り込み眠ろうとする……

☆　☆　☆

まわりが明るく感じる。
そして鳥の鳴く声……
どうやら一睡もできないまま朝になってしまったようだ。
寝袋から出て柚月を起こさないようにテントの外に出る。
そして少しだけ山の中を歩いてみることにした。
迷わないように慎重に奥へ進んで行く。
少し進んだところで風の流れが変わったことに気がつく。
「これって……魔法だよな？」
もしかすると新しい敵なのかもしれない。
柚月がテントで寝ているので近づかせるわけにはいかない。
テントのまわりはほとんど無風状態だったのに今は葉が揺れて音をたてているほどだ。
「どこだよ……」
色々な方向を見てみるが木が多すぎてなかなか見つけることが出来

ない。
そのとき風が吹いてきている方向がずっと変わらないことに気がつく。
ならば風上に行けばこの風の発生源に辿り着けるというわけだ。
風上に向かって歩き出す。
段々、風も強くなってくる。
そしてついに風の発生源を発見することに成功する。
「美羽さん？」
そこにいたのは美羽と三人の黒い服を着て顔を黒い布で隠している人がいる。
その様子から戦っていることは間違いない。
どうやらこの風の正体は美羽が魔法を使うときに、
無意識のまま発生させてしまう風のようだ。
三対一なので美羽は苦戦を強いられているようだ。
「美羽さん！」
「聡一君？こいつら敵だよね？」
「多分、そうだと思います」
「いきなり襲われたんだけど……」
「俺も戦います！」
今は美羽の風がある。
柚月の魔法は大量に吸収してあるので合成に苦労はしない。
一人の敵に狙いを定めてかまいたちのような風をおこす。
その攻撃は胸にあたり敵が倒れる。
「聡一君、強くなったわね」
「ありがとうございます」
「でも、それじゃダメ。私もさっきから何回も攻撃を当てているのに何度も起きあがってくるの。傷は残ったままなのに……」
「どうしてですか？」
「わからないわ。とにかく何か見つけられるまで戦い続けなくてはいけないわね」

「わかりました」
黒服の人たちは動きが変だった。
フラフラしているような……そして何より動きが遅い。
だから攻撃を避けることは簡単なのだが無駄に魔法を使うわけにはいかない。
「聡一君、ちょっと刺激強いかもしれないから目、閉じてて」
「え？」
美羽の一言に戸惑い目を閉じることできず、そのあとに起きることを見てしまう。
美羽が発生させた魔法は黒服の人の首を切り落とす。
そこからは、ありえない量の血が出ている。
聡一はそれを見て気持ち悪くなるが耐え続ける。

act18　地球の兵器

「これでも動くの？」
首を切り落とされた黒服は胴体だけで、こちらに向かってくる。
「どんな魔法使ったらこういうふうになるのよ！」
美羽は怒りと驚きを隠せないようだ。
「美羽さん、身動きができないようにすればいいんじゃないんですか？」
「どうやって？」
「俺もあまりやりたくはないんですが……体を切り刻みます」
「確かにそれなら、勝てるかもしれないわね」
「じゃあ、やりますよ……」
聡一は魔法の合成を始める。
物体を簡単に切れるだけ鋭い風を作り出し、それを黒服にむかって発生させる。
何発も発生させ、当てる位置も変えながら攻撃を繰り返す。
「ハァハァ……」
一度にこんなに魔法を使ったのは初めてだった。
そして人を傷つけたのも……
黒服の体はいくつにもわかれ、身動きがとれたとしても腕、足、胴体がバラバラなので攻撃をすることはできないだろう。
「これでももとの体に戻られたら俺、泣きますよ……」
「私もよ……」
美羽も他の二人を同じように切り刻んでいた。
黒服たちの体はバラバラにも関わらずそれぞれの部分で動いているのがわかる。
「なんで脳が繋がっていないのに動くんだよ……」
「もしかしたら、そういう類（たぐい）の魔法を使われているのかもね」
「そんな魔法があるんですか？」

「魔法の種類は無限だから、ありえるんじゃない？」

ズズズズ……

この音を何度聞いたのだろう……

音を聞いた瞬間にルードが現れたということがわかるようになってしまった。

「こいつらは、なんだったんだよ！」

「まぁまぁ、そんな怒らないで。怒りたいのは僕の方なんだからさ」

「なんでだよ！」

「敵が増えたから。それも強そうだし」

「聡一君、もしかしてこいつが？」

「多分、敵のリーダーだと思います」

「それじゃあ今日はまだ戦ってもらうからね。

次の相手はもしかしたら君たちが一番戦いづらいかもね」

「どういうことだよ？」

ズズズズズ……

またさっきと同じ音がして黒い影の中から黒い服を着た女の子が出てくる。

普通の中学生くらいの女の子なのだが、全く普通ではない。

右手に持っている、見るからに強力そうな銃器……

さらに背中には、もっと巨大な兵器のようなもの。

見える限りではこれだけだが服の形状などから、まだ武器を隠し持っていると思われる。

「戦争でもする気かよ……」

「聡一君、あの子が持っている黒いもの何？」

「地球で戦争をするときに使う道具です。危険なので気をつけてください」

「気をつけろって言っても、どんな道具なのよ……」
「あの先端から、ものすごい速さで弾丸が飛んできます。それに当たったら……」
「わかったわ。とにかく先端から出てくるものに気をつければいいんでしょ？」
「はい」
聡一は近くにある木の陰に隠れる。
美羽も同じように聡一が隠れている木とは違う木に隠れる。
運よく女の子は聡一たちが隠れていることに気づいていないらしい。
「なんで魔法使いの戦いに地球の武器が使われるんだよ……」
女の子は銃を構えると、それを乱射し始める。
銃声が森の中に轟き、まわりの木々はどんどんボロボロになっていく。
「これが地球の道具……」
美羽は驚き、その場に立ちつくしている。
美羽の前に立っている木も、もうボロボロだ。
そして女の子は美羽が隠れていることに気がつき、その方向に銃を構えている。
「危ない！」
聡一は美羽のいる方向へ飛び込み、美羽とともに地面に倒れ込む。
「大丈夫ですか？」
「え？うん……」
「どうすればいいんだよ……そうだ！重力だ！」
弾丸の進行方向と逆に重力を使えば、こちらには弾丸が飛んでこない。
地球で作られた兵器なのだから「通常」の状態の地球では強くてあたりまえ。
しかし、その「通常」の状態を狂わせてしまえば勝ち目がある。
次の発砲……それに合わせて魔法を発生させれるように魔法の合成を始める。

もう一度、銃を構えた女の子は聡一と美羽がいる方向に発砲し始める。
女の子の指の動き……それで発砲するタイミングを把握し、重力を発生させる。
銃口から放たれた弾丸は、女の子の方向へ飛んでいく。
女の子の頬に軽く当たり銃弾はそのまま飛んでいく。
女の子は驚いた表情のまま聡一から少し離れる。
そして女の子は服の中に隠していた手榴弾を投げつける。
これを女の子の方向へ飛ばしてしまえばこの戦いは終わるだろう……
しかしそれをするのは気がひけた。
聡一は誰もいない方向へ飛んで行くように重力を発生させる。
その方向で爆発する音が聞こえた。

act19　被弾

「聡一君、あますぎるよ。たとえ女の子でも敵なんだから……」
「わかってますよ！そんなこと……」
思わず声を荒げてしまう。
「もういいわ。あとは私がやるから」
「……」
なにも言い返すことができなかった。
美羽は女の子の方へ近づいていく。
女の子は背負っていた大きな銃を取り出す。
それに構わず美羽は女の子に近づいていく。
女の子の目は鋭く美羽を睨みつけている。
そして美羽に向けられている銃の引き金を引く……
聡一はその瞬間、目を閉じてしまう。
人が倒れる音……
美羽さんが撃たれた……
「美羽さん！」
目を開け、大声で叫ぶ。
「なに……」
腕から血を流し、その部分を押さえながら立っている。
そして、その前には女の子が倒れている。
「美羽さん！大丈夫だったんですか？」
「私が簡単に殺されると思う……？」
「そう……ですよね」
「へー　地球の武器が相手でも大丈夫なんだ」
「お前はなにがしたいんだ！」
美羽の表情や言葉の強さなどから怒っていることがわかる。
その様子を見て聡一も少し恐怖を感じる。
「君に言ってもわからないと思うけど？」

「いいから答えろ！」
美羽がここまで攻撃のために魔法を使ったのは初めて見た。
ものすごい強さの風……その風は渦を巻くように吹き荒れルードを切り裂こうとする。
しかしルードの目の前には黒い影が発生している。
ルードが現れた時と同じもののようだ。
美羽が発生させた風は黒い影に当たると段々、消えていくように弱まってくる。
「なにをした！」
「君たちじゃ、僕には勝てないみたいだね。
素直にあの女の子を僕と戦わせれば？」
ルードが言う「あの女の子」というのは柚月のことだと思われる。
「なんで柚月なんだよ！」
「わかんないの？あの子は最高の魔法使いだよ。
けっして強いわけではないけどね」
「どういう意味だよ！」
「さぁね。じゃあまた会おうか」
また黒い影の中へと消えていく。
「くそ……美羽さん、大丈夫ですか？」
「まぁ……なんとか……」
美羽は自分の服を破り、それを利用して出血を止めている。
「俺たちが泊まっているテントまで来てくれませんか？」
「……わかったわ」
美羽に肩を貸しながらテントに向かう。

テントにつくと柚月が朝食の準備をしていた。
「あ、おかえり。銃声みたいな音が聞こえてたけど大丈夫？
って美羽さん、どうしたんですか？」
「また、あいつに会ったんだよ。それで今度は銃を持っている女の子と戦わされた。

その前は体をバラバラにしても動き続ける三人組」
「え？もしかして今、戦ってたの？」
「そうだよ。美羽さんも一緒に」
聡一の肩を借りながら歩いてきたはずの美羽は気絶している。
「美羽さんは大丈夫なの？」
「多分……すぐに止血したから……」
「わかった。あとは私に任せて」
美羽をテントの中に運び、柚月が手当てを開始する。
どこでこんな知識を得たのか……
銃で撃たれた傷口でも迷うことなく手当てをしていく。
柚月の表情はとても真剣だった。
その表情を見ていると話しかけることすらできない。
本当はなにか手伝いたいのだが、できそうなことも無さそうだ……
柚月が手当てをしているのを見ながら自分の無力さを感じる。
美羽を守る事ができなければ、そのあと手当てもできない。
本当に役に立たない……

「よし、これで大丈夫」
柚月の持ってきていた包帯で腕からの出血を抑えている。
どうやら銃弾は体内に残っていなかったようだ。
美羽は、まだ眠ったままだ。
「聡一君、美羽さんが起きた時のために昼ごはん作っておこうよ」
「え？うん……」
「どうしたの？元気ないよ？」
「大丈夫……じゃあ作るか……」
聡一はテントの中から出ていく。
そのあと柚月もテントから出てきて昼食の準備を始める。

act20　買い物

どうやら持ってきていた食糧は意外と少なかったらしく、昼食を作る分をひくとほとんど残っていない。
「買い物に行かなくちゃダメみたいだね」
「そうだな。米くらいは買っておかないと……」
そんな話をしながら昼食を作っているとテントの中から美羽が出てくる。
「もう大丈夫なんですか？」
「うん。なんとか……」
「もうすぐ、お昼ご飯できるので待っててください」
「ありがとう」
昼食を作り終えて柚月がテントの外に置いてある折り畳み式のテーブルの上に運ぶ。
「そういえば美羽さんは、どうして地球に来たんですか？」
「あぁ、氷璃に言われて来たんだけど何をしていいかわからないんだよね……」
「どういうことですか？」
「地球に魔力の塊を送り込もうとしている奴らと戦えって言ってたけど……」
「それ、さっき戦った奴らですよ！」
「え？そうなの？」
「そうですよ」
柚月は片腕が使えないため食べづらそうに料理を食べている。
「それで、なんで君たちが狙われてるの？」
「それが魔力の塊を送り込むにはその周辺の魔力を無くさなくてはいけないらしくて……」
「へー　あと魔力の塊を送り込んでなにがしたいの？
多分そんなことしたら地球の常識が狂うわよ？」

「それが目的だって言ってましたけど……
こういう奴らの考えって全然、理解できませんよね」
「じゃあ、そいつらのリーダー……多分さっきいた奴だと思うけど
そいつ倒すまで私も地球にいるから」
「本当ですか？ありがとうございます」
「うん」
「じゃあ美羽さんも、ここに泊りますか？」
柚月のこの一言で聡一は昨日の夜のことを思い出す。
隣に柚月がいる……それだけで一睡もできなかった。
柚月だけにも慣れていないのに美羽さんまで増えるとなると……
「そうさせてもらうわ」
美羽さんも簡単に了承してしまうし……
これで今日の夜も眠れなさそう……
「聡一君、どうしたの？」
「え？なんでもないよ……」
その後、なぜか料理をすごい勢いで口に運ぶ。
まわりから見れば慌てていることがわかるのだと思う。
美羽も柚月も不思議そうな表情をして聡一を見ている。
「ごちそうさま」
聡一は一人だけ早く食べ終える。
そして、このあと買い物に行ったときに必要なものを確認する。
「聡一君、ごめんね。一人でやらせちゃって」
「いいよ。必要なものは……米と水……ラップも必要かな」
「ラップ？なんで？」
「皿の上にラップをかぶせて使えば洗う必要が無くなるでしょ？」
「そっかー　ここだったら水が大事だからね」
「うん。あとはなにが必要だ？」
「そうだなー……ご飯だけだったら栄養が偏るから
他のものを適当に買うくらいでいいんじゃない？」
「二人とも、買うもの決まった？」

「はい。ちょっと待ってください」
聡一は鞄の中から財布を取り出し、美羽の待っている森の外の道路に出る。
「そういえば美羽さんってコンビニ行ったことあるんですか？」
「あるよ。地球には、あんな便利な店があっていいな」
「はい」
久しぶりに美羽に会ったため会話が多くなる。
三人はコンビニまでの三十分ほどの道のりを歩いている間、ずっと話していた。

「やっと着いたね」
「うん。下り坂だったから楽だったけど帰りは荷物もあるし上り坂だから、もっと辛くなるな」
「もう……そういう話ししないでよー」
必要なものをどんどんカゴに入れていく。
このコンビニの場所が山奥なだけもあって、客はあまりいない。
買うものは、もう決まっていたのですぐに買い物を済ませることができた。
会計を済ませて、コンビニの外に出る。
そしてだれがどの荷物を持つのか決める。
「やっぱり聡一君が一番、重いやつだよね？」
「待て、柚月が魔法使えば全部の荷物が軽くなるんじゃないか？」
「たしかにそうだね」
「柚月ちゃん、魔法を無駄遣いしちゃダメだよ？」
「……わかりました。ごめんね、聡一君」
美羽は聡一の方を向いて笑顔になっている。
「ドSかよ……」
などと言えるわけもなく一番重い荷物を持つ。
上りになって実感するが結構、急な坂道だ。
「ハァ……ハァ……」

まだ半分も来ていないというのに息がもう荒くなっている。
「柚月ちゃん、かわいそうだしもう魔法使ってもいいよ？」
「わかりました」
柚月が魔法を使うと、さっきまで鉄のように重かった荷物が羽根のように軽くなる。
「おぉ、すげー　さすが柚月の魔法だな」
「ありがとう。早く行こうよ」
「そうだな」
聡一は荷物が軽くなったのをいいことに走り始める。
「ハァ……ハァ……上り坂って……辛いな……」
「聡一君って、おもしろいですよね」
「そうね。こっちまで楽しくなってきちゃう」
帰り道も同じように三人で話しながら歩いていく。
上り坂になったので歩く速度が遅くなりコンビニからテントまで四十分くらいかかった。

ａｃｔ２１　勝つための方法

「やぁ、待ってたよ」
「お前！」
テントに戻ると、またルードがいた。
「今度は何しに来た？」
「もちろん戦うためだよ。
今回は本気で決着つけるつもりだから、覚悟しておいてね」
前までのふざけた感じのルードとは少し違う。
目が真剣で殺意というのか何か恐ろしい感情で満ち溢れているように見える。
「じゃあ、いくよ」
どうやら今回は初めからルードが戦うらしい。
体には黒い影……そんな優しいものではない……その黒いものは「闇」だ。
見ているだけでわかる。
絶対に触れてはいけない、恐ろしいものだと。
「どうしたの？朝みたいに攻撃してきなよ」

ザァァァァ……

風の流れが変わる音がする。
美羽が魔法を発生させようとしているということだ。
そして竜巻をルードのいる位置に発生させる。
この攻撃はルードの挑発にのってしまったから行ったものではない。
風の流れが美羽は、いたって冷静であるということを伝えている。
竜巻は少しずつ大きくなりルードの姿が見えなくなっている。
竜巻は最大の大きさになると今度は少しずつ小さくなっていく。
そしてルードのまわりは「闇」に囲まれていて、ルード自身は無傷

だ。
「そんなんで大丈夫なの？」
ルードの手のひらに「闇」が集まる。
それは、なんの形になるわけでもなくただ影のように……
しかしその「闇」の範囲は確実に広がっている。
音を立てることもなく静かに移動を始めると棒のような形になった。
その形は不規則でどのような攻撃が来るのか、まったく予測できない。
「なんで攻撃してこないの？僕から攻めるけどいいの？」
そう言いながら近づいてくる。
「闇」も一緒に……
それには絶対に触れたくない。
とても恐ろしいものを感じる。
「……っ！」
美羽は慌てて強風を発生させ、ルードを近づけないようにする。
それを見た柚月はルードの進行方向とは逆向きに重力を発生させる。
その魔法を受けているにも関わらずルードの動きは一切変わらない。
「なんで！？」
「だから無理だよ。ちゃんと「殺気」を持たないと……」
ルードの目つきが変わっている。
殺気に満ち溢れた目……
柚月は黒い球体を発生させ始める。
これが「当たれば」勝てるのだが……
その球体はものすごい勢いで飛んでいく。
しかし、それは「闇」の中に消えていく……
「だから「殺気」を持たないと攻撃は当たらないって。
僕を殺さなきゃ君たちが死ぬんだよ？」
「闇」の範囲が一気に広がり周囲を包みこむ。
まわりは薄暗くなり、体には痛み……身体的なものもあるのだが他の痛みもある。

魔法を使うこともできなくされてしまうようだ。
しかし聡一には、それを吸収することができた。
迷わずそれの吸収を始める。
自分のまわりのものだけではなく、柚月や美羽のまわりのも吸収する。
吸収するのは簡単だった。
しかし、その後は体内に「闇」がある状態。
見ているだけで危険だとわかるものを体内に入れてしまったということだ。
「うっ！ハァ……ハァ……」
たったこれだけの弱い魔法を吸収しただけで
柚月の黒い球体を吸収したときと同じほどに疲れる。
「聡一君！大丈夫！そんな魔法吸収したら……」
「大丈夫です……」
「そう……気をつけてね。あの魔法、とても恐ろしいものだから」
「わかってます……」
「へー　君も結構戦えるみたいだね」
「うるせー！」
聡一は吸収したばかりの「闇」を柚月の魔法と合成させ始める。
新しく生まれた魔法も黒い影と変わらない。
そして感じられる恐怖も変わらない。
しかしその攻撃の対象はルードになっている。
つまりルードの魔法のコントロールを得たということになる。
「僕の魔法を使えるようにするなんて……」
それに対抗してルードも「闇」を発生させる。
二つの「闇」はお互いにぶつかり合い、ほとんど同時に消えていく。
「なんで君の魔法に殺気があるの？」
この言葉を聞いた時、聡一はあることに気がつく。
ルードの「闇」に対抗するためには「殺気」が必要だということ……
そして今の聡一が発生させた「闇」には「殺気」込めていなかった。

つまり合成後の魔法にもルードが込めた「殺気」がそのまま存在するようだ。

「これなら……いける！」

「なにかわかったの？」

「はい」

聡一の表情は少し明るくなっていた。

act22　増える敵

「どうやら何かわかったみたいだね。でも僕には勝てないよ」
またルードは「闇」を発生させる。
今度のものの形状は柚月の作り出す黒い球体に似ている。
その球体はこちらに向かって直線を描きながら聡一の方へ飛んでくる。
それに対抗するように柚月も黒い球体を発生させる。
そして二つの黒い球体がぶつかり合う。
黒い球体はどちらも消えていく……
たとえ相殺することはできてもそれ以上ができない。
これしかできないのなら負けないが勝つこともできない。
「どうすればいいんだよ……」
そのときルードの背後に黒い影が発生する。
この影からは「闇」から出ていた嫌な雰囲気は無い。
その中からは柚月が誘拐されたときに探すのを手伝った大男が出てくる。
「こっちは終わったぞ」
「ご苦労さま。もう少しそこで待ってて」
「どういうことだよ……」
「聡一君、一人増えたから気をつけてね」
「わかってます」
「さぁ続きを始めようか」
ルードの手のまわりにまた「闇」ができている。
今度はルード自信がこちらへ近づいてくる。
そして直接、攻撃を始める。
動きは普通の人と変わらないのだが手には「闇」がある。
それを吸収しようとすればルードの攻撃が当たるだろう。
「柚月ちゃん！魔法！」

美羽が柚月に指示を出す。
「はい」
柚月はその指示通り魔法を使う。
ルードの動きを封じるために重力を強くする。
少しだけルードの動きが遅くなる。
しかし聡一にとってはそれだけで十分だった。
聡一は一歩後ろに下がりルードの腕を掴む。
「この距離なら大丈夫だ」
ルード「闇」を吸収する。
そしてすぐにその魔法を柚月の魔法と合成させる。
発生した「闇」はルードの体を貫き飛んでいく。
「痛いな……」
ルードは落ち着いている。
貫通した場所は肩だったため命に別状はないようだ。
その傷口のところに「闇」が集まり始める。
そして「闇」が消えると傷は無くなっていた。
「なんで？」
「治癒も可能なのかよ……」
「即死させないとダメみたいね」
美羽の一言でルードを倒すための条件が一つ増えた。
そしてルードの後ろには敵が二人増えている。
これでルードを含めると敵の数は四人。
しかし後ろにいるやつらが戦おうとしないことが唯一の救いだった。
「さぁ、あと二人だ！二人が戻ってくるまでに僕を倒せるか？」
まだ二人、敵がいるということなのか……
もしもルードの言っていることが本当ならできるだけ早く倒さなければいけない。
「美羽さん、どうしますか？」
「どうするも……攻撃が当たらないからね」
「そうですよね……」

「まって、一つ試したいことがあるわ」
「なんですか？」
「次にあいつが魔法を発動させたら、それを吸収してすぐに攻撃してくれない？
その攻撃を防いでいる間に私と柚月ちゃんで攻撃するから」
「わかりました」
しかし、これを実行するにはルードが攻撃してこなくてはいけない。
こういうときに限ってルードは攻撃を仕掛けてこない。
作戦がバレているというわけではないのだが……
「柚月ちゃん攻撃して」
「いいんですか？」
「うん。柚月ちゃんの魔法から身を守る時に発動した魔法を聡一君に吸収してもらってあとはさっき言った通りにするから」
「わかりました」
柚月は黒い球体を作る。
いつもどおり落ち着いている。
その球体をルードのいる方向へ放つ。
「……」
ルードは無言のまま「闇」を発生させて身を守る。
「予定どおり！」
聡一はすぐにルードの近くに行き、「闇」を吸収する。
そして、その後の隙に柚月と美羽が攻撃を開始する。
柚月は連続して魔法を使ったので少し辛そうだ。
柚月と美羽の魔法がぶつかり合っているため様子があまり見えない
……

act23　撃破

「もう大丈夫だよね……」
柚月は肩が上下に揺れるほど息が荒い。
美羽も少し疲れがあるようだ。
段々様子が見えるようになってくる。
そこには人が立っている影が見える。
「まだダメなの！？」
「らしいな……」
「お前が死んだら意味ねーだろ！」
立っている人影はルードではなかった。
巨大な剣を横に構え盾のように使っている大男が立っている。
そしてその後ろには驚いた表情のルード。
「ほら全員そろったぞ。遊びは終わりだ」
「わかってるよ！」
なにを話しているのかわからない。
そしてルードの後ろには敵がさらに増えてルードを含めると六人になっている。
「やっと終わりだ……」
ルードは不気味に微笑んでいる。
そしてルード以外の五人が異動する。
もう一度ルードのまわりを「闇」が覆う。
その「闇」は形を変え周囲をドーム状になって包み込む。
「さぁ！これでやっと始められるよ！」
「闇」に囲まれているためまわりが薄暗く感じられる。
「なにを始めるんだ……」
「聡一君、もしかしたら魔力の塊を……」
「そんなわけないですよ。俺たちがここにいるんだから……」
「もしも、このドーム状の魔法が魔力を包み込んで

外部に影響がでないようにするためのものだとしたら？」
「……どうすればいいんですか」
「多分もう手遅れだと思うわ」
美羽は遠くを指差す。
その先には光るものがある。
とても大きくてものすごい力を感じる。
「まさか……あれが魔力の塊……」
「多分そうね」
「さぁ、これで僕の願いが叶う！」
ルードのまわりにある「闇」は確実に強力なものになっている。
「もう終わりにするよ」
どんどん「闇」は巨大化していく。
そしてドーム状の「闇」の中を埋め尽くしていく。
聡一は両手を大きく広げてできるだけ広範囲の「闇」を吸収できるようにする。
少しずつだが確実に「闇」を吸収できている。
後ろにいる柚月と美羽には絶対に「闇」を触れさせてはいけない。
そう思い必死に「闇」を吸収しつづける。
そして後ろの柚月と美羽は攻撃を始める。
美羽は今までに聡一に見せたことが無いほど強力な魔法を。
柚月は今までにやったことがないほど連続で魔法を使い続けている。
「無駄だよ！」
聡一は「闇」を吸収し続けているはずだった。
しかしどんどん「闇」の範囲は増えていく。
このままでは後ろの柚月と美羽にも被害が……
「くそーッ！」
大声を出しながら聡一は吸収と合成を同時に行う。
こんなことをしたのは初めてだ。
「闇」を吸収しながら「闇」を発生させる……
吸収した分と新たに発生させた「闇」が打ち消していく分、

これが止められる「闇」の限界だ。
それでも足りない。
「聡一君！もう少し頑張って！」
美羽の表情はとても恐ろしくしかし頼もしく見えた。
かまいたちが実体化して見えるほど巨大になっている。
それは「闇」を切り裂き、どんどんルードに近づいていく。
「私もがんばる！聡一君もがんばって！」
柚月も全ての力を使い今までで最大の大きさの黒い球体を作り出す。
黒い球体は「闇」を貫きルードに向かっていく。
「これで終わりだ！」
聡一は吸収をやめ、合成に全ての力を使い「闇」を発生させる。
聡一の作り出した「闇」はルードの「闇」をのみ込んで行く。
「まさか……僕の負け……」
聡一、柚月、美羽三人の魔法はルードに当たり全ての魔法が消えていく。
そして倒れているルードはなぜか嬉しそうな表情している……

act24　五人の敵

「終わった……」
「まだよ……他に五人いるわ」
「やるしかないですよね……」
「待って、聡一君は魔力の塊を吸収して。あれがあれば常識が狂うから……」
「わかりました……」
聡一はフラフラのまま魔力の塊に近づいていく。
「闇」の中から解放されて体に照りつける木漏れ日はとても気持ちがいい。
「まさかルードが負けるとはな……
しかし魔力の塊を消されるわけにはいかない。悪いが俺たちとも戦ってもらおう」
「お前らの相手は私たちよ！」
柚月と美羽は立ち上がり五人を見ている。
「ほう、ずいぶん元気な女の子たちじゃないか！」
巨大な剣を持っている大男が剣を振り上げ柚月に飛びかかる。
その瞬間、柚月は重力を発生させると大男は地面に叩きつけられる。
「聡一君……早く魔力の塊を……」
柚月の声は、とても無理をしているように聞こえる。
少しでも早く終わらせるために聡一は動かない足を無理矢理進ませる。
そして魔力の塊に右手をつける。
その瞬間にとても強大ですごい魔力だとうことがわかった。
正直、全て吸収しきれるか不安だ。
「聡一君！なにやってるの！早く初めて！」
「わかりました」
魔力の吸収を始める。

ルードとの戦いで体内に溜まっていた魔力を全て使ったため、魔力が空の状態で吸収をすることができる。
後ろでは柚月と美羽が戦っている。
二対五のため、かなり不利だがなんとか互角の戦いに持ちこんでいる。
柚月の魔法で相手の動きを止め、そこへ美羽が攻撃をする。
これを繰り返しているだけのため攻略されてしまえば勝ち目が無くなる。
敵の一人が柚月から離れる。
その位置はちょうど柚月の魔法の範囲外だ。
近くの敵に集中しているため柚月も美羽もそのことに気が付いていない。
その敵は遠距離攻撃用の魔法を使う。
光の線が柚月に向かって放たれた。
その光の線は柚月の魔法の範囲に入っても早さが変わらず進み続ける。
しかし少しずつ進む方向が下になってくる。
柚月はそのことに気がつき足下に来ることがわかったので少し飛んでそれを避ける。
しかし離れた位置からの攻撃が可能な敵がいるということは、これから戦うのにさらに不利になる。
「柚月ちゃん、遠くの敵にも集中して！」
「わかりました」
美羽の言うとおり遠くの敵にも集中すると柚月の魔法が弱くなってしまう。
そのことに本人たちは気づいていないため敵の動きが早くなって見える。
「！？」
美羽はかまいたちを使い襲いかかって来た敵に反撃する。
――柚月ちゃんの魔法が弱くなっている！？

でも近くの敵だけに集中させたら危険だし……
なら、できる限り私が遠くの敵を攻撃して隙を作らないと……
美羽は遠距離にも届く魔法に切り替える。
そして柚月の魔法の範囲外にいる敵に対して攻撃を仕掛ける。
こんなに遠くの敵に攻撃するのは初めてだったため、うまく制御ができない。
そのせいで簡単に避けられてしまう。
しかし美羽の魔法が敵に届くまでの時間の間、敵は攻撃に集中しているはず。
その隙を利用して一気に敵に近づく。
そして遠くから使った魔法を避けた瞬間に別の魔法を使った。
この距離ならば間違いなく当たる。
隙だらけの敵にとっては美羽の魔法を避けることは不可能。
美羽の魔法は敵に直撃し、その敵はその場に倒れ込んだ。
「あと四人……」
美羽は少し安心していたが柚月は一人で四人の敵の相手をしている。
つまり敵の攻撃対象は柚月になっているわけだ。
これならば背後から強力な一撃を叩きこむことも可能だ。
一撃で全員を仕留める自身は無かったが、一人でも敵を減らせればいい。
美羽はもう一度、攻撃の準備をする。
「気づかないと思ったか？」
後ろから、とても低く恐ろしい声が聞こえてくる。
驚き振り返ると、そこには一人の大男が立っていた。
大男は巨大な剣を振り上げている。
その動きは遅く隙だらけだ。
楽々避けることができた。
しかし、そこから流れるように攻撃が繰り出される。
予想外だったがこの大男の弱点は「遅い」こと。
それでも避けるのがギリギリだった。

次の攻撃に備えて美羽も攻撃をする準備をし、魔法を使う。
魔法は大男の脇腹に当たり服が赤く染まっていくのがわかる。
「ウッ……」
大男は剣を地面につき、体を支えている。
これで二人目を戦闘不能にした。
残るはあと三人。
これだけ長い間戦っていて生き残る相手だ。
今までの二人ほど簡単に倒せるはずがないだろう。
柚月は残りの三人を相手に身を守ることしかできていなかった。

act25　魔力の光

敵の背後から美羽はかまいたちを発生させ、攻撃する。
そんな簡単に当たるわけもなく敵に楽々避けられる。
そのとき美羽の方に一人の敵が近づいてくる。
「邪魔しないでくれないかな？」
若い男、見た目は普通なのだが恐ろしい笑みを浮かべている。
右手には長さ三十センチほどの刀……
その小さな刀から繰り出される攻撃は今までとは格が違うほど早い。
そのせいで避けることはできなかった。
しかし浅くしか当たっていないため美羽はなんとか耐えている。
――攻めなかったら負ける！
美羽はどのように戦うかを考える体力は残っていなかった。
そのため使っている魔法もとても雑で危険なものだ。
「そんな魔法の使い方しても無駄だよ」
美羽の攻撃は一切敵に当たっていない。
それでも美羽は魔法を使うことをやめなかった。
――ただ魔法を使うだけ……
それでもやらないよりはマシ。
聡一君だって魔力の塊を吸収するのをがんばっているんだから……
そう自分に言い聞かせ、魔法を使い続ける。
その横では柚月が戦っている。
戦っているとは言っても柚月は全く攻めれていない。
自分の身を守るのが限界らしい。
そして前には巨大な魔力の塊を吸収し続けている聡一の姿。
皆、必死で戦っている。
そのとき聡一が吸収しているはずの魔力の塊が光を放つ。
この光は聡一たちにとっては希望の光……

敵にとっては絶望の光に感じられただろう。
皆、目を閉じている。
いつの間にか戦いもおさまっている……
どれだけの時間、光が発生していたのだろう……
十分……二十分……もしかしたら、たったの一瞬だったかもしれない。
光が消えた後に残っていたものは、ただ立ちつくす柚月と美羽……
そして倒れている聡一。
敵の姿は、もうなかった。
柚月の瞳からは涙がこぼれている。
静かにそれは流れ続けている。
「柚月ちゃん、もう終わったんだよ……」
「はい……とても怖かったです……」
美羽は柚月を抱きしめている。
柚月は美羽の胸の中で静かに泣き続ける……
「そうだ……聡一君は……」
「柚月ちゃんは優しいね。聡一君なら大丈夫よ」
柚月と美羽は倒れている聡一の近くに行く。
気絶している聡一からはものすごい魔力が発せられている。
このことは、まだ魔法についてあまり詳しくない柚月でも感じることができた。
「これは少し聡一君がんばりすぎたかもね……」
「大丈夫なんですか？」
「大丈夫だと思うけど、一応むこうの世界に連れていくわ」
「私も行きます」
「わかったわ。じゃあ早速行くわよ」
聡一の横で美羽は移動するための魔法を使う。
ブラックホールのようなもの……
柚月と美羽はその中に聡一を抱えて入っていく。

☆　☆　☆

「ここは……？」

聡一は重い体を無理矢理起こして、まわりを見る。

誰かの家のようだ。

この部屋には見覚えがある……

ガチャ

ドアが開き、氷璃が入ってくる。

「もう大丈夫なの？」

「はい。なんで俺はここにいるんですか？」

「魔力の塊を吸収してて気絶したんじゃないの？」

「そういえば……美羽さんと柚月は！？」

「あの二人がここまで運んできてくれたのよ。

聡一君が無理してたみたいだって言って」

「そうですか……」

「気分はどう？まだダメ？」

「もう大丈夫です。それで魔力の塊はどうなったんですか？」

「あぁ、あれなら強力な光を放って消えていったって言ってたわよ？」

「そうですか……じゃあ美羽さんと柚月は、あの五人を倒したんですね……」

「違うわよ。その敵は魔力の塊が放った強力な光にのみ込まれていったらしいわよ」

「さぁね。聡一君の合成魔法が奇跡を起こしたんじゃないの？」

「そんなことありませんよ……俺はなにもしてませんよ」

「そう……じゃあ柚月ちゃんと美羽が返ってきたら、魔力の塊のまわりでおきたことについて、推測だけど説明するからもう少し休んでて」

「わかりました」
氷璃は部屋から出ていく。
聡一はもう一度、布団に潜り眠りにつく。

act26　光の正体

「聡一君、起きて」
聡一は聞きなれた声で目覚める。
目を開けると柚月の姿があった。
「聡一君、早く！氷璃さんが色々説明してくれるって」
「わかった……」
聡一は起き上がり、皆が待っている部屋に向かう。
その部屋には柚月、美羽、氷璃の三人がいる。
「じゃあ全員そろったから、始めるわね。
まず魔力の塊が最後に放った光なんだけど……」
「それは俺じゃないですよ」
「待って、これから説明するから。
その光は多分、聡一君が無意識のうちに合成を始めちゃったからだと思うの」
「だから俺はなにもしてませんって……」
「ううん。美羽から聞いた話によると、あの量の魔力を吸収するのは無理だと思うわ。
だから聡一君の体が限界に達した時、
今までに吸収した魔力とまだ吸収していない魔力を合成して、
強力な光の魔法ができたんじゃないかな？」
「そうなんですか？」
「確信は無いけど、それしか考えられないからね。
それで、そのとき聡一君が吸収した魔力はこっちの世界に来て全て放散されちゃったの。
そのときの様子は私も見ていたから間違いないわ」
「それって、なにか困るんですか？」
「うん。地球の魔力だから、もしかしたら悪影響が出るかもしれないわ」

「どうすればいいんですか？」
「その魔力の塊は、この世界のあちこちに散らばったからそれを回収しなくちゃいけないわね」
「どこにあるかわかりますか？」
「それは、これからやるわ。だから今はわからないわね」
「じゃあわかったら俺に回収させてください」
「いいの？それぞれの「魔力自体」と戦うことになるわよ？」
「吸収すればいいんじゃないんですか？」
「そんな簡単に回収できるようなものじゃないわ。一つ一つ違った戦いを強いられるうえに、どれもかなり強力なのよ？」
「それでもいいです。俺が持ちこんだ魔力なんですから」
「そう……じゃあ私も着いていくわ。多分、相当危険だと思うから……」
「わかりました。魔力の位置がわかったら教えてくださいね」
「わかったわ。柚月ちゃんと美羽はどうする？」
「私にも責任があります。」
「しょうがないわね。私も行くわ」
「よし、じゃあ私はこれから魔力の位置を確認するわ。結構、時間がかかると思うから聡一君と柚月ちゃんは地球に戻ってもいいわよ？」
「こっちの世界にいてもいいですか？」
「いいけど……戻らなくてもだいじょうぶなの？」
「どうせ、やることないですから。柚月はどうする？」
「私も残ります」
「じゃあ前と同じ部屋を使っていいわよ……
あぁ、柚月ちゃんが使ってた部屋が今使えないから二人とも一緒の部屋でいい？」
「え？」
「私はいいですよ」

「じゃあ、そういうことで。あとはゆっくりしてていいわよ」
「わかりました」
「……」
また柚月と同じ部屋に泊る事になるとは思わなかった……
「あ、聡一君だけちょっと待ってて」
氷璃の要望通り聡一だけが残る。
柚月と美羽は部屋に向かっていく。
「聡一君、ちょっとお話があるんだけどいい？」
「いいですよ。でも、なんで俺だけ残したんですか？」
「話しの内容が内容だからよ。私の質問したことに全部ちゃんと答えてね」
「わかりました……」
「柚月ちゃんとは、どこまでいった？」
「は？」
何言ってるんだ、この人は。
でもそんなことを正直に言うわけにはいかない。
「だから、どこまいっての？
呼び方も変わってたみたいだから、なにかあったのかなーって」
「ありませんよ！」
「なんで？柚月ちゃんのこと好きなんじゃないの？」
「それは……」
「じゃあ今日はがんばってね。せっかく同じ部屋にしてあげたんだから」
「……」
「もう部屋に行っていいわよ。なにか進展あったら教えてねー」
「いやです」
少し怒り気味に言った。
それなのに氷璃は笑顔のままだ。
楽しんでいるのだろうか……
よくわからないが、なぜか氷璃の表情から悪意は感じれなかった。

純粋に聡一と柚月のことを想っているのだろう。
聡一は階段を上り部屋に戻る。
ガチャ
「あ、聡一君やっと戻って来た。なんのお話だった？」
「なんでもないよ……」
あの会話の内容をそのまま言ったら、俺が困りそうだ。
「なーんか怪しい……まぁいいや。暇だから、なんかしようよ」
「なにする？」
「トランプ」
「懐かしいな。いいけど二人でやってもおもしろくないよな？」
「じゃあ美羽さんを誘おうよ」
「そういえばトランプ持ってきてるの？」
「うん。じゃあ美羽さん呼んでくるねー」
柚月が部屋から出ていく。
「トランプなんていつぶりだろう……」
ベッドの上にあるトランプをケースから出して眺めてみる。
カードはあまり傷ついておらず新品のような感じだ。
「聡一君、美羽さんつれてきたよー」
「うん」
「私ルール知らないわよ」
「大丈夫。教えるから」
そう言うと柚月はカードを配り始める。

act27　トランプ

「どうすればいいの？」
「まぁ、配ったカード見て」
「すごい！キレイな絵、描いてあるんだ」
「うん。その絵が重要なんですよ」
「なんのゲームやんの？」
「大富豪に決まってるじゃん！」
「いきなり難しくないか？普通、初めはババ抜きとか……」
「じゃあ、そうする？」
「そうだろ」
「えーと……ババ抜きってなに？」
「ジョーカーを最後に持っている人が負けっていうルールです」
「ジョーカーって、なに？」
「これですよ」
聡一は自分の持っていたジョーカーを見せる。
「これ？なんか他のと比べて派手じゃない？」
「そうです。で、これを最後に持っていた人が負けです。じゃあ。やってみましょうか。聡一君からスタートで……」
「ちょっと待って。美羽さん、まだ出してないから」
「なにすればいいの？」
「同じ数字のカードを出せばいいんです」
「こういうこと？」
美羽は二枚のカードを出す。
「そうです」
「これとこれも同じ？」
美羽はクイーンのカード二枚を見せている。
「はい。これは似てるやつがあるので気をつけてくださいね。上の端のところに記号が同じやつが同じ数字です」

「大体わかったわ。このあとはどうするの？」
「相手に手札を見せないようにして、お互いにひきあいます。今は聡一君の番なので一枚ひかせてください」
「わかったわ」
美羽は手札を聡一の方へ近づける。
そして、その中から一枚選んでカードをひく。
「こうやってひいて、手札の中に同じ数字のカードがあったら最初と同じように出してください」
「結構、簡単なルールね。次は？」
「私の手札から一枚ひいてください」
「……」
美羽は無言のまま柚月の手札を一枚ひく。
何度も繰り返しているが柚月の手札しか減っていかない。
「やった！あがり！」
柚月が最後の二枚を出す。
「ちょっと待て。始めてから俺の手札、一枚も減ってないぞ？」
「私も……」
「え？どういうこと？」
「知らないけど、お前なんかしたよな？」
「なにもしてないけど？」
「まぁ、いいわ。続けましょう。柚月ちゃんがそんなことするとは思えないしね」
「そうですね」
ババ抜きは二人になれば一回ひくごとに手札が減っていく。
ジョーカーをひかなければ……
美羽は覚えたばかりだというのに聡一とまともに戦えている。
とはいっても、ただの運……
「どう？二人になったときの心理戦は？」
柚月が言うには運ではないらしい。

心理戦……もしかすると最初から聡一と美羽の手札が減らなかったのは
柚月の圧倒的な心理戦の強さのせいなのかもしれない。
「そんなものねーよ。ただの運だろ？」
聡一は美羽の手札から一枚ひく。
「あ！」
ジョーカーをひいてしまった。
美羽が少し笑っているように見える。
「もしかして、これも心理？」
「そうよ。私の番ね」
美羽が聡一の手札をひく。
これでジョーカーではないほうをひかれると聡一の負けだ。
「やったー！」
美羽が最後の一枚を出す。
「聡一君、初めてトランプやった人に負けるってどういうこと？」
「いや……運だろ……」
「実力だよ？じゃあ次のゲームで美羽さんに勝ってね」
「わかったよ……やるゲームは？」
「七並べは？」
「美羽さん、ルールわからないだろ……」
「教えながらでも大丈夫だよ」
「私なら大丈夫よ」
「じゃ、始めますか」
柚月はカードの中から七を集め縦に並べる。

act28　魔法の世界のゲーム

「私からでいい？」
「いいよ」
柚月はスペードの六を出す。
そして聡一がダイヤの八を出す。
「どうすればいいの？」
「続いてる数字のカードを同じ絵のところに出せばいいんですよ。ジョーカーは自分の持っているカードが出る場所に置いたらダメですよ」
「わかったわ」
美羽はスペードの五を出した。
この後は順調に進んで行く。
「クローバーの十、止めてるの誰だよ」
クローバーの十の位置にはジョーカーが置かれている。
手札の枚数は聡一が二枚、柚月が一枚、美羽が一枚だ。
「私だよ」
柚月がジョーカーを取り、クローバーの十を置く。
そして聡一がクローバーの十一、美羽が十二と置く。
「はい、これで聡一君最下位だね」
最後の一枚……クローバーの十三の位置にジョーカーを置き、手札がなくなる。
「柚月……俺が負けるようにしてないか？」
「うん」
「……」
ここでなにも言い返せないのが情けない。
「でもイカサマはしてないよ」
「イカサマしなくても俺を最下位にできるのかよ……」
「うん。聡一君のやりたいことなんて、まるわかりだよ」

「……」
なんか嬉しい気がする……のは聡一が意識し過ぎているだけなのかもしれない。
「聡一君、顔赤いよ」
「なってませんよ……」
美羽に言われたが柚月はなにも気にしていないらしい。
いつもどおりの笑顔のままだ。
「次はなにする？今度は真剣勝負で」
「わかった」
「今度は聡一君が決めてよ」
「うーん……」
「ねぇ、二人とも今度はこっちの世界の遊びをしない？」
「やってみたいです！」
「私も！」
魔法使いがする遊びというだけで、なんとなく楽しそうだ。
「じゃあ、持ってくるからちょっと待ってて」
美羽は部屋から出ていく。
「どんな遊びなのかな？」
「わかんないけど、楽しそうだよな」
「うん。魔法が使える人がする遊びってことは、もっとすごいことだよね」
ガチャ
「おまたせ」
部屋に入って来た美羽は一枚の板を持っている。
「これですか？」
「うん。準備するから、ちょっと待ってて」
そう言うと美羽は板を床に置き、準備を始める。
「始まるよ」
板の真ん中に白い水晶がある。
その水晶が光るとともに、その中に吸い込まれていく。

「ここは？」
「さっきの板の上よ」
「え？小さくなったってことですか？」
「そう。これはそういう遊びだから。はい、これ持って」
美羽は聡一と柚月に刀を差し出している。
「どうするんですか？」
「戦うのよ。死んだらもとの大きさに戻るから。痛みも感じないし」
「もしかして、これってそういう遊びですか？」
「そうよ。魔法で戦うことはあっても武器を使って戦うことはめってにないからね。
戦う練習にもなるし、楽しめるしいいんじゃない？」
「これって遊びじゃないよな……」
「いいんじゃない？楽しそうだし。それで誰と戦えばいいんですか？」
「あぁ、このゲームは日本の合戦を見本にしてるから今から敵がたくさん攻めてくるわよ。
だから、その敵を倒していけばいいの」
「わかりました。武器はこれ以外にないんですか？」
「あるけど、多分これが一番使いやすいと思うよ」
「わかりました」
「……」
「聡一君、もしかして怖いの？
痛みも感じないし死んでも大丈夫なんだよ？」
「いや、楽しそうだなーって思って」
そのとき前のほうが騒がしくなってくる。
そして、たくさんの武器を持った人たちがこっちに向かって走ってくるのがわかる。
「本当に合戦みたいだ……」
「そうよ。じゃあ戦うわよ。魔法は使えないからね」
美羽さんは慣れているようだ。

相手の攻撃を最低限の動きで避けて攻撃を正確に当てている。
敵に攻撃があたっても血が出ないようだ。
しかし攻撃を受けた敵は倒れていく。
「美羽さん、すごいね」
柚月も剣を使って攻撃を始める。
攻撃を避ける動きに少し無駄があるように見えるがちゃんと避けれている。

act29　地球の魔法使い

「魔法つかえるようになっただけで動体視力も上がるのかよ……」
これが正しいかどうかはわからないが柚月を見れば、なんとなくそんな気がする。
聡一は遊びなのだから楽しもうと思い、剣を握る。
敵の攻撃を見て気付いたが本当に動体視力が上がっている。
どういう原理なのかはわからないが、とにかく相手の動きがよくわかる。
そのおかげで避ける、攻撃をするを何度も繰り返すことができる。
魔法が使えないのにここまで戦えたのは予想外だった。
敵を全員無傷で倒すまでに三十分ほどかかったと思うが実際はもっとかかっていただろう。
「二人とも強いのね」
「魔法が使えるようになると身体能力があがるんですか？」
「そんなことないわよ」
「でも……すごく戦いやすかったんですけど……」
「それは聡一君が強くなったからじゃないの？」
「本当にそれだけですか？」
「まぁ地球から来たんだから例外はあるかもね。柚月ちゃんは？」
「私もです」
「そう……もう終わりだし戻るわよ？」
「わかりました」
また水晶が光る。
そして気がつくと、もとの部屋に戻っていた。
「そろそろ魔力の位置の分析も終わったと思うし氷璃のところに行きましょうか」
美羽が部屋から出る。
そのあとをついていくように聡一と柚月も部屋から出る。

☆　☆　☆

「どう？場所わかった？」
「大体の位置はわかったわ。明日から回収を始めましょうか」
「わかりました」
「じゃあ今日は、もうご飯食べて寝ましょう」
氷璃はキッチンに向かい夕食の準備を始める。
それを見た柚月と美羽もキッチンへ。
「あのー　俺もなにか手伝えませんか？」
「聡一君は、ゆっくりしてて」
「……」
料理ができないというわけではないのだが……
というか結構、得意だが言葉に甘えることにした。
一人で椅子に座って夕食が完成するのを待つ。

「お待たせ」
柚月、美羽、氷璃の三人がテーブルに料理を並べる。
「いただきます」
テーブルに並べてある料理を食べていく。
「魔力の塊って、この近くにあるんですか？」
「一つだけね。歩いて十分くらいのところよ」
「それ以外に何個あるんですか？」
「正確な数はわからないけど、多分十個くらいあるわ」
「そんなにあるんですか……」
「うん。それも全部、どうすればいいかわからない状態で回収しなくちゃいけないからね」
「結構、大変そうだね」
「でも俺たちが持ちこんだものなんだからなんとかしないとな」
「うん」

柚月がとても真剣な顔をしている。
聡一たちは夕食を食べ終えて入浴を済ませた後、それぞれの部屋に戻り寝ることにした。

「そういえば、この部屋ベッド一つしかないね」
「俺は寝袋で寝るから柚月が使っていいよ」
部屋の端には山奥に泊っていた時の道具が置かれている。
「でも、それじゃ聡一君に悪いよ……」
「そうは言っても一緒に寝るわけにはいかないだろ？」
「私は……いいよ……？」
柚月は顔を赤くしている。
ここで断れないようだったダメだ！
自分に言い聞かせ、答える。
「わかった。そうしよう」
「え？いいの？」
「え？」
なにを言ってるんだ……
断るはずじゃなかったのか……
「じゃあ私、もう寝るから。聡一君も早く寝なよ？」
「う、うん……」
確かに早く寝なくては明日、困る。
しかし柚月と同じベッドで寝るのは少し……
あー、もう！
迷っていても仕方ない。
覚悟を決め、柚月の隣に寝る。
「やっと来てくれた」
柚月がとても嬉しそうにしている……
天使のようなかわいさだが今は悪魔の笑顔でしかない……
柚月の体は聡一の方を向いている。
ベッドが意外と大きかったため、体はそこまで近いわけではない。

耳元でスー、スーと柚月が息をする音が聞こえている。
柚月の顔を見ると、もうすでに目を閉じている。
「もう寝たのか。寝顔もかわいいな……」
そう思って柚月の頭を撫でる。
「くすぐったいよー」
「え？起きてたの？」
「うん」
これはヤバい……
寝ているからといって、調子に乗った聡一が悪かった。
絶対にひかれただろう……
明日から柚月といるのが気まずくなりそうだ。
それも近くにいるのは男が聡一一人だけ。
このことが美羽と氷璃が知れば、その二人にも嫌われるだろう。
「また顔赤くしてる。聡一君、かわいいね」
なんで暗いのに顔の色が見えるんだよ……
まぁ、事実なのだが。
「正直俺のこと、ひいたろ？」
「ぜーんぜん。嬉しかったし」
「え？」
「本当だよ。私、聡一君のこと好きだから……」
「それって……」
「……私と付き合ってくれる？」
「うん……」
「やったー　私、聡一君が初恋の相手だったんだよ？」
「俺も柚月が初めてかな……」
「お互い様だね」
柚月は布団の中で聡一の手を握る。
「今日は眠れなさそうだなー。すごく嬉しいもん……
でも寝なくちゃいけないよね。明日、大変だし」
「そうだな……柚月、おやすみ……」

「おやすみなさい」
聡一と柚月はお互いの手を握ったまま眠りについた……

このとき聡一と柚月の部屋の外に一人の人がいた。
「作戦、成功ー　柚月ちゃんおめでとう」
「氷璃、盗み聞きとかやめなよ」
「いいじゃない。私がこうなるように手助けしたんだから」
「そうだけど……」
「それにしても地球の魔法使いってすごいね」
「なにが？」
「戦いも強いし……」
「他になにかあった？」
「「恋の魔法」よ」
「氷璃もそういうこと言うんだ……」
「なに？おかしかった？」
「だって、絶対に来いとか無縁の生活してるでしょ？」
「まぁね。でも……」
「でも、なによ？」
「なんでもないわ。じゃあ私たちも寝ましょうか」
「そうね」
「明日からよろしくね、最高の地球の魔法使いの聡一君と柚月ちゃん」
「最高の……ね……私もそう思うわ」
「じゃあ、行きますか」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1385w/

魔法の合成師

2011年10月11日11時07分発行